

全国町並みゼミ
宣言集
1978～2022

(付) 各ゼミの概要

特定非営利活動法人 全国町並み保存連盟
(最終改訂：2023年7月17日)

結成宣言

私達は、わが国の伝統ある町並みや集落を一体とした環境を保存するため、三地区合同の町並み保存連盟を結成し、広く全国の保存グループに呼びかけるとともに、より良い生活環境づくりに邁進することを誓います。

1974年4月17日

町並み保存連盟



「郷土の町並み保存と、より良い生活環境づくり」をモットーに、名古屋・奈良・長野三地域の住民組織が名古屋市有松町に集まって「町並み保存連盟」を結成した。江戸時代の古い民家を中心とした町並みや集落が日本の文化財保存の新しい方向となりつつあるとき、民間人の手で保存運動をすすめていこうという初の全国組織。こんごは、広く全国各地の保存グループに呼びかけて、美しい郷土を取り戻す“保存の輪”を広げてゆくことを決めた……。 (昭和49年4月18日・朝日新聞)

この日の空は青く晴れあがっていました。会場は旧家の広い座敷。「今井町を保存する会」「妻籠を愛する会」「有松まちづくりの会」の代表約20人が席を囲みます。医者、僧侶、郵便局長、絞問屋や旅館の主人、農民、サラリーマン、さらにご隠居さん……。みんな手弁当でやってきた地域の住民ばかり。だが、その席には、共通の願いが赤い炎となって燃えていました。それは、代々の祖先が築いてきた由緒ある町並みや集落を、大切に生かしながら、さらに発展させなければ、いつの日にかきっと後悔する……。

以上は、昭和51年に作られた連盟紹介のパンフレット『町並みはみんなのもの』の冒頭の一節である。私もその場に同席していたが、当時の熱い雰囲気は、満20年経った今でも、生々しく思い出す。とくにモットーを論議する中で、「一軒の民家は個人の大事な財産だが、外観は、祖先伝来の町みんなのものだ」と、都市景観の原理をずばり言っただけの住民の知に、いたく感動したものだ。

(平成6年(1994)年「第17回須坂大会レジュメ」石川忠臣)

有松・足助宣言

日本の各地で歴史的町並みの保存運動を行っている住民組織の連合体である「全国町並み保存連盟」と「全国歴史的風土保存連盟」は協力して、1978年4月22、23日、名古屋市有松町で第1回の「全国町並みゼミ」を開催した。地元の住民を中心に、全国から住民運動にたずさわっているもの、自治体関係者、専門者、研究者など500人が参加した。その討議を通じて私ども参加者はつぎの事項を確認した。

すなわち、歴史的町並みを中心とする歴史的環境の保存の問題は、いまや環境問題の焦点になってきたということである。それは地域の創造であり、町づくりである。さらにそれは、物的な整備にとどまるものではなく、新しい人間関係の確立であり、その中心は未来をになう子どもたちのためのすぐれた環境の創造である。

こうした地域の創造の主体は、住民であり、自治体であり、それに協力する専門家である。この三者が、それぞれの特性をいかしながら確かな協力関係を築きあげていくことである。

私どもは、きょうを出発点に、歴史的環境保存の運動の輪をさらに全国にひろげていくことを宣言する。

1978年4月23日

近江八幡宣言

歴史的環境を守る運動をすすめている住民組織の連合体である「全国町並保存連盟」は、「よみがえる近江八幡の会」「近江八幡青年会議所」「近江八幡市」「全国歴史的風土保存連盟」など7団体の協力を得て、1979年6月23、24日の両日、滋賀県近江八幡市で、第2回「全国町並みゼミ」を開いた。

地元の住民を中心に、北海道から九州まで全国から集まった約20の住民運動組織の代表をはじめ、建築史や都市計画などの研究者・学生および町並み地区の地方自治体と文化庁・環境庁・国土庁など行政関係者ら計約700人が参加した。そして、参加者の数もさることながら、その顔ぶれの多彩さ、報告にみられた運動の多様さが、今回のゼミの目立つ特徴であった。その2日間の討議を通じて、私どもはつぎのことを確認した。

すなわち、町並みを中心とする歴史的環境は、そこに生きる地域住民のすぐれた生活環境を構成する主要な要素であり、その破壊は、公害や自然環境の破壊などと並び、現代の環境問題の焦点になってきたことである。さらに歴史的環境は、地域の特性と文化を表現する基本的な要素であり、地域に誇りを持つ住民の精神的連帯のシンボルである。これらは住民と自治体が協力して保存・再生した、さらに創造すべき公共の財産である。地方の時代といわれる今日、この価値はますます重視すべきものになってきた。

しかるに、小樽市、伊勢市などでは、都市開発事業の名のもとに、歴史的な環境の直接的な破壊の危機が存在し、しかも憂慮される事態がさしせまっていることが報告された。私どもは、今回の町並みゼミの名をもって、これら歴史的環境の破壊行為につながる計画を即時中止し、地域の未来のための新たな視点からの歴史的環境の保全策を再考されるよう、強く要請する。

私どもは、今日を出発点に、各地の個性ある歴史的環境保存・再生の運動をさらに深めるとともに、その運動の輪を全国にひろげ、前進することをここに宣言する。

1979年6月24日

小樽・函館宣言

全国各地で歴史的環境の保存と再生、さらに創造に取り組んでいる住民組織の連合体である「全国町並み保存連盟」は、1980年5月24日から27日までの4日間、北海道小樽市と函館市で、第3回「全国町並みゼミを開いた。

「小樽運河を守る会」「小樽夢の街づくり実行委員会」「函館の歴史的風土を守る会」を主とする地元の住民を中心に、全国から集まった約30団体の住民運動組織の代表者をはじめ、歴史的環境問題の研究者・学生、この問題と日夜取り組んでいる地方自治団体や文化庁、国土庁などの行政担当者など計約500人が参加した。

今回の町並みゼミの特質は、第一に、その会場を小樽市を中心に選んだことである。小樽市では、道路計画にともなう小樽運河の埋立て問題が今や大詰めを迎え、その行方は地元のみならず、全国的な強い関心を集めている状況にある。私ども参加者は、運河の現場を見、市民の話を聞き、あらためて運河問題と取り組む住民運動を心から支持することを確認した。

第二の特質は、小樽市をはじめ全国各地で展開されている環境運動の現地報告に加え、あらたに3つの分科会を開いて、歴史的環境問題の直面している問題点と運動の展望を話し合ったことである。すなわち第一分科会は、長崎市・中島川を中心とする都市計画を事例に、保存運動と住民の理解と参加の問題を討議した。第二分科会は、伊勢市・河崎地区の水辺の歴史的環境保存運動をケースに、保存と開発の原則を探究し、その見直しを話し合った。第三分科会は、愛知県・足助町の町並み運動を具体例に、保存・再生の制度・事業のあり方をめぐり、行政と運動の関わりと問題点が追及された。

これらの討議を通じて確認されたことは、歴史的環境の保存・再生の事業こそ、80年代の都市計画事業の中心にすえられるべき課題だということである。住民の環境問題への関心は、公害から自然保護へ、さらに、歴史的・文化的環境の保存へと拡大、深化するなかで、住民の「情報公開」「住民参加」の要求はますます高まっている。これらの原則の上に立って、住民と行政担当者の協力になる歴史的環境保存の長期計画をたてるのが、今ほど要請されているときはない。その長期計画にもとづく行政と住民の参加こそが、地域の文化の創造の基盤になると同時に、ひいては地域経済の発展にも寄与するものであると考える。

しかるにわが国の歴史的環境行政の現実をみると、国、地方自治体を通じてその予算は、開発行政とくらべてあまりにも少ない。「文化の時代」といわれる80年代こそは、これら予算の飛躍的増大とともに、税制面の改革、融資制度の確立の必要性が迫られている。

さらに、今回の町並みゼミの第三の特質は、住民運動のもつ歴史的先駆性である。その運動の経験をもとに歴史的環境運動は、公害反対運動、自然保護運動と連係し、広範な町づくり運動の核となるべき展望を自ら切り拓いてきた。そして、その過程において住民運動は、目的を達成するために、ときに政治勢力との協力関係が重大課題となるが、基本的原則としてあくまでも住民運動の独立性を貫くことの重要さが確認された。

私ども参加者は、全国的視野に立って、あらためて小樽運河の保存・再生の問題の重要性を

認識し、現在、北海道都市計画地方審議会ですすめられている審議に、強い関心を示すことを認識した。さらに、全国各地で起っている歴史的環境破壊の現実、たとえば、伊勢市河崎の河川問題、金沢市の駅前再開発問題、香川県琴平町の高層建築問題などが、地域の歴史的環境保存の方向で解決されることを強く要望する。

私どもは、今日を出発点に、地域づくりの主体として、第3回「全国町並みゼミ」のテーマである“あたらしい町自慢の創造を”の輪を全国に拡げ、前進することを、ここに宣言する。

1980年5月27日

琴平宣言

全国町並み保存連盟は1981年6月6日から8日まで3日間、香川県琴平町で、第4回全国町並みゼミを開催した。地元の「こんぴら門前町を守る会」および全国各地で歴史的町並みの保存と再生、町づくりと取り組んでいる住民組織25団体をはじめ、研究組織、行政関係者等400人が参加した。これには地元の自治体・琴平町をはじめ観光団体、商工団体、日本建築学会四国支部などが後援した。

今回の全国町並みゼミは、わが国の歴史的木造建築物の美と卓越性に関する記念講演にはじまり、現地琴平町の調査報告に続き、参加者一同はこんぴら門前町の歴史的環境をつぶさに見学した。

また地方からの報告は、高度な理念に裏付けられながらも、きわめて多角的な実践的課題を提起した。

第1分科会においては、地元琴平町の町並み保存と商業活動の関係をめぐって討議した。土地固有のものが来訪者にとっても真に価値あるものとして評価すべきであることが指摘された。

第2分科会においては、妻籠の事例をもとに討議し、現代の利便性が絶対的な優越性をもつかどうかについて疑問を投げかけた。また歴史的環境の保存が住民生活の向上に資するための方策について検討した。

第3分科会では、京都の伏見、三条・烏丸通りの事例を中心に討議したが、一方では伊勢・河崎の町並み取りこわしの映画上映、小樽運河・東京飯田堀の埋立ての動向の報告を通じて歴史的環境の危機に際して行政と住民の関係改善、住民参加のシステム、環境アセスメント、情報公開の必要が指摘された。また、地域・地区における総合的な計画のもとに、町並み保存運動が多様な形式・手法を駆使する必要があることが強調された。

以上、今回の全国町並みゼミの特質は

第1に、これまでの討議を重ねてきた町並み保存の理念の上に立ち、その実現をめざし、現実的な都市づくり、町づくりに具体化する討議に終始したことである。

第2には、歴史的町並み保存はそれ自体が目的ではなく、地域に活力とうるおいをもたらす、より良い生活を築く町づくりのための手段であると合意されたことである。

第3には、この町づくりのためには、その地域固有の確固とした展望と、住民・行政・研究者の協力が不可欠であることが再確認されたことである。

私ども参加者は、今回のゼミを契機として、歴史的町並み保存を核とした町づくりの運動をさらに前進させることを宣言する。

1981年6月8日

東京宣言

全国町並み保存連盟は、全国歴史的風土保存連盟その他の団体・個人の友情に支えられて、1982年7月17、18日の両日、東京目黒区こまばエミナースで、第5回全国町並みゼミを開催した。北海道帯広市から沖縄県竹富島にいたる、およそ500人が参加した。

今回のゼミは、連盟加盟組織のない首都で行われた。準備は、首都圏に分散する有志を実行委員会に組織することから始められたが、一つの成果として「東京ウォーキング・レポート—発見と復権—」を生んだ。そして、東京にも守らなければならないふるさどがあることを確認した。

また「東京からのメッセージ」が、前環境庁長官と日本女子大教授によって、各地からの参加者に贈られた。自然保護も、福祉も、人の幸福を願うことにおいて町並み運動と心は一つであることが共感された。

東京ゼミはまた、初めて中央四省庁の担当者を招き、住民の代表とともにパネル討議「行政と住民の対話」を行った。そこでわれわれは、遅すぎたとはいえ、各省庁がおしなべて、その施策に歴史的環境保存を折りこみ、住民、市民の要望にも応えようとしていることを了解した。

とはいえ、中央・地方を通じて、行政が技術・機構ともに未成熟で、いまだに縦割、割拠などの弊害を克服できず体質改善を迫られていることが、記念講演「日本の行政体質と町並み運動」によって鋭く指摘された。

今回のゼミのさらに大きな特色は、「語ろう明日の町並み町づくり」の標語に基づく「各地からの報告」にあった。長く暗いトンネルを抜けて今ようやく曙光を仰ごうとする地域、重要伝統的建造物群は選定を受けたが、意外に困難な事業に絶望する心を、各地域の報告が支え起こしてくれたと言う若い行政担当者、建築基準法の規制により由緒ある温泉街とそこでの生活が危機にさらされているという孤老の訴え、さらに、部落審議会の決議により参加し自然及び、歴史風土・町並みの崩壊を憂え訴える島の人々、等々、切実真摯、かつ具体的な問題提起であった。反面、先進地域の事例は参加者に勇気と展望を与えた。

特別報告が、先進都市萩市と後発の三重県関町の両首長によって行われ、行政の壁に悩む多くの住民組織に、町並み保存の施策を自治体計画の中核に位置づけることの意義と展望を自覚させた。

各報告は互いに共鳴をよんだが、一方では、初参加者を含む多くの参加者の発言に、町並みゼミおよび町並み保存連盟の強力な支援への期待がこめられていた。そのことは、今回の新規加盟が11団体におよび、連盟組織が一挙に31に飛躍したことでも裏づけられている。

以上のような中央・地方行政ならびに住み組織の新たな展開に対応するため、町並み保存連盟事務局は、次のような、連盟の組織強化をめざす提案を行った。(H)従来の団体加盟制に加え、個人会員制を実施する。(I)機関誌(紙)を発行する。(K)連盟事務所を東京に常設する。これをめぐって特に財政確立の急務が論議され、提案の骨子が承認された。

以上の経過をふまえ、第5回町並みゼミは参加者の高揚する意志に基づき、次の諸点につい

て合意した。

1. 歴史的町並みなどの保存・再生が、町並み地区のみならず都市・農村などの全体像に寄与することを自覚し、町並み運動を自治体計画の中枢部に位置づけることを志向する。
 2. 私益により、あるいは偏った行政判断によって歴史的環境の損壊を企てる動きに対しては、断固として反対する。そのために互いに情報を交換し、連帯する。
 3. 従来にもまして、住民・行政・専門家の連携を進める。そのために、お互いの啓発と相互批判に努める。また町並みを支える広範な市民との連帯を強めることに努力する。
 4. 連盟事務局の体制を変革し、地域の諸活動の要望に応じて支援できる条件をつくる。
- 全参加者は、ただちに明日を担う活動に進むことを決意し、右、宣言する。

1982年7月18日

白杵宣言

第6回全国町並みゼミは、1983年6月11日から13日まで、大分県白杵市中央公民館およびリーフデ号ゆかりの黒島で、白杵市、白杵青年会議所、大分県建築士会など16団体の協力を得て、開かれた。地元大分県をはじめ九州各地、北は北海道小樽、函館など全国か約550人が参加した。

記念講演では、経済学者の宮本憲一大阪市立大学教授が、「町づくりと住民参加アメニティを考える」という題名で、都市経済学的立場から、人権が保障された快適な居住環境を求めるアメニティ思想の解明を行なった。そして、日本の現状は、きびしいとはいえ、町並み保存を含む住民主体の町づくり運動が最終的には達成されるという確固とした展望を示した。

全国各地からの報告は46におよび、町並み初の保存財団設立を実現した妻籠、450人の会員を擁して創造的な組織活動をすすめる足助、行政の災害復旧計画のなかに伝統的な石橋の復原を入れることを約束させた長崎中島川などの先進地区の報告、また酒蔵地区の高層マンション建設に反対する京都伏見、道路拡張工事がすでに着工されている大分県杵築と愛知県津島、さらに計画見直しの気運が高まる中でヘドロ固化工事が進められている小樽運河など、切実な運動報告がつづいた。一方、2年にわたる根強い運動で自然破壊の総合中学建設計画を撤回させた武家屋敷の町角館、東京の巨大ビルのほとりでひそかに息づいていた明治の宣教師館に対する主婦たちの草の根保存運動の成功などが共感をよび、また法律家集団がようやく歴史的環境に接近しようとしている新しい動向、さらに地球的視野からの新しい視点の必要性など、対象および観点はきわめて広範多岐にわたった。

第一分科会は「商業近代化と町並み保存」というテーマで、城下町杵築の事例報告があり、商業振興と町並み保存の接点が流通革命思想を超えた価値観において追及されるべきことが指摘された。第二分科会「点在する歴史遺産の保存」は、レストレーション（修復・再生利用）の意義を総合的にとらえること、歴史遺産の保存には多様な視点で接近することなどが強調され、指定制度に代わる登録制度の普及が提言された。第三分科会「伝統民家の改造問題」では、太平宿とシドニーのテラスハウスの事例報告があり、歴史的環境の保存・再生の中での創造活動の必要性が討議された。

今回のゼミの特色は、第一に歴史的環境に対する自治体行政の積極的な姿勢転換の事例が目立ったこと。第二は、地域活動活性化の課題を初めて実現したことである。地元白杵の努力により九州の住民・市民団体を多数結集し、今後の地域町並み運動の前進に大きな可能性と展望を開いた。第三には、環境教育の必要性および町並み保存運動における思想と文化運動の視点が強調されたこと、である。

さらに、このゼミを契機に全国町並み保存運動連盟は、会則の一部を改定して、個人会員および法人会員の制度を中心とする画期的な組織改革を行ない、新しい一步を踏み出すことになった。

白杵湾の潮騒とともに、宣言する。

1983年6月13日

太平宣言

新緑の離村集落・長野県飯田市大平宿につどったわれわれ400余人は、伝統民家での生活の原体験を基点に、豊かな自然環境と歴史環境の融和を求めて、今後の運動をすすめるべきことを確認する。右宣言する。

1984年5月28日

第7回全国町並みゼミは1984年5月26日から3日間、りんご並木の街飯田市公民館ならびにいろりの里大平宿を会場に、全国から400人余りの仲間を集めて開催された。

全国町並み保存連盟10周年を祝う今回のゼミの特徴は、ひとつには歴史を重ねて運動を展開してきた各地の運動団体が当初の運動目標を乗り越えて新しい活動の局面を切り拓いてゆく姿勢を明らかにしたことであり、ひとつには、自然環境や土木文化財等の保存を含めたよりひろい環境運動を展開してゆく姿勢を示し始めたことである。

いろりでの食事をはさみ、長時間つづけられた5つの分科会は、今回のゼミの新機軸であった。分科会では木造建築を都市から基本的に排除しようとしている建築基準法に対して疑義が差しはさまれた。とくに危機に直面する木造3階建の早急な全国的現況把握が望まれる。一方、伝統民家の改修復元の経験が、町並み各地に蓄積されてきている現況が報告された。ついで、今日残された町並みが商業振興の有力な手がかりとして再生されうることが提示された。地域の生態系との協調が歴史的環境を保存することにつながることを確認された。また過疎の実情を保存へのバネとする方策が検討された。そしてこれからの町並み運動は、より広い地域の人々の支援を背景に、徹底した民主的な討論が基本となることが示された。

3日間のいろりの生活を通じて、われわれ参加者一同は心からの友誼を深め、豊かな空間とゆるやかな時間とを自らの内に回復したことを確認した。町並み運動は新たな友情のきずなを築きえたと確信する。

上は宣言文にいたる内容のまとめである。

龍野宣言

全国町並み保存連盟は、1985年6月15日から17日までの3日間、兵庫県龍野市で第8回全国町並みゼミを開催した。地元共催団体の龍野・霞城文化自然保勝会の献身的な協力のもと、全国から集まった歴史的環境の保存と再生の問題にとりくんでいる住民運動組織の代表者、研究者・学生、そして行政担当者など約550人が参加した。今回のゼミで注目されたことは、姫路市長をはじめ伊丹市長、地元の龍野市長など自治体行政の責任者自らが積極的に参加したことである。今や歴史的環境は地域社会の形成にも重要な位置を占めることが、広く認識されてきたからであろう。

記念講演では、技術史家・吉田光邦京都大名誉教授がこれからの住生活のあり方を確立することが町並み保存の課題であると、問題提起をおこなった。

各地からの報告は、43団体から行われ、それぞれの地域で多種多彩な活動が展開されていることが示された。町並み保存の一部先進地区での観光公害への傾斜が報告され、注目を集めた。

総会につづいて3つの分科会が開かれた。「工業化の波をくぐりぬけていく町並み」をとりあげた第1分科会では、近代の工業化のなかに地域社会を育てる可能性を探る途が提起された。第2分科会「経営の質と町並みの味」では伝統的都市での商店経営の様々な知恵が紹介され、地域に根ざした本物をつくりつづけることが経営の基本である点で合意が得られた。第3分科会「松波の民俗学」では、過去の良い生活を伝承し評価することが、新しいまちづくりの基本となるべきことが確認された。現代の技術は日々の生活を改変するためにあるのではなく、生活を支え豊かにするためにこそあるのである。

今回はじめて行われた新しい試みは、職能別交流会と研究発表会である。職能別交流会では8つの会場や、町並みの市町村議員や商店主から研究者や一般市民まで、幅広いテーマのもとに同じ仕事にとり組む仲間たちが歴史的環境をめぐる交流の時間を持つことができた。それぞれの地域で直面している問題や研究課題を分析し解明することを目的とした研究発表会では、12件の報告が深夜までつづいた。

今回のゼミの特質は、第1に、歴史的環境保全再生に携わる各地方自体の成果が目に見えるかたちで蓄積されてきたこと。第2に、各地の町並みがかかえている問題がそれぞれ異なり、保全再生をめざす運動は創意をこらし多彩に広がっていることが明らかになったこと。第3に、町並みの保存とは単に建造物の復旧にとどまらず、町の生活を受け継ぎ、新しい安定した生活のあり方を見直すことにまで至るべきであるということが明らかにされたこと。第4に、町並みの環境はまた次の時代を担う子供たちの教育の場として重要であるという認識が現れてきたこと、である。これは歴史的環境そのものが子供の情緒を育ててゆく教育環境であるということを示している。

3日間の全員参加による熱のこもった討議のすえ、われわれ第8回全国町並みゼミ参加者一同は、町並みの保存・再生の問題は現代の環境保全の運動であると同時に、優れた文化運動で

あることを認めるに至った。21世紀へ向けて歴史的環境保全の運動が実りあるまちづくり運動として、そしてまた安定した生活像を希求する文化運動として、さらに前進することを確信する。

今回のゼミに示された龍野市民のかたがたの誠意に満ちたご支援に深く感謝するとともに、龍野市のこの優れた歴史的環境が見事に保存され、地域発展の基盤となることを期待する。

新緑の龍野にそよぐ薫風とともに、右宣言する。

1985年6月17日

会津宣言

第9回全国町並みゼミは、1986年7月19日から21日までの3日間、会津復古会を中心に大内宿保存会、会津北方風土会など22団体の協力を得て、福島県会津若松市、下郷町大内宿、さらに喜多方市を会場に、いわゆる“会津ゼミ”として開かれた。そして地元をはじめ全国各地から、地域住民・市民を中心に、自治体関係者、研究者・学生など約450人が集まり、町並み運動をすすめる団体は56を数えた。参加者の中で今回とくに目立ったのは、新顔の行政職員と、外国人研究者であった。

記念講演では、建築史家の伊藤ていじ前工学院大学長が、歴史的町並みの建築を愛する前に、町並みをつくり保ってきた町の人々を愛することの重要性を強調し、町並みの保存を支えてきた女性の力の大きさを指摘した。大内宿の町並み価値の発見者である、相沢韶男武蔵野美術大学教授は、大内宿の建物の保存だけでなく、古来豊かに展開されてきた道具文化のひろがりについて述べ「世界と交流する大内宿」という展望を語った。

今回のゼミの主なテーマである「町並みと商人文化の創造」に関するシンポジウムは、15周年を迎える会津復古会の活動、とくにその“会津商法”成果を実地見学した上で、これまでの町並みと商業振興といった論点からさらに一步進んで商人文化について論議が集中した。人々に感動を与える創造性豊かな商法が、そのまま歴史的建造物を生かした店づくりにつながるものが、強調された。

また喜多方市でのパネルディスカッションでは喜多方市長など地元関係者も参加し、市内に点在する数多くの見事な蔵をネットワークとして結びつけ、歴史的環境として保存活用する方向が確認された。

「各地からの報告」は、全国町並み保存連盟団体会員の中34団体が運動の現状と展望を報告、さらに今大会で新たに加盟した、「ふるさと津島を知る会」（愛知県津島市）、「古町を愛する会」（岡山県大原町）、「御成小の改築を考える会」（神奈川県鎌倉市）、「栃木蔵街暖簾会」（栃木県栃木市）、「熊川宿町並み保存委員会」（福井県上中町）の5団体が、直面している問題について語った。

第1分科会「町並み保存とふるさと産業おこし」では、大内宿の保存運動の今後のあり方を展望し、子供たちがとどまるまちを創造してゆくことが保存再生の根幹となるべきことが提示された。第2分科会「町並み・保存と再生」では、喜多方をはじめ川越、伏見、古河、白杵など蔵のある町の保存、再生の事例が紹介された。さらに蔵の多様な利用方法が検討されるとともに、蔵を修復する技術者の養成の必要性が指摘された。第3分科会「これからの町並み保存」に関しては、全国的な視野から、全国町並み保存連盟の今後のあり方も含めて、これまでの10年をこえる町並み運動の成果と今後の展望が語られた。伝統的建造物群保存地区制度発足10年、古都保存法制定20周年を迎えた今年、町並み運動がひとつの転機にさしかかりつつあるという認識のもとに展望をきり開く努力の重要性が論議されたが、十分な結論には達しなかった。

今回のゼミの特質は、第1に、開催地“会津”の町並み運動の特色が色濃く反映したことである。とくに会津復古会商法の現実が討論を活性化した。第2に理念的には、町づくりにおける女性の寄与が再認識されるとともに、町並み運動持続の目的には自らの町に誇りを持って住みつづけることであり、そのためにも住民自身の創造者として研鑽の重要性が主張された。第3に、町並みゼミのやり方への批判、とくに運営委員会のマンネリ化が指摘され、全国町並み保存連盟の活動が一種の曲がり角にあることが確認され、これらを乗り越えるための一層の努力の必要性が力説された。

歴史的環境豊かな会津地方の益々の発展を祈念しながら、右宣言する。

1986年7月20日

松阪宣言

第10回を迎えた全国町並みゼミは、全国町並み保存連盟が主催し、1987年6月6日から8日までの3日間、三重県松阪市を中心に三雲町、多気町、明和町で開いた。ときあたかも松阪開府400年であり、世界的には国際居住年である。あいの会「松坂」、三重県建築士会松阪支部青年部、そして松阪市など地元自治体の献身的な協力のもと、全国から約600人と、これまでになく多くの人々が参加した。

記念講演では、建築家・清家清東京芸術大学名誉教授が、日本の伝統的家屋の特質について述べ、西欧社会の住居との文明論的な対比を行なった。

そして10年目の大会を記念して全国町並み保存連盟では、郵政省の「一連の建築景観行政」、大分合同新聞社の「精力的な町並みキャンペーン」、財団法人観光資源保護財団の「長年にわたる町並み保存事業」に対し、特別表彰を行ない、その功を讃えた。

さらに記念の行事として、スライドとインタビューで構成された「10年の歩み」が、東京の若手会員の手で公演された。この町並みゼミは、1987年、名古屋市有松町・愛知県足助町で第1回をスタートとして以来、近江八幡、小樽・函館、琴平、東京、白杵、大平宿、龍野、会津若松・大内宿・喜多方と毎年回を重ねて、ここに松阪大会を迎えたのである。この間、町並み保存の住民組織3団体で発足した全国町並み保存連盟は、ゼミごとに仲間をふやし、今年「信州・須坂町並み会」を迎え、今大会で59団体に成長した。公演は、このような10年の足跡をたどりながら21世紀に向かっての運動の展望を切り開くとともに、あらためて「初心忘るべからず」と誓いあったのである。

松阪は、蒲生氏郷築城の城下町であり、参宮街道に面した宿場町であり、商人の町である。そこからは本居宣長をはじめ数々の人物が輩出している。こうした歴史的風土のなかで、町並みゼミ参加者は3つの分科会に分かれて、松阪地方の現地調査を行ない、それをもとにして歴史的環境の保存・再生ならびに地域創造の方策について討議した。とくにその討議には地元の発案でバズ方式が採用され、全員が発言できたことが注目された。

すなわち第1分科会「城下町」班では、城下町松阪の現状を詳細に足と目で見学したのち、「近代化と氏郷の町づくり」をテーマに議論を展開した。そこでは、松阪城跡を中心に点在する町並みと寺院群が形成する風格と生け垣をはじめとする緑の豊かさを高く評価するとともに、水辺の空間への配慮と、都市景観に対するデザイン・ポリシーの確立の重要性が指摘された。あわせて天守閣再建構想、一部の公共建築のデザインと色彩、中心地の道路拡幅計画などへの疑問が提出され、これらについて市民の論議が高まることを期待する声が聞かれた。

第2分科会「参宮街道」班では、北方探検のパイオニアである松浦武四郎の生家をはじめ、街道に沿って点在する宿場町の歴史の跡をたどり、「生活と歴史的な道路」をテーマに議論を深めた。とくに三雲町では、武四郎没後100年に当たる1988年に記念館を建てる計画が明らかにされ、参加者の強い共感が得られた。また街道の市場庄での見事に磨かれた千本格子が話題になり、誇りある保存をつづけていける背景には、充実した農業経営の安定さが存在する

ことが指摘され、それがまた環境教育の生きた現場であることが認識された。

さらに第3分科会「商人文化」班は、松阪市と近郊の町まちに出かけて、豪商のふるさとを訪ね、重厚、豪壮な住家や寺院の存在に目を見張り、多数の古文書を保存する「射和（いざわ）文庫」に文化の香りを満喫した。「町並み保存とその拠点」をテーマにした討論では、松阪商人の波乱に富んだ歴史の一層の解明がなさるべきことが強調され、伝統的町並みは、地域の歴史的文化的物語性と一体となって、その価値がさらに光彩を放つことに注目して、歴史民俗資料館の建設と、地域の歴史を伝える「語り部」の育成が要望された。また町並みに沿った榎田川の改修によって、旧家を彩る古木や竹林が伐採される恐れのあることが指摘され、町並みと榎田川河川敷の一体的保全が強調された。

今回の3日間の松阪ゼミを通して確認されたことは、第1に、出席者一同が今年10年を迎えたゼミの歴史の重さをかみしめ、この間の住民を中心とした町並み運動が、我が国民の歴史的環境に対する関心を高めて町並みの保存・再生の機運を盛り上げ、さらに町づくり・村おこしに数多くの提言や実践を行なうことによって、自治体および日本の環境行政の確立とその質の向上に寄与してきた誇りを、改めて自覚したことである。

第2に、歴史的環境の保存・再生に力点を置いてきたこの10年の運動を基盤にして、これからはさらに未来に向かって、町と村の本来のあり方を求めてふるさとづくりへの考察を深めるとともに戦後の復興とその後の成長期を通して築かれることの少なかった「歴史の評価に耐えるすぐれた地域環境の創造」に取り組むことを、決意したことである。

そして第3に、とくに今回の分科会活動を通して、新しい歴史的環境観を合意するに至ったことである。松阪市に点在する城下町の歴史的建造物や参宮街道に沿って散在する個々の宿場町などを検証すると、それぞれの規模は小なりといえども、武家屋敷、商家、町家、農家、くるわ跡など多彩でかつ質も高く、城を中心に全体として個性的なたたずまいを有している。すなわち、従来独立した別個の文化財としてみられてきたものを、線で結びつけ、あるいは一定の広がりを持つ面としてとらえることによって、そこにまとまりのある歴史的環境が形成されていることを認識したことである。いわゆる、これまでの町並みゼミでも提起されていた「ミニ町並み群」の思考の実践的確認である。このことによって従来、文化財保護法による「重要伝統的建造物群保存地区」の選定が、集中的に存在する歴史的建造物群に限定されてきたのに対し、これからは、地域的に散在している歴史的建造物をも、共通する特性を発見することによって相互に連帯させて、これもまた「重要伝統的建造物群保存地区」として選定すべきことを文化庁当局に要請することが提唱されたことである。

今回の町並みゼミに示された松阪市とその周辺の人々の、誠意と熱意に満ちたご支援に深く感謝するとともに、松阪地方にもすばらしい姿で歴史的町並み地区が継承されていくことを祈念し、緑濃い伊勢平野から、右宣言する。

1987年6月8日

竹富島宣言

“手づくりゼミ”としてすでに定着した全国町並み保存連盟主催の「全国町並みゼミ」は、第11回として1988年6月4日から6日までの3日間、日本の最南端に近い亜熱帯の島・竹富島において島の全人口300人弱の島をあげての温かいもてなしと協力のなかで、全国各地から参集した約300人によって開催された。

オープニングの記念講演では、地元沖縄県出身で“沖縄学”の第一人者である外間守善法政大学教授が、「沖縄の歴史と文化」と題して、竹富島の村落構造と歴史、文化的個性についての研究成果を語り、21世紀へ向けての竹富島の活性化にとっては、伝統と創造を知性と理性で主体的に考える、しなやかなバランス感覚をもつことが必要であり、これは竹富島にとどまらず人間社会の当面する課題である、という言葉で締めくくられた。

ついで竹富島の民族芸能が紹介され、子供達からお年寄りまでの島民総出演の舞台を眼のあたりにして、この島に積み重ねられた歴史と文化の厚みが今なお生きつづける姿に、強い感動を味わった。

第2日は、全国各地の団体あるいは個人から運動の現状と問題点を訴える「各地からの報告」を聞き、つづいて3つの分科会に分かれ、今日の町並み運動に課せられた問題点をより深く追求した。

第1分科会は「竹富島の昨日・今日・明日」をテーマにして、町並み調査のはじまりから昨年の伝建地区選定に至る経緯を皮切りに、島の重要産業である養蚕などの歴史、また祭事などが生んだ芸能と文化の伝承が語られた。ついで伝建地区の活用に関しての具体的な問題点が検討され、さらに今日的課題である観光開発とリゾート計画へと討議が進展し、島のこれからは住民の意志に基づく全集落の繁栄につながるものでなければならないことが認識された。

第2分科会は「都市の歴史的建造物が危ない」をテーマに、愛媛県・宇和小学校、長崎香港上海銀行、東京駅問題と丸ノ内再開発、神戸の近代建築保存、さらに古都奈良・京都における建物の高度規制緩和策などの具体的事例をめぐって討論が進められた。それぞれの建築物にはその町の景観との歴史的な関連、それを支える社会のあり方など町並みの視点の重要性が語られ、そして効率や経済活性化の名のもとに進められる一連の都市開発や規制緩和には、市民・住民が感性と知性を研ぎすましながら目を光らせて、運動に取り組んでいくことを約束しあった。

第3分科会は「町並み運動“再”入門」をテーマに、住民意識の高揚、行政との対立や協調、専門家との協力関係、伝統的建造物の修復技術など、古くて新しい課題が討議された。各地の団体が抱える問題点や成功事例などを比較し検討することによって再認識されたことは、各地の運動体験を学びあいながら、ねばり強くかつ弾力的な活動を継続させることが大切であり、原点に立ちかえって運動の波を常にまき起こすことの重要性であった。

さらに第3日の全体集会では、11ゼミ運営委員会からの特別提言として「沖縄歴史環境財団（仮称）」の設立がはかられた。これは、竹富島のすぐれた町並みと自然と文化を末長く守

るためのナショナル・トラスト的手法の提起で、“うつぐみ（団結）”をモットーに現地沖縄での活動に町並み連盟が、組織的に協力することの提案である。

竹富島に集まったゼミ参加者一同は、「全国町並みゼミ」10年の歴史と町並み保存運動のひろがりをふまえて、これから始まる新たな10年の町並みゼミを初心忘れることなく、さらなる進展と充実に向けて前進することをここに確信する。

竹富島の人達の心からなる歓迎に感謝し、美しいサンゴ礁の海に浮かぶ珠玉の島から、右宣言する。

1988年6月6日

栃木宣言

全国町並み保存連盟は、1989年7月1日、2日、3日の3日間、見事な蔵が立ち並ぶ栃木県の栃木市で、第12回全国町並みゼミを開催した。共催組織である栃木蔵街暖簾会をはじめとする地元自治体、関係諸団体の献身的な協力のもと、全国各地で、歴史的環境の保存、整備を通して地域社会の再生・創造をめざす住民、行政関係者、研究者など約600人が参加して、熱心な討議を行なった。今回のゼミの特質は日本列島の各地で歴史的景観を構成している伝統的な土蔵や石蔵の存在に注目し、これらを現代都市のなかで、いかにしてよみがえらせ、活用するかという方策について考える「生かそう蔵の町」という特別テーマを設定したことである。

1日目、開会式は、前回開催地の竹富島住民の伝統舞踊による引き継ぎの儀で開幕した。恒例の各地からの「現地報告」では、切実な問題に直面する、19の住民運動の代表が、報告を行なった。ここでは、かつての「列島改造の時代」にまさる野放図な開発が、いま再び、全国各地で強行されつつあることが、危機感をもって報告されるとともに、これに対して、住民は快適環境の創造をめざす、いわゆるアメニティの環境観にめざめて、多彩な運動を展開していることが明確にされた。

つづいて「伝統民家はいま」「町並み運動はいま」の2つの分科会が開かれた。ここでは、歴史的文化財であると共に生活の場としての民家保存の意義が論ぜられるとともに、わが国の林業の再建をめざして積極的に国産材を使用すべきであることが提起された。また和歌山市では万葉集にうたわれた和歌ノ浦の歴史的景観が、いま巨大な近代橋の建設のために破壊されようとしている事実が報告され、これを契機に、環境の表現体とも言うべき景観の価値と、その景観を見つめる住民の目が日ましにときすまされてきたことが確認された。

「基調講演」は地元國學院大学栃木短期大学の樋口清之学長によって行われた。「日本人と蔵」と題したこの講演では、稲作農耕の時代から近世までの、わが国に置ける倉の種類と用途、社会的意味などが多面的に説明され「蔵は歴史の大事な証人であると同時に、明日を考える資料となる。明日のために蔵を保存する運動が必要である」と力説された。

つづいて、「蔵の町サミット」と題して北海道函館市、福島県喜多方市、京都市伏見区、岡山県倉敷市、鳥取県倉吉市、徳島県脇町、川越市および地元の栃木市などの住民・自治体の代表者が、自分達の町の落ち着いた蔵の風景を誇りにし、大切にしていると語り、蔵と清流そして街路樹など、歴史的環境と自然環境の豊かな地域の創造をめざすことを確認しあった。

また2日目の夜は「町並み私の研究」と題して、韓国人、フランス人研究者などによる外国の町並み保存の実情報告、赤レンガの東京駅駅舎の保存対策、田中正浩生家の保存運動などの報告があり、さらに「歴史的景観の文学的哲学的考察」など、運動体験を通じて構築した独自の理論の発表が次々になされた。

3日目は、近年、町並み保存運動に強い関心を示しはじめた全国の自治体を代表して、長野県須坂市、山梨県早川市、岐阜県白川村の3自治体の首長が参加して、シンポジウムが行われた。そこでは自治体の役割と住民運動のあるべき姿について、住民・研究者たちとともに活発

な討議が行なわれた。

会期中、2日目の午前中と3日目の早朝、野外ゼミと銘打って参加者たちは、栃木市内の蔵作りの町並みを訪れ、巴波川（うずまがわ）べりを歩き、さらに大平山（おおひらさん）の自然を探勝した。また戦後、文化財保護行政の確立に尽力された栃木県出身の作家、山本有三氏の足跡をたどった。雨のなかにもかかわらず地元のボランティアの方々が案内に立たれ、ボーイスカウトの若者たちが交通整理にあたるなど、その真摯な姿は、栃木市の住民たちが、ふるさとの歴史と自然に大きな誇りをいんでいる事実を参加者たちに印象づけ、深い感銘を与えた。ここに全国町並みゼミ参加者一同は、今回のゼミに示された栃木市民および自治体の誠意に深く感謝するとともに、栃木市の蔵の町が地域発展の基盤として、ますます充実されることを確信して、右宣言するものである。

1989年7月3日

京都宣言

全国町並み保存連盟は、祇園祭のお囃子がまさに聞こえようとする 1990 年 6 月 23 日、24 日、25 日の 3 日間、京都市で『第 13 回全国町並みゼミ京都大会』を開催し、現代に生きる町並みについて語り合い、その将来を構想した。この大会には、全国各地で町並み保存運動に取り組む住民を中心に、研究者、自治体関係者など、68 団体、約 600 人が参加した。

京都会館で開かれた第一日目は、森毅氏による記念講演「京に暮らして」に続いて西川幸治氏が「京都にみる町づくりの知恵」と題して報告、その後「苦悩する歴史都市<京都>」についてのシンポジウムを開いた。また、「各地からの報告」では、妻籠、和歌浦、角館等の住民代表が、直面する課題を中心に報告した。

第二日目葉「伝建築部会」「都心部会」「伏見部会」の三分科会に分かれてそれぞれの現地見学の後、先斗町歌舞練場、御香宮で討議を行った。さらに、今回の主要な論点である「町並み保存と税制」「町家の保存・再生と創造」の 2 つの研究会が都心の町屋で行われた。

第三日目は、全体会議「町並みが生きる歴史都市」を開き、3 日間の総括を行った。

今回の『京都ゼミ』の特徴は、大都市における歴史的町並みの保存問題が討議の焦点になったことである。ここ数年来の不動産投機ブームによって、地上げ、ビル化、税金負担などの問題が深刻になり、町家・町並みを維持していこうとする努力を押しつぶす圧力となっている。また建築基準法などの全国一律の適用は、町屋・町並みの地域特性を失わせている。

こうした事態に対して、市民の暮らしの基盤である「まち」とその表情である「町並み」を、決して見境のない土地投機で破壊させてはならない。

今回のゼミがこのような問題が深刻化している京都で開催された意義は誠に大きく、討議を通して「歴史都市<京都>」の存在の重みが改めて確認された。すなわち、公的制度を活かした歴史的町並みの修景、町づくりの憲章や建築協定による市民の自主共同の取り組み、緻密なデザインの町家の保存と再生や、町並みに調和する新しい試みなどから多大な示唆を得ることができた。また、伝統産業をはじめ多彩な製造業、店舗および住居が町並みと一体となって営まれている姿に、町並みの担い手としての住民の強い自覚を感じることができた。さらに、人々の関心が町家・町並みからそれらを取り巻く自然・歴史的景観にまで広がり、市民的論議が展開されていることに感銘を受けた。

京都をはじめ全国各地で見られる歴史的環境の新しい破壊の波に対しては、土地政策、都市計画、建築法規および税制などの現行制度の改革の緊急性が明らかにされたことも今回の大きな成果である。そして私たちは、文化遺産である町並みの伝統を受け継いで現在に活かし、次世代に贈ることが、世界の人びとから、京都市民および私たちに付託された重大な責務であることを一層強く自覚することになった。

私たちは都市の開発と保存において、町並みが果たしているヒューマンな環境づくりの意義を再確認して、さらに活動を高めることを宣言する。さらに、危機に直面する今日の京都において、市民をはじめ、京都市、府、関係者、各種機関の方々が、この責務を一層自覚され、協

力して山紫水明の風土と暮らしの表徴である町並みを大切にすゝる世界の歴史都市づくりに取り組まれるよう、ここに提言し、要望する。

京都への提言

- 一、土地の高度利用本意の都市計画を見直し、地域性・歴史性を考慮した容積率・高さ制限等をきめ細かく運用すること
- 二、現行の防火地域制度を見直し、京都にふさわしい防火システムを工夫し、確立すること
- 三、保存すべき町家を特別に認定し、税制上の優遇措置を講じて、財団法人化等による公共・民間の協力体制をつくること
- 四、伝統的建造物保存地区の周辺で進む乱開発に対して、総合的な景観形成を図り、制度を再検討すること
- 五、伏見地区にあっては、その歴史・地理的特性を考慮して、独自のまちづくりができるよう、区レベルの行政を改革・実行すること
- 六、異常な地価高騰のなかで、不利な立場にある個人や老舗の町家が維持できるよう、固定資産税、相続税などに特別の措置を講じること

終わりに、今回の『京都ゼミ』の開催にあたって、住民団体「伏見町並み通信社」をはじめ、伝建地区、都市地区および関係者、京都の皆様には絶大な協力をいただいたことを心から感謝する。

1990年6月25日

第13回全国町並みゼミ京都大会参加者一同

角館宣言

全国町並み保存連盟は、1991年6月8、9、10の3日間、みちのくの小京都・秋田県角館町で「第14回全国町並みゼミ」を開催した。地元「美しい角館を守る会」の運動の原点となった田町山跡、角館広域交流センターを舞台に、全国各地で町並み保存運動にたずさわる住民を中心に、研究者、行政関係者など約500人が参加した。

今回のゼミが行われた角館は、町並みの運動から町長を生み出した町である。ゼミは、リゾートや京都の高層ビル建設問題など多くの懸案をかかえつつも、なごやかな雰囲気の中で行われた。そして町並み保存の基本的な論点についてあらためて討議し、次の展開へ向けての地固めをする会合となった。確認されたことは、町並みを担う「人」の重要性である。それは「町並みはお祭りのところ」という大会スローガンに集約されていた。

一日目は、開会式につづいて、映画監督今村昌平氏により「映画制作現場雑感」と題する記念講演が行われた。今村氏は近作「黒い雨」に触れ、したたかな庶民の生活の存在が異常な戦時下における「救い」であったことを指摘、これは歴史的環境の保全はあくまでもそこに生きる人々を基本にすえるべきだとの、我々への貴重なメッセージとなった。今村氏はまた、「黒い雨」のロケ地として選ばれた集落が、町並み保存の努力を行っている地区であったと述べ、その努力をたたえた。

恒例の「各地からの報告」では、従来のゼミでとりあげられた問題のその後の発展を中心に、14の住民運動の代表が発表した。これら町並み運動が当初の問題をのりこえて、新しい局面を切り開きつつある様子があきらかにされた。しかし、建物は保存されたものの、観光公害という新たな問題に直面している地域もでていることが報告された。

二日目は町並み保存運動の原点ともいえるべき3つのテーマを取り上げ、分科会がもたれた。第一分科会では「町並みと生活」をテーマに、民家を改築した所有者、施工者から多くの事例が発表された。「古い民家は本当に住みにくいのか」という古くて新しい問題に対し、古い建物の生活空間としての質の高さを見直す、豊かな感性を育てることこそが大切だとの認識に至った。そして、今後とも事例や情報を積み重ねていくことの必要性が、確認された。

第二分科会は「町並みと観光」をテーマに、愛知県足助町および角館を事例に検討が行われた。大切なことは古い町並みを保存するだけでなく、そこに私達の今の生きざまをどう重ねあわせていくのか、観光の本来の意味があきらかにされた。同時に歴史的な建物を町づくりにふさわしい形で利用していく隘路は何か、それを克服する手法は何かといった、踏み込んだ討論も行われた。総じて、観光といえば迷惑といった従来の固定観念をこえて、その弊害を防ぐためにも積極的な文化観光へ取り組むことが必要だとの確認がなされた。

第三分科会は「町並みと自然」と題して、沖縄県竹富島および秋田県田沢湖を事例に討論が行われた。リゾート法による開発ブームが一段落した現段階で行われたこの討論では、本当のリゾートは時間をかけてつくられるべきものであること、自然環境と歴史的環境の双方が一体となった環境こそリゾートにふさわしいことなどが指摘された。このような観点から、角館の

駅前のこわされた田町山の自然の修復が緊急の課題との指摘も行われた。

三日目は、昨年に引き続き、高層ビル問題でゆれる京都を念頭において「歴史的都市の今日的課題」と題するシンポジウムが行われた。経済優先の都市化、そして的確な建築行政の欠如が、歴史的都市共通の課題であるとの認識のもと、「観光」の持つ魔性を克服する市民的な共感づくりの必要性が討議された。

会期中二日目の午前中、ゼミ参加者は、角館の人々の熱心な案内により、内町・外町をめぐり、武家屋敷や町家を訪れた。また二日目の夜、上演された地元の演劇サークル「どんちよ」による「お山囃子殺人事件」は、角館の人々の祭りへの熱い思いをわかりやすく教えてくれるとともに、町並み保存運動における「人」、そして人と人の交流の重要性を訴えた。

ここに第 14 回全国町並みゼミ参加者一同は、今回のゼミに示された角館町民および自治体の心意気に深く感謝するとともに、角館において、心のこもった町づくりがさらに進展することを確信して、右宣言する。

1991 年 6 月 10 日
第 14 回角館ゼミ参加者一同

吉井宣言

全国町並み保存連盟は、1992年5月30日、31日、6月1日の3日間、「清流と白壁の町」として知られる福岡県浮羽郡吉井町で「第15回全国町並みゼミ」を開催した。この大会には、全国各地で町並み保存運動にたずさわる住民を中心に、研究者、行政関係者、さらに中国、台湾、マレーシア、オーストラリア、アメリカなど海外からの参加者をふくめ約500人が参加した。

今回の町並みゼミは、地球環境問題への危機感と国際化への関心の高まりという大きな流れの中で行われた。

一日目はまず、全国町並み保存連盟が招請して参加された中国の古都西安で活躍する建築家張錦秋女史による記念講演が行われた。タイトルは「伝統的空間意識を現代にいかにか活かすか」であった。女史は西安の歴史的建造物である大雁塔に隣接して建設された唐華賓館などの施設を、中国の古い建築の原理を現代に受け継ぐという理念のもとに設計したと、スライドを使って説明された。

環境法学、環境経済学、都市計画の研究者ならびに環境庁の自然保護担当審議官、地元吉井町長などによるシンポジウム「環境運動のなかの町並み保存」では、公害から自然保護、歴史的・文化的環境へと国民の環境観が広がるなかで、町並み保存とアニメティエーの思想の確立について討議がなされた。ここでは歴史的・文化的環境権の確立と、従来の経済学が見過ごしてきた数量化を超えた環境の価値の構築の重要性が指摘された。

二日目の朝、参加者一同は、ふるさとに誇りをもつ吉井町の人々の案内をうけて、緑豊かな歴史的町並みを見学した。豪壮な商家、邸宅、その奥に広がる卓越した住環境、そこに展開する「小さな美術館運動」に、私どもは目を見張った。

午後は、つぎの三つの分科会が開かれた。

「町並み保存と地域文化創造」と題する第一分科会では、角館町、会津若松市、吉井町の三地区の代表から演劇や美術館活動を手がかりにまちづくりがすすめられている事例が報告された。無人化した町家を文化活動の拠点として活用し、地域文化の創造を目指す方策について論議が白熱した。

第二分科会は「町並み運動と行政の役割」をテーマに、三重県関町、京都市、吉井町の行政担当者から報告が行われ、行政のもつ真のリーダーシップの必要性が指摘されたが、一方、住民運動と行政の緊張関係の重要性も強調された。また、地域に根ざしたまちづくりをすすめるために、都市計画の諸制度の改革の必要性が主張された。

「町並みと農村計画」と題する第三分科会では、愛媛県内子市、岐阜県白川村、吉井町の代表が報告した。農村景観の魅力は農林業と住民生活の体系が一体となってはじめて形成されることが確認された。

「吉井の歳事記」は、この大会の圧巻であった。文化会館ホールの舞台では、元旦の初謡が朗々と響き渡り、あでやかな浦安の舞、村に伝わる伝統芸能、そして合唱がくりひろげられた。

なかでも、水路をつくった5人の庄屋の物語を描いた江南小学校六年生による紙芝居は、感動をよび、そこに今大会を成功に導いた真の原動力を見る思いがした。

三日目は、海外諸国および国内各地からの報告が行われ、歴史的環境を守り育てるために各地で多彩な活動が展開されていることが確認された。

今回の吉井ゼミの開催にあたり、地元「吉井の白壁保存と活性化を考える会」をはじめ、町民のみなさま、町当局の心温まるおもてなしに深く感謝するとともに、この大会がこれからの吉井のまちづくりに資することを願うものである。

1992年6月1日

第15回全国町並みゼミ吉井大会参加者一同

川越宣言

第16回全国町並みゼミは、1993年8月21日から23日まで、小江戸と呼ばれる埼玉県川越市で開催された。今年は、川越に蔵造りの町並みが形成される契機となった明治26年の大火からちょうど百年目である。今回の町並みゼミは、まさにこの記念すべき年に「武州川越町並み博—あれから百年・これから百年」と題して開催された。歴史的地区に点在する会場を舞台に、台湾からの約20人を含めた海外からの参加者をはじめ、全国から合計700人以上という空前の参加者を得て、多彩なテーマのもとに討論を繰り広げた。

町並み保存は今や「追い風」となった。一日目、新加入団体を中心に行われた各地からの報告では、すでにそれらの町が町並み保存の制度を整え、一定の成果をおさめつつあることが報告された。このような中で、分科会などを通して今回の町並みゼミであきらかになったことは、町づくりの主体は住民であるという運動の原点を確認し、「第二幕」へ向けて新たな隊列を組み直す必要があるということである。

分科会は三つのテーマに分かれて行われた。

「町並み博品館：伝建地区のこれまでとこれから」と題する第1分科会では、川越を含めた多くの歴史的町並みが、文化財保護法に定められた重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）選定の申請に踏み切れないという実態を踏まえ、伝建地区をより身近な制度としていくためにはどうすべきか話し合われた。討論では、伝建地区の選定が規制の厳しい重要文化財指定と混同され、窮屈な制度であるという先入観が伝建地区を住民にとって近づきにくくしているという問題が指摘されるとともに、伝建地区制度そのものも地域の多様な実情を包含する柔軟性を有すべきことが主張された。また、文化財保護制度を指定制に加えて保護の網を幅広くかぶせる登録制も採用することの必要性が討議された。

「都市でざいん館：歴史的街区の町づくり」と題する第2分科会は、多様な考えを持った人々が町づくりのイメージを共有し、優れた町並み環境を形づくってゆくためのシステムの構築について討議された。この分科会では、川越の「町並み委員会」ならびに住民が合意して作った「町づくり規範」が果たしてきた役割を評価するとともにその限界が報告された。また都市計画道路の決定権限をめぐる中央と地方の関係などについて、函館、栃木、真鶴の事例を中心に討議が行われた。ここでは、これまでのように町づくりの活動を継続する努力は基本だが、それだけでは十分ではなく、1、基礎自治体から積み上げる地方分権の実現、2、主体となるべき市民の自覚、3、法律から条例そして住民が取り決めるルールに至る制度の見直し、4、町づくりの意志決定手続の重視と公正なシステム構築、5、環境を配慮した市民の自律的生活の自覚の必要性など、基本的な構造の変革に取り組むべきことが強調された。

「伝統文化会館……商いと観光と祭り」と題する第3分科会では、川越の祭りが直面する問題を題材に、各地の事例をあわせて、祭りと町づくりについて話し合われた。今や各地の祭りは、神事から市民お祭りへと展開してきた経過が指摘されるとともに、この過程を通して、祭りは、地域の人々の心の一体化を進め、町づくりにとって重要な役割を果たしつつあること

が確認された。しかし反面、祭りの観光化が進み、伝統の祭礼、しきたりの伝承が困難になるなど、祭り本来の意味が見失われつつあり、改めて市民の祭りを構築することが過大となっていることが指摘された。さらに、祭りの安易な観光化への傾斜を反省し、本来の祭りを取り戻す中で、結果として観光の進展をもたらすという考え方が重要であると主張された。

全国町並みゼミは、その 20 年になろうとする運動を通して、わが国に歴史環境の保存や伝統文化の継承を根づかせる重要な役割を果たしてきた。その成果は、国そして多くの自治体で町並みや景観保存のための制度が整備されるという形で実現してきている。反面、各地からの報告や分科会で明らかになったことは、多くの地区で行政主導が目立つようになり、改めて住民の主体性の確立が要請された。わが国の政治が歴史的な変革を迫られているとき、町並み運動もまた社会システムの変革を志し、新たな局面を切り開かねばならない。

今回の町並みゼミは、一日目の映画監督・斉藤耕一と歌手・刀根麻理子の記念対談、二日目の夜に開催された七つの「小粋な夜の勉強会」、三日目の川越にゆかりの深い馬場璋造氏、長井多恵子氏、福川裕一氏の「トークセッション」など、今までにない新しい試みが行われた。また前全国町並み保存連盟副会長で川越の町並み保存の先導的役割を果たしてこられた山田勝利氏が名誉会員として表彰された。

ここに第 16 回全国町並みゼミ参加者一同は今回ゼミに示された川越市民および自治体の心意気に深く感謝し、川越において、心のこもった町づくりがさらに進展することを祈念するとともに、全国の町並み保存運動が次のステップをめざして飛躍することをここに誓うものである。

1993 年 8 月 23 日

須坂宣言

全国町並み保存連盟は、1994年5月21・22・23日の3日間、つつじの咲き誇る長野県須坂市で、第17回全国町並みゼミを開催した。連盟創立20年と須坂市市制施行40周年を記念するこの歴史的大会には、北海道から沖縄まで、各地で町並み保存運動に携わる住民、研究者、行政関係者等、64団体約600人が参加した。

更に、台湾から20人もの市民・学生が来日し、討議に加わった。

この大会で際だったことは、地元須坂を中心に長野県の各地から多数の住民が参加し、歴史的環境の保存・再生に活発的に意見を述べたことであった。

開会に先立って、郷土芸能赤熊が披露され、豊かな風景を紹介したスライドとともに、参加者を須坂の風土に誘い込んだ。

基調講演は、市川建夫信州短期大学学長により、「信州須坂の風土と町並み」と題して行われた。地元出身で、長野県文化財保護審議会委員を努める地理学者の同教授は、千曲川の扇状地上に形成された須坂の町の成立ちについて、詳細かつ明確に紹介した。中でも、須坂の町の景観を特色づける大壁造りの町家と町並みは、その多くが明治初期から昭和初期にかけて設立したもので、それらは協同化を図るなどして繁栄した洗医製糸業のいさ遺産であると指摘した。

各地からの報告では、協同組合を結成し法人格を得て、第2段階の活動に入った福島国会津復古会、住民運動の世代交替に取り組む長野の妻籠を愛する会、歴史的景観を無視し、災害復旧の名のもとに強行されようとしている石橋撤去問題に取り組む鹿児島石橋保存運動、運河の再生を通じて、文化観光の確立を目指す北海道の小樽再生フォーラムなど、全国各地で改めて盛り上がりを見せる歴史的環境の保存、再生運動の現状が報告された。

盛会であった夜の懇談会では、地元の主婦による郷土料理を賞味した。市川博士が基調講演で強調した食の文化財の意味が再確認された。

2日目の22日は、臥竜公園の早朝探勝から始まった。引続き行われた町並み見学会では、参加した人々は前日の市川教授の講演、そして、わかりやすく工夫されたガイドマップに導かれ、各地点で地元の人々の暖かいもてなしを受けた。午後からは、4つの分科会に分かれて討議が行われた。第1分科会では、「伝建と町並みのこれから」がテーマであった。文化財保護法の改正で、伝統的建造物保護物件が文化財として認知されてからほぼ20年を経過し、町並み保存に対する人々の確認は、依然よりはるかに高まりを見せるに至っている。しかし、保存・修景の手法、技術の継承、素材の確保などの諸問題、そして、相続、都市計画、国土基盤整備との関わりなど、多くの社会・経済問題が未だに障害として立ちはだかっている事実の存在が再確認された。新たな運動の再構築とともに、伝建地区制度にこだわらない多様な手法が模索されるべきことを確認された。

第2分科会「観光と文化の町並み」では、観光化と文化財保存という対立をどのように克服するかを中心に討議がすすめられた。拙速な観光開発や整備が自分達の町でなくなったという印象を住民に与えている現実がある一方で、観光は本来、平和へのパスポートとして人々の交

流に重要な意義があることが指摘された。そして、安易な観光化を避け、本当に観光を成功させるには真剣に地域の文化を育み、いかにすれば外部から訪れる人々に感動を与えることができるのかの追求が不可欠との認識に達した。

第3分科会「環境と町づくり」では、「外はみんなのもの、内は自分たちのもの」を合言葉に歴史的町並みを創造した、長野県小布施町の町づくりの報告をはじめ、各地で展開されている住民、建築家、行政の協力関係のあり方について討議された。また、町並みに加えて、橋や水路などの土木遺産を新しい文化財として評価することの重要性が指摘された。バブル経済と地下高騰に直面している台湾の参加者からは、函館市などでの歴史的環境再生の経験などについて質問がなされ、両国の環境保護運動の経験交流が展開された。

第4分科会「町並みと子どもたち」では、次代を担う子どもたちの地域への愛着を深める方策について話し合われた。まず、地元須坂市における小中高の教師達と公民館活動による熱心な環境学習活動が紹介された。その中で、子どもたちの新鮮な視点に大人達が学ぶことの重要性が確認された。そして、歴史的町並みをふるさとの現風景として見直し、遊び体験の場所として再確認する必要性が指摘された。

夜には、6つの夜の部会がもたれた。地元の様々なグループがそれぞれ工夫を凝らした会場では、全国からの参加者と地元の人々との直接的な交流が深められた。

3日目は「暮らしの心、再発見」と題して、伝統芸能の掘り起こしに取り組んでいる熊本県立劇場館長、鈴木健二氏の記念講演が行われた。

今回のゼミで印象に残ったことは、ここ須坂の町並み運動において、住民の主体性がいかに発揮されていたことである。そこには、単なる対立関係とも一方的な行政主導とも異なる住民と行政の成熟した関係が見い出された。おそらくこのような関係の構築は、20歳を迎えた町並み運動の基本的なテーマとなるだろう。今回の須坂ゼミ開催にあたり、地元信州須坂町並みの会をはじめ、広範な市民および市当局の心温まるもてなしに、深く感謝するとともに、この大会が須坂市の歴史的環境の保存活動の更なる発展に資することを願うものである。

1994年5月23日

妻籠宣言

妻籠宣言

平成8年9月10日

「第18回全国町並みゼミ妻籠大会」は、1995年9月8・9・10日の3日間、わが国の町並み運動の原点である長野県木曾郡南木曾町で開催された。

全国町並み保存連盟創立20周年を記念するこの大会には、国内各地で歴史的環境の保存・再生の運動に取り組んでいる住民、行政関係者、研究者など、60余団体約600人が参加した。

木曾川を見下ろす台地に立つ南木曾町社会体育館で開かれた総会では、28年前の1967年に住民の熱意に動かされて、妻籠宿の町並みの再生事業を初めて指導した太田博太郎・東京大学名誉教授が「妻籠宿の保存を顧みて」と題して記念講演を行った。氏は先駆者としての体験を詳細に報告、当時、全国の自治体が「開発の道」を選んだのに対し、妻籠宿の住民たちが「保存の道」を選択した結果、人影も疎らだったこの地域に、今年年間70万人が訪れるようになったことは注目すべきだと述べた。

続いて、北海道から沖縄までの全国各地から参加した関係者たちは、それぞれ直面している問題について報告を行った。それによれば、北海道・函館市では、空港滑走路の延長計画によって青森県の三内丸山遺跡にも比すべき縄文時代の埋蔵文化財が破壊の危機に直面している。また、水害対策を理由に解体されようとしている鹿児島市の石橋群は今や危機的状況にある。さらに、阪神淡路大震災によって破壊された伝統的建造物の被害状況家対策が報告された。

続いて参加者たちは、会場の近くの木曾川にかかる桃介橋（ももすけばし）を視察した。同橋は、発電所建設のための工事用の橋で、1994年に「近代化遺産」として国の重要文化財に指定されたものである。

恒例の夜の交流会は、参加者全員が地元の主婦たちによる心づくしの郷土料理の数々を賞味・歓談し、「歴史的環境を守る」という共通の目的をめざす仲間の連帯感を確認しあった。

2日目の9日は、三つの分科会が開かれた。「町並み保存の原点を、みんなでしゃべり考えよう」と題した第1分科会では妻籠宣言の中で「初心忘るべからず」と誓い合って始めた妻籠再生運動は、30年たった今、この言葉をもう1度かみしめるべきだとの自戒の発言がなされた。さらに伝統的町並みと過疎化現象との関係が討議され、過疎を肯定的にとらえ、新しい解決の道を求めるべきだとの意見も述べられた。

「文化遺産の今日的意義を考える」という第2分科会では、住民と自治体が協力して国の文化財に指定された南木曾町の桃介橋と、住民は希望しながら自治体の反対によって、文化財に指定されなかったために、今、解体の危機に直面している鹿児島市の石橋群との比較検討がなされた。また歴史的建造物保全のための現行の文化財制度を拡充し、登録制度の実現の可能性が討議された。

第3分科会は「町並みと災害—阪神大震災を教訓に」というテーマ。阪神地区で復興に取り組んでいる建築家やプランナーたちが生々しい体験を報告、ボランティアの支援体制整備など、

復興に必要な問題点が話し合われた。

今回の大会を特徴づける「20周年特別イベント・職人大いに語る」では、大工棟梁・左官職・茅葺き職人・建具職などの人々が、現場の仕事を通じて心がけている思い出を語り合った。その実体験に裏打ちされた技術は今も健在で、町並み保存を支える伝統工法の未来に期待感を抱かせた。

3日目の総会では、住民が町並み保存の運動の主体であることを再確認する「町並み憲章」の起草作業の開始が提言され、次回大会の開催地は愛知県犬山市と決定した。

今回の「第18回全国町並みゼミ妻籠大会」の開催にあたり、私ども参加者一同は「妻籠を愛する会」や自治体関係者をはじめ、地元の方々の心温まるおもてなしに深く感謝するとともに、わが国の町並み保存運動の先導をつとめる皆様の一層のご健勝を祈念するものである。

犬山宣言

全国町並み保存連盟は、1996年9月28・29・30日の3日間、木曾川のほとりに位置し風光明媚で、古城をいただき、町のここかしこに城下町の面影をのこす愛知県犬山市で、「第19回全国町並みゼミ」を開催した。この大会には沖縄から北海道の各地で、歴史的環境の保存・再生に意欲的に取り組んでいる住民・行政関係者・研究者など、約70団体と個人、約600人が参加した。

基調講演では、小寺武久名古屋大学名誉教授が「城と城下町」と題して、城下町の特徴を丁寧に解明し、町並み保存の前提に手堅い研究があることを話した。各地の報告では、住民運動の現状が簡潔に述べられ、歴史的環境における近代化遺産の意味、町並み保存運動の地域別活動の方向、アジアでの各地の住民主体の活動など、町並み保存運動の新しい問題や方向を提起した。

恒例の夜の懇談会では、地元の心づくしの材理に舌つつみを打ちながら歓談し、歴史的環境を保存する各地の活動を交流し、共通の思いを確かめあった。会場前では、犬山まつりの山車が特別に曳きだされ、われわれを華麗に歓迎してくれた。

二日目は、明治村を見学し、日本の近代の黎明を語る建築群を堪能した。そして犬山城下町を散策して、近世以来の道路網が温存され、町屋群が健在であることを確認した。

この日、第一分科会では、「都市計画と町づくり」と題して犬山・日南・彦根の三市長が出席し、城下町の都市計画の課題を話合った。歴史的都市における道路拡幅の問題が話題にのぼり、高度成長期およびそれ以前に策定された都市計画は、歴史や文化を重視する価値観の高まった現代の視点で、再検討されるべきであることが確認された。

第二分科会では、「町並みと観光」と題して、「観光」という営みは、町並みを俗化させる悪者ではなく、地域文化の創造、あるいは都市と地域との良好なコミュニティを形成する役割を果たすものとする認識を確認した。また、対立関係とされがちな町並みと都市更新の事業でも、観光の視点を介在させることで新展開の可能性があることが確認された。明治村のような民間施設と地域社会とは、新たな関係をとり結んで相互関係をはかる必要があるという問題提起がされた。

第三分科会では、「町並みと伝統文化」と題して、伝統的な文化遺産を守ることが、金がかかること、しかし、誇りを持って行っている事例報告を受けて、伝統文化を守る姿勢・考え・システムが町並みを守ることに結びつくことを確認した。さらに、各地から活発な事例が報告され、個々の発見と解決方法は各地で試行錯誤すべき問題であることが指摘された。

第四分科会では、「町並みの災害対策」と題して、地震の被災地神戸と防災対策を進めてきた奈良井からの報告を軸に議論した。災害に備えて、地域の特性を重視した防災と修復のための技術を研究し、定着を計ることが求められている。日常的な環境のメンテナンスや地域社会の連携や、災害経験の交流など、ソフト面を重視すべきことが明らかになった。

三日目の閉会式では、ゼミ全体を総括し、各地へ散らばり次ぎの出発に奮闘することを確認

した。次回全国町並みゼミは新潟県村山市で開催することを決定した。

ゼミ最後の企画として、平井聖東京工業大学名誉教授が、「最後の時代考証」と題して、一般市民を対象に記念講演した。

第 19 回全国町並みゼミの様子はインターネットを通して全国と世界に発信された。歴史的環境を保護し活用する活動は、世界各地で歴史的都市・町・村が担う共通の責務になりつつある。各国の歴史的環境が、たんにその国にとってだけの歴史的遺産ではなく、人類共通の遺産として認められつつある。

今回のゼミの特徴は、第一に運動の担い手の世代交代が進行し町並み保存運動が、新しい段階に入ったことである。第二は日南・彦根・犬山の三市長が参加したように、町並み保存における行政と住民との協調が各所で模索されたことである。そして第三に、都市計画道路をはじめとする現行の都市計画のあり方に再考を促す強い声があげられたことである。

今回の「第 19 回全国町並みゼミ」の開催にあたり、参加者一同は「大会実行委員会」や自治体関係者をはじめ、地元の方々のもてなしに、深く感謝する。

今年は、全国町並み連盟にとって、長年の懸案であった事務局が東京に開設され、新たな段階を迎えた年となった。町並みゼミ開催中、われわれは「歴史的遺産を活かす町づくり」が、これからの 21 世紀を展望する町づくりとなることを確かめ合った。われわれは改めて、町並みという文化遺産・歴史遺産が町づくりの核となることを宣言する。

1996 年 9 月 3 0 日

第 20 回全国町並みゼミ村上大会宣言

村上宣言

全国町並み保存連盟は、1997年5月23日から25日の3日間、新潟県村上市で第20回を記念する全国町並みゼミを開催した。村上市では住民と行政が一体となって実行委員会を組織し、運営に当たりゼミを成功に導いた。一方、連盟も、事務所を東京都新橋に開設し、新体制を確立してゼミに対処してきた。また、「個人会員制」を復活し組織の体質強化を図るとともに、機関誌「町並みかわら版」の復刊などにより、組織の強化と会員とのコミュニケーションの深化を図りつつある。このような状況の下で、町並み保存への関心が行政の間にも高まり、積極的に住民との連携を模索したことがうかがわれた。住民と行政が協働で取り組んできた村上市大会は、新たな段階に入った町並み保存運動の歴史にとって、有意義なゼミとなった。

初日の20周年特別イベント「町並みゼミの20年を振り返る」では、これまでのゼミ開催地の代表が壇上に勢揃いし、ゼミの開催を契機として町並み保存運動がどのように推移してきたかを振り返った。そこではゼミの開催が保存を通じたまちづくり運動の活性化につながったと評価された。続いて恒例の各地からの報告が行われた。また、「広げよう町並みの輪」ではゼミにおいて築かれる人間関係と情報の交流が、保存運動の強力な支援材料として生まれ、20年に渡るゼミの蓄積として再確認できた。

2日目には4班に分かれて村山市の町並みを見学した。市民たちの懇切丁寧な応対に町並み保存の真摯な取り組みが感じられた。午後からの分科会では熱心な討議が行われた。

第1分科会では「町並みと町づくりーまちづくりと支援事業」と題して論議を交わした。町づくりの基本は住民、行政、専門家、企業の共同作業であり、特に行政への質の高い住民参加が強く求められていることも確認できた。また、若者の育成の必要性やワークショップ手法の有効性が指摘された。

第2分科会では「くらしと町並みー祭・商い・暮らしの似合う町並みでー」と題し、祭りとまちづくりを中心に議論した。祭りを単なる伝統文化の伝承だけでなく、まちづくりの広告活動や住民のコンセンサスづくりに有効に活用することが求められている。

第3分科会では「町並みと文化遺産ーあらためてまもりーそだて一つくるとはー」をテーマに議論した。各地域で町並みや文化遺産の保存運動が着実に展開されている一方、土木遺産など保存対象の広がりや運動の進め方、また歴史的な港湾の保存運動、登録文化財制度の創設など保存運動をとりまく環境の変化が確認された。半面、歴史的な港湾の保存運動など試行錯誤を続けながら努力している団体に対して、連盟は強力に支援してゆくべきであるとの提案がなされた。

第4分科会では「全国茅葺きネットワーク」と題して全国から茅葺き職人や、その技術に興味を持つ人々が集まった。国の重要文化財に指定されている若林家の茅葺きの差し茅修理の実演を見学した後、後継者不足から危機的な状況にある茅葺き技術の現況と課題を語り合った。技法や材料の地域性の保存など、課題は多いが、各地で若い職人が参加し始めている状況が明るい希望となっている。全国的な状況を視野に入れた今後の展開が期待される。

いずれの分科会でも、人材育成の重要性が指摘される一方で、わずかながらも人材育成に効果を上げている例も見られるようになった。

3日目には歴史を生かしたまちづくりに取り組んでいる地元村上市長、愛知県犬山市長、新潟県津川町長、福島県会津若松市の前市長による記念座談会が行われた。

今回の町並みゼミは、自治体と住民による協働体制が組み込まれたところに特徴がある。今後の連盟の目標として住民主体のより強固な組織づくりが課題とされ、それをバックアップする連盟の支援体制の確立を今後の大きな柱として確認し、連盟の新しい指針とすることを約束する。

ここに第20回全国町並みゼミ参加者一同は、今回のゼミに示された村上市の歴史的環境の保全と活用の活動がさらに発展することを祈念するものである。

1997年5月25日

東京大会宣言

第21回全国町並みゼミ東京大会参加者一同は、1998年9月18日～20日に東京において開催されたゼミにおいて、以下の12点の重要性を認識し、これらを今後の町並み運動において真摯に追求していくことを確認する。

1 東京には多様な歴史的界隈が残されており、保存に値する豊かな生活環境が各所に現存している。

2 町並みは、建物だけでなく、道路の構成や緑とともに成り立っている。これらを総体的に捉え、評価する視点を確立すべきである。

3 町並みは、くらしやなりわいを含めて成立している。近代化のなかで変貌しつつあるこれらの生活環境を再認識することが、伝統に根ざした新しい価値観の提起につながる。

4 町並み保存運動は、歴史を生かしたまちづくりに対する不断の意識改革であり、社会構造を改革する運動である。

5 伝統的建造物群保存地区制度は各地で支持されており、アジアにおける歴史的環境保全のモデルとして世界に発信可能である。

6 伝統的建造物群保存地区とは別個に存在している小規模な町並みや幅広い概念の町並みをも高く評価すべきである。

7 登録文化財制度をより広範に活用し、そのネットワークを広げて行くべきである。

8 貴重な歴史的建物単体を保存し、都市のスカイラインを守っていくことは重要な課題である。とりわけ近代建築に関しては、各種制度や規制を柔軟に運用することによって、その保存を図って行くべきである。

9 地域商業は歴史的町並み地区の基盤である。地域商業の存続のためのあらゆる努力を傾注すべきである。

10 町並み保存に関する基礎的体系的な憲章を制定するための検討作業に着手すべきである。

11 青年・学生や女性、登録文化財所有者などそれぞれの有効なネットワークが構築されるべきである。

12 多様なワークショップを利用した討論を行うことは、参加者の議論を建設的にし、活性化するとともに、合意を形成していくことを容易にする。ワークショップは町並み保存運動においても、有効な参加の方法論である。

以上、宣言する。

概要

全国町並み保存連盟は、1998年9月18日から20日までの3日間、東京都内および隣接県の各地において第21回全国町並みゼミを開催した。16年前の第5回ゼミにつづき2度目の東京ゼミとなった今大会では、全国から町並みを愛する約700名の仲間が集まった。

第1日目には山田洋次監督が「寅さんの愛した町並み」と題し、記念公演を行った。監督は、1

1969年にスタートした「寅さん」で有名な「男はつらいよ」シリーズを通して、近代化の中で失われていくコミュニティや町並みに暖かいまなざしを向けたが、この視点と時期とは、ともに町並み保存運動と共通しているといえよう。次にスライドとインタビューで構成された「東京1998—地域づくりレポート」では、この16年間の東京の保存運動の経緯と、現在起きている新たな問題について報告された。またトーク「日本の町並み きのう・きょう・あした」では、全国各地で10年以上にわたって町並みの保存・活用に取り組んできた7人の方が、これまでの経緯と今後の展望について語った。

第2日目は、12の分科会に分かれて現地見学やワークショップを行った。

A分科会では「近代建築の保存と活用」をテーマに、丸の内、奈良、京都他を事例に近代建築が次々に失われていく現状を報告。「保存は未来への投資」の観点から市民、企業、行政の立場から役割分担を考察した。

B分科会では「登録文化財と町並み」をテーマに、登録文化財の建物が多く点在する西片地区を見学。町並みは、建物と道の構造と緑が一つとなって成り立つことを認識。所有者の会の今後など、登録文化財のネットワークの必要性を確認した。

C分科会では「都市緑地とスカイライン」をテーマに、浜離宮、愛宕山、東京タワー、後樂園を散策。身近な緑を取り戻すための眺望の確保、スカイラインの回復を確認した。

D分科会では「伝建地区制度の可能性」をテーマに、佐原にて開催。旗上げアンケートとパネルディスカッションのワークショップを行った。アンケートでは、伝建制度の地域への貢献度が確認され、改めて制度の意義と新たな価値付けの必要性を確認した。

E分科会では「スタートラインに立つ町並みづくりの現場から」をテーマに、横浜・山手にて開催。山手の町並みを見学。4地区のパネラーと参加者が相互討論。町の魅力、まちづくりの手法、住民参加の可能性について議論した。

F分科会では「町並み保存のルールから憲章まで」をテーマに、資料集に納められた各地の町並み憲章をもとに議論された。町並み保存連盟がこれから取り組むべき共通憲章の検討が必要なことを確認した。

G分科会では「民家・町並みの保存と再生」をテーマに、浅草寺において開催された。グループ討論の後、町並み保存再生は社会構造の変革につながり、保存と創造の合一は風土であるとの認識を得た。

H分科会では「つくる育てる谷中諏方道」をテーマに、東京の下町谷中にて開催。「みつける」「つくる」「伝える」「支える」のキーワードで町づくりの方法について、ワークショップ手法を駆使して議論した。

I分科会では「町づくり会社による町並み・商店街活性化戦」をテーマに、川越にて開催。1988年に設立が計画された「まちづくり会社」の再度の立ち上げについて議論した。

J分科会では「東京の新発見 生活が形づくる町の風情を探す」をテーマに、向島、千住を散策。路地のあふれる緑など、下町的生活感の表出に魅了されながらも、新しい世代が住み続けられるかなどの問題が提起された。

K分科会では「子どもも参加できるまちの魅力発見ウォーク～マップづくり」をテーマに、本郷菊坂にて、子どもの参加を得てワークショップを開催。楽しい探検マップや、菊坂の詩づくりを成果として得た。

L分科会では「女性とまちづくり」をテーマに、女性パネラーを中心に議論された。町並み連盟の中に女性部会を設置することを要望した。

また、分科会のほかに前野まさる東京芸術大学教授による「まちの歴史から何を学ぶか」、稲垣栄三東京大学名誉教授による「歴史的町並みと暮らし」、大谷幸夫東京大学名誉教授による「町並み保存とまちづくり」と題する一般講座が行われ、聴衆は町並み保存の基礎理論の進化を目の当たりにした。

第3日目には陣内秀信実行委員長が基調報告のなかで、これまでの歴史的環境の広がりを振り返り、現在はさらなるステップアップのための転換期にあることを指摘した。特に今大会の12の分科会のテーマにもみられるように、町並みを捉える視点は多岐にわたり、活動の方法もまた多彩になっていることが強調された。続いて各地の緊急報告では、今なお全国各地で多数の近代建築や歴史的環境が破壊の危機にさらされていることが伝えられた。最後に今大会を締めくくる総括シンポジウムでは、12の分科会での活動結果が報告されたのち、会場も交えた議論が行われた。今大会の特徴としては、分科会のテーマが多様であったこと、そして参加人数を絞ったワークショップ方式による突っ込んだ議論を試み、その有効性が再認識された。

1998年9月20日

白杵宣言

第 22 回全国町並みゼミ白杵大会参加者一同は、1999 年 10 月 8 日から 10 日に大分県白杵市で開催されたゼミにおいて、以下の 7 点の重要性を認識し、これらを今後の町並み保存運動において真摯に追求していくことを確認する。

- ①自然環境と歴史的町並みは連携して保存に対処するべきである
 - ②伝建地区は町並み保全にとって友好的な制度であり、着実に成果を積み上げている。同時に、住民と行政の合意形成への不断努力が求められる
 - ③去年の東京ゼミ以来検討してきた連盟共通基礎憲章の枠組みが提示された
 - ④歴史的町並みと一体的な対応が中心市街地の整備に求められる
 - ⑤歴史的環境には木の文化だけでなく、石の文化があり、正当な評価が求められる。¥
 - ⑥町並み保存の対象として近代化遺産も含めるべきである
 - ⑦九州のネットワーク化を進めると共に、地域的な連携の強化を推進する
- 以上、宣言する。

1999 年 10 月 10 日

第 22 回全国町並みゼミ白杵大会参加者一同

大会報告

第 22 回全国町並みゼミは、平成 11 年 10 月 8 から 10 日の 3 日間、大分県白杵市で開催された。白杵を舞台にした町並みゼミは、昭和 58 年の第 6 回ゼミに続き 2 回目である。

第 1 日目は、祇園ばやしのオープニングの後、開会セレモニーが行われた。続く『記念リレートーク』では、九州や沖縄で環境問題に取り組んでいる方々の講演が持たれた。町並みとまちづくりを考える大分県民の会による『白杵 16 年の歩み』がスライドと関係者のトークで行われた。白杵で始まった九州の町並み保存が各地に刺激を与えた経過が紹介された。最後に、恒例の各地からの報告が行われ、獅子舞のアトラクションで開幕した親睦会では各地からの参加者が白杵での再会を歓んだ。

2 日目には一般講座と分科会が開催された。

東京大会から町並み入門として始まった『一般講座』では、後藤宗俊（別府大学）、降旗広信（建築家）、秋山晴子（長崎大学）の各氏が、『歴史的環境と民家の再生』について講演を行った。

第 1 分科会『近代土木遺産とまちづくり』では、全国町並みゼミで初めて近代土木遺産を対象にした。日本の歴史的環境には木の文化だけでなく、すばらしい石の文化もあることを確認した。

第 2 分科会『魅力ある町並み運動の進め方』では、住民運動はしなやかでしたたかなまちづくりが行われるのが望ましいことなどが話し合われた。

第 3 分科会『こども・まちづくり会議』は、白杵市内の小中学校生が参加し、自分たちのま

ちに対する想いを語り合った。色んな生き物と一緒に生きていきたいという小学 3 年生、ごみの捨て方を心配する児、天神様の獅子舞が好きという中学校 1 年生など、さまざまな声が出たが、みんな一緒に住んでいる白杵が好きというのが一致した結論となった。

第 4 分科会『歴史的小集落の生きる道』では白杵川上流の山村神野地区を訪ね、山村の集落環境を実体験した。それによって参加者は集落の魅力が自然環境と歴史環境が密接に結びついていると確認した。

第 5 分科会『中心市街地の活性化』は地元の中央通商店街の活性化をテーマに活発な議論が行われた。新潟県村上市、埼玉県川越市などの活性化例を参考にしながら、まず、老朽化したアーケードを撤去し、通りのイメージを一新するところから着手することが確認された。

第 6 分科会『歴史遺産と文化的景観の保全』は、白杵磨崖仏見学の後、満月寺で白杵磨崖仏や国東の荘園景観、棚田景観を討論した。磨崖仏は周辺的环境と切り離せないものであり、歴史の中で培われてきた景観と共に保存すべきという指摘がなされた。

第 7 分科会『町並み保存のルールから憲章まで』では、妻籠宿、白川村荻町、竹富島などでの憲章運用上の課題、保存修復を通じてまちづくりのルールを先導してきた白杵の建築士会の経験などが論ぜられ、昨年の東京ゼミ以来 1 年間、連盟の憲章ワーキンググループが検討してきた共通基礎憲章の枠組みが提示された。

第 8 分科会『伝建地区制度の可能性』では、3 つの分科会に分かれ、白杵における伝建地区選定の可能性と伝建地区制度の今後に就いて話し合った。伝建制度の有効性が確認されると共に、住民と行政の合意形成への不断の努力が求められた。

第 10 分科会『エコミュージアムの実践と町並み』は、例えば白杵の干潟保全と町並み保存を一体として市民団体が取り組んでいるように、エコミュージアム的な視点でまちづくりを行ってきた。それは様々なまちづくりの魅力を体系化する概念として有効であることを確認した。

3 日目の最終日は、分科会報告、記念鼎談『町並み・環境・まちづくり』が行われた。記念鼎談では、木原啓吉氏の司会で後藤国利白杵市長、宇井純氏（沖縄大学教授）、小手川道郎氏（日本エスパニヤ協会会長）が各人各様の町並み論を披露した。

日南宣言

文化財保護法 50 年、伝統的建造物群保存地区制度 25 年を記念した第 23 回全国町並みゼミが、2000 年 10 月 6・7・8 日の三日間日南市妖肥・油津で開催された。妖肥は九州で初めて重伝建に選定され、町並み保存の 20 年の歴史を持つ地区である。今回のゼミは「文化財保護法 50 年伝えよう文化財の町並み」をテーマとし、町並み保存運動を進める住民・市民と、町並み保存に関心をもつ行政関係者・研究者・学生が、沖縄や北海道をはじめ全国から 600 人が参加した。

伝統的建造物群保存地区制度が発足して 25 年たち、選定地区は当地妖肥を含む 50 市町村 55 地区となり、さらに数を増そうとしている。町並み保存事業が進展し、町並みが整うといった事業の効果を生み出す一方で、空き家が増える、商店街が衰退するという問題が浮かびあがっている。また近年、近代化遺産が文化財として認められ、登録文化財という新しい制度が生まれるなど、文化財の考え方と制度が拡充してきた。くわえて、歴史的遺産を危機にさらしかねない大型公共事業の見直しが始まっている。こうして文化遺産の意味が認識されるようになり、住民・市民運動が各地で展開しているとはいえ、歴史的遺産の危機は引き続いて存在している状況の中で第 23 回全国町並みゼミが開催された。

大会第 1 日目の 6 日に鳥取で、阪神・淡路大地震に続く大規模な地震が発生し、伝統的な建物にも少なからず被害が報告されている。伝統的な木造建造物を軽んじる風潮が強まることに對しては適切な反証を示さなければならない。

今回の全国町並みゼミでは、第 1 日目は、二つのテーマで記念シンポジウムを行った。前半では「伝えよう！住民が守り育てる町並みの文化」というテーマで、地域の個性を活かし、周辺環境を包括した本物のまちづくりが話し合われた。また、町並みの保存には、住む人々の思い入れ、愛着や誇りが原点でもあることを明らかにした。後半は角館町・犬山市・日南市の三首長が「育てよう！歴史を伝えるまちづくりの心」を行政責任者の立場から、歴史を大切にこそ地域の個性を発揮するまちづくりであることを語りあった。また、昨年の大地震で被害をうけた台湾からの参加者が近況を報告するとともに、日本からの支援に感謝の意志が表明された。夕方は恒例の懇親会で海の幸が豊富な郷土料理を楽しみ、日頃の苦勞と奮闘を交流し、一年に一度の懇親を図った。

第 2 日目の午前中は、妖肥と油津の文化遺産・歴史遺産を見学し、この地域が保持している歴史的蓄積を確認した。午後は八つの分科会を開いて各テーマで意見を交換した。

第 1 分科会は「土木遺産とまちづくり」では、日南市内の酒谷地区を訪問し、棚田による村おこしについて学んだ。地域の人々の取り組みによって、土木遺産によるまちづくりができることも確認した。しかし鞆の浦では、公共事業によって土木遺産を含む歴史的環境が壊される危機に直面していることが訴えられた。

第 2 分科会「文化財建造物の活用」では、油津赤レンガ館をはじめ、全因各地から国・地方指定、登録文化財活用の 5 事例が報告され、文化財の価値を損なわない機能の転用、安全性の

確保、市民参加で知恵を出し合うことの重要性を話しあった。

第 3 分科会「民家の再生」では、伝統的な民家に住み続けるために必要な再生法とは、歴史的ストックを生活者のこだわりとして大切にしていけることを通じ、地域のまちづくりとの接点を持つことに意味がある、ことを確認した。

第 4 分科会「商店街活性化と歴史的町並み」では、町並み保存は商店街の活性化があつて達成されること、商業の活性化は何よりも各々の店の努力によってなされること、そのために市民が中心市街地における商店街の意義を共有する必要があること、が話し合われた。

第 5 分科会「伝建制度と町並み保存憲章」では、重伝建地区の現況がアンケート調査に基づき報告された。また、東京ゼミ以来の懸案であった「歴史的町並み・集落保存憲章」について、意見交換および討論が行われ、満場致で採択された。

第 6 分科会「子どもまちなみ探検隊未来へのゆずりは」では、子どもたちとまち歩きの後、路地アート、カルタづくり、劇を行った。子どもたちがまちに主体的に関わることで、新たな発見を重ね、まちの未来に関して提案をするというプロセスを経て、継続的なまちづくりのきっかけとなったことを確認した。

第 7 分科会「町並みと観光」では、町並みにおける文化の継承者である住民自身が、その魅力を来訪者と接し伝えることで、観光の本質である異文化交流が実現され得ることが、事例報告から確認された。

第 8 分科会「次代に引き継ぐ景観づくり」では、景観は営みの総体であり、個人が各々の立場で地域につながっていこうとする試み、それらを語る場づくり、さらに住民への語り口を広げ深めることが、次代の景観をつくる、ことを確認した。

第 3 日目は、各地から活動の報告があり、その中で福山市柄の浦での埋め立て架橋計画による景観破壊や、JR 奈良駅の取り壊しの危機がそれぞれ訴えられた。ついで、各分科会の報告を確認し、2001 年の次回全国町並みゼミを小樽で開催することが報告された。

今回の全国町並みゼミで特筆できることの一つは、町並み保存に関心を持つ全国の学生のネットワークが定着し、ゼミの運営に強力な力を発揮したことである。住民・市民以外の町並み保存運動の新たな担い手が誕生している。また、各分科会を通して、台湾との広範な交流が行われた。

20 世紀最後の全国町並みゼミは、三日目に「歴史的町並み・集落保存憲章」を採択して閉幕した。この憲章は、全国町並みゼミでこれまで蓄積してきた理念・原則を整理し、今後、日本で住民を主体とする町並み保存運動にとって、活動指針となりうるものである。

全国町並みゼミに参加した一同は、地元日南市を初めとして本大会を企画・運営して頂いた全ての方々に感謝し、「歴史的町並み・集落保存憲章」を大きな抛り所の一つに加えて、21 世紀への新たな活動を歩み始めることを宣言する。

2000 年 10 月 8 日

第 23 回全国町並みゼミ日南大会参加者一同

小樽宣言

第24回全国町並みゼミは、平成13年9月28日から9月30までの3日間北海道小樽市で開催された。小樽市を舞台にした町並みゼミは、昭和55年に実施された第3回ゼミに引き続いて第2回目の開催となる。

台湾からの約40名の参加者や各地の大学からのボランティア参加を含め600名あまりの参加があった。

小樽運河保存運動の最中に行われた第3回ゼミから約20年を経て、この間に運動がどのように進展したかを点検し、21世紀の町並み保存運動を展望することを主要な課題として、ゼミの各日程が進行した。

21世紀最初の町並みゼミは、アメリカで同時多発テロが発生するという世界的な激動の中で開催された。日本では経済の不況が長引き、まちづくりでは歴史的な町並みを含む中心市街地の衰退が大きな課題となってきた。

ゼミの初日には小樽の中心市街地に大きな影響を与えつつあったマイカルの開発会社の倒産が伝えられ、まさに大きな変化が起こりつつある中でのゼミであることが実感された。

一日目は、松前神楽小樽保存会によるエキジビションと開会セレモニーのあと、峯山富美さんによる基調講演「小樽町並み保存運動の歩み」が行われた。峯山さんは小樽運河保存運動の全容とその後の観光化について言及し、運動が新しい世代に引き継がれることを述べて講演を締めくくった。

この峯山さんを中心とする小樽運河の保存運動に対し、台湾文化建設委員会主任委員の陳郁秀女史から賛辞とともに記念品が贈与された。

続いてパネルディスカッション「21世紀のまちづくり運動」と各地からの報告が行われた。各地からの報告では次回開催予定地の柄の浦ほか、4ヶ所の現状が報告された。

二日目は、町並み散歩と分科会が行われた。

第1分科会「町並みと観光まちづくり再検証」は2部に分けて小樽運河保存運動と観光化の問題について討議された。第1部では、保存からまちづくりへと展開した運河保存運動を振り返り、第2部では、各地と小樽を対比しながら観光化問題を話し合った。峯山さんが講演で指摘した急激に観光化した小樽の現状と問題点が討議の中から浮き彫りにされた。

第2分科会「産業遺産の保存と再利用」では、建築遺産に比べ若手の活躍の場が少なく人材が育ちにくい、しかし登録文化財制度の確立などにより、今後は改善を期待できるという意見が出された。

第3分科会「文化・芸能の保存と継承」では、文化の再生と町並み促存を進めるための具体的な方法や技術を含め、伝統工芸と職人をめぐる諸問題について話し合われた。

第4分科会「町づくり運動と行政の果たす役割」では、運動と行政が厳しい対峙をした経験のある小樽を舞台に、まちづくり運動と行政の果たす役割をテーマに話し合いが行われ、運動と行政が一定の緊張関係のもと、創造的なまちづくりを進めることの重要性が確認された。

第 5 分科会「こどもとまちづくり」では、地元稲穂地区の小中学生 23 人が参加し、地元商店街の魅力を再発見し、作品の素晴らしさとこどもを通したコミュニティ再生の可能性が実感された。

第 6 分科会「様々なまちづくり運動の手法」では、こども達による松前神楽が上演され、こども達に地域の資産を伝える重要性が認識された。

第 7 分科会「伝建地区と町並み保存憲章」では、国の重伝建地区以外に市町村の伝建地区を指定し活用する必要性が論じられた。また、昨年採択された町並み憲章は日本だけでなく台湾のまちづくりに活用されている。伝建地区と憲章の両輪による新しい町並み運動が展望された。ゼミ全体を通じて、21 世紀の新しいまちづくりの展望を開くためには、市民の決定権の拡大とまちづくりのランドデザインの確立が重要であると確認された。

運動と行政が鋭く対立した小樽運河保存運動の終息後 20 年を経て、今回のゼミに多彩な運動団体や行政が参加したことは、この確信を揺るぎないものとする第一歩となった。

参加者一同この確信を胸にまちづくりの新たな展望を開くことを宣言する。

2001 年 9 月 30 日

第 24 回全国町並みゼミ参加者一同

鞆の浦宣言

半世紀を迎えた記念すべき第 25 回全国町並みゼミは、「文化で生活（めし）がくえるかのう」をテーマに、2002 年 9 月 20 日から 22 日まで、瀬戸内の要津・鞆の浦で開催された。おりからの秋祭りでにぎわう鞆の浦には、全国そしてアジアから歴史的環境に関心を持つ人々約 800 名が集結、地元の人々とともにこれからの町並み保存のあり方について討議し、大きな成果をあげた。

鞆の浦は、豪壮な商家からなる町並みが、瀬戸内の美しい自然の中に佇む歴史的な港町である。ここには、現代生活と町並み保存の両立、文化と経済の活性化、自然と都市の関係、コミュニティの活性化、観光のあり方、土木遺産の保存など、歴史的町並みの保存に係わるあらゆる問題が集結している。われわれは、これら多様な問題を検討すべく、12 の分科会をもち、討議を重ねた。

初日は冒頭に「美しい都市をつくる権利」と題して五十嵐敬喜法政大学教授による記念講演が行われた。「美しい都市」をつくるのがまさにわれわれの社会の基本的な課題となっていくこと、そのためには官僚中心の体制を市民主体の体制へ変え、公共事業を市民事業へ転換する必要があることが強調された。続いて行われたシンポジウム「新しいまちづくり：町並みは社会資本」では、ジャパンプラットフォームの大西健丞を迎え、これまでの、町づくりをめぐる不毛な対決を超えるための、民・産・官・学の協調を実現する新しい体制への可能性が討議された。

翌日は、町内の散らばる寺院等を会場に同時多発的に多彩な分科会が展開された。伝建地区をめぐる第 1 分科会では、行政と住民のすれ違いという深刻な問題に対し「楽しくやる、必ずやる、やれることからやる」という行動方針が提起され、鞆の現状もまず「伝建をやる」ことに突破口があることが確認された。第 2 分科会は、ここ数年にわたって取り組まれている町並み憲章について、次代の担い手となる学生たちが論議した。第 3 分科会では、鞆をはじめとする歴史的港町の町づくりにおいては、これまであまり注目されてこなかった港湾施設やその遺産を町並みを一体的に整備するべきことを確認した。第 4 分科会では、広島での 4 事例を検討、行政と住民とのパートナーシップ、市民組織の形成、町並み保存地区間のネットワーク構築の必要性があきらかになった。第 5 分科会では、井戸や中庭など鞆の町並みに点在する魅力的な場所の重要性に着目した。「郷土食から見える風景」をテーマにもたれた第 6 分科会では、実際に地場の材料を使った調理を通して、郷土食を通して文化を継承・発展することの可能性・重要性を確認した。

特別分科会としてもたれた第 7 分科会では、町並み連盟の草創期を担ったパネラーが、それぞれの経験と次世代への期待を思い思いに語った。鞆の祭りをとりあげた第 8 分科会では、祭りが町の活性化に大きな役割を果たしていることを確認、その継承のために何が必要であるかを話し合った。第 9 分科会では、伝建地区選定のハードルとなっている都市計画道路の問題がとりあげられた。各地の事例を検討の後、鞆のケースについて意見交換を行い、具体的・現実

的な提案が緊急アピールとしてまとめられた。朝鮮通信使をテーマにとりあげた第 10 分科会では、韓国からのゲストも迎え、日韓の国境を超えた共有の遺産を継承していくための課題について意見を出し合った。観光をテーマとした第 11 分科会では、町並み保存を持続するためには、ホストとゲストが共に楽しめ癒されることが必要であること、そのために町づくり運動を特定の地域やグループに閉じるのではなく、より開放的なネットワークを組む必要があるとの結論を得た。港町のあり方に焦点をあてた第 12 分科会では、15 の水際の町の町づくりが紹介され、海から見た景観が忘れられがちであることなど有益な指摘がなされた。

第 3 日目には、パネルディスカッション「港町ネットワーク」が開催され、「鞆の浦の歴史的環境保全に関する緊急アピール」が採択された。

これら討議を通して、私たちは、雁木・常夜灯などがそろった歴史的港湾や対潮楼などに象徴される自然との対話の中で創り出された鞆の町並みの美しさ、町並みがはぐくんできたコミュニティの豊かさ、町並みに蓄積された文化の魅力に、21 世紀のわれわれの都市がめざすべき本質を見いだした。鞆のこれらの資質は、磨きをかければ世界遺産に十分値するものである。しかしその本質が危機にさらされている。これは鞆だけでなく、われわれの多くの歴史的環境に共通する課題である。解決の道は必ず存在する。われわれは、歴史的環境の保存が、都市を美しく、住み良くし、経済を活性化することへつながるという確信のもと、知恵を尽くして、そのための方途の発見と実践へ邁進することを、右宣言する。

2002 年 9 月 22 日

第 25 回全国町並みゼミ参加者一同

かしはら・今井宣言

第 26 回を迎えた全国町並みゼミは、わが国を代表する歴史的町並み・奈良県橿原市今井町を中心に、「再び、町並みはみんなのもの」を合言葉に掲げ、全国および世界から約 1000 人が集まり、熱心な討議をくりひろげた。今井は、全国町並み保存連盟発祥の地である。「町並みはみんなのもの」は、今井で生まれ第 1 回町並みゼミで使われたスローガンであった。今井は、1993 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、町並みの整備が大きな成果をあげてきた。今回の町並みゼミは、伝建地区制度などのもとでひとまず成果をあげた町並み保存の次をどのように展開していくかがテーマとなるとともに、奈良盆地の各地で新たに開始された町並み運動も積極的にとりあげられた。

初日には、伊藤鄭爾工学院大学元学長が基調講演を行い、今井の存在を知り昭和 30 年にわが国初の歴史的町並み調査を行った経過を証言、今井の町並みへの深い想いを語った。続いて行われた各地からの報告では、厳選された 10 地区が見事なプレゼンテーションを展開、内容も各地の町並み・まちづくり運動が着実に経験を積み、進化してきたことを裏付けた。

第二日には、町並みの見学と組み合わせた 15 の分科会が運営された。御坊・称念寺を会場とした第 1 分科会「めっちゃ古いデー、今井町の歴史とまちづくり」では、困難だった長い今井のまちづくりの取り組みを振り返り、サクセスストーリーの中にも住宅問題などなお解決すべき課題があることが確認された。防災をめぐる第 2 分科会「自分たちの町は自分たちで守る」は、文字通り住民が自分たちで守れるシステムをつくることの重要性が話し合われた。第 3 分科会「子供に伝える町並み」では、今井小ほかの写生大会や町並み探検隊の事例が報告され、町並みが子供の原風景になるようあらゆる機会を活用すべきだという結論を得た。第 4 分科会「町家ぐらしはいかがですか」では、住みたい人と貸したい人をつなぐことの重要性が浮き彫りになった。町並みゼミの定番「観光と町並み」をとりあげた第 5 分科会では、「観光先進地」の発表に対し今井の固有性がクローズアップされた。地域の固有性をいかした、それぞれの町並みにふさわしい観光のあり方の追求が課題との結論に至った。第 6 分科会「安心して老後がおくれるまちづくり」では、歴史的な町並みや住宅が、実は老後の生活に優しい環境であることが参加者から口々に語られた。重要文化財・豊田家を会場とした第 7 分科会「制度を変えると、町並みが生きかえる」では、準防火地区を巡る議論が白熱するとともに、耐震について伝統的な大工の技を再評価する必要性が訴えられた。第 8 分科会では、地域の建築士たちが主催する「町家再生デザインコンペ大募集」の最終選考が住民投票を交えて行われ、水と中庭を生かした作品が選ばれた。八木札の辻で行われた第 9 分科会では、奈良駅などの「近代建築物の保存とまちづくり」が話し合われた。

今回の町並みゼミでは、奈良盆地の各地で開始された町並み運動をもりあげる分科会も行われた。伝建地区をめざす大宇陀町では、第 10 分科会「町並み保存のプロセスを語ろう！」が行われた。まちづくりグループが活動する大和高田で行われた第 11 分科会「ゆっくり、じっくりまちづくり」では、他のモデルを追いかけるのではない新しい価値観に基づくまちづくり

の必要性が確認された。御所市で行われた第 12 分科会「町家今昔物語」は、多彩なまちづくり活動に取り組もうと設立された NPO 法人の旗揚げシンポジウムとなった。世界遺産をめざす吉野・黒滝村では第 13 分科会「山並みを生かした地域づくり」が行われ、山並みはみんなのものという価値観がうたわれた。

町並み問題にとって重要な女性の役割と中心市街地活性化を議論する分科会ももたれた。第 14 分科会「今井の女性、暮らしを大いに語る」では、歴史的町並みでの生活の継承がクローズアップされた。第 15 分科会「にぎわいが沸き上がる町」では、参加者一同、人口減少が始まると土地本位制が建築本位制へ移行、町並みの時代が再来するという確信を得るに至った。

重要伝統的建造物群保存地区選定以降、今井の町並みは見違えるほどに整備された。しかし、今回のゼミを通して明らかになったことは、この町並みをさらに維持・発展させ、生活を繰り広げていくのは住民であり、今井のみならず多くの歴史的町並みが、住民が真の意味で主体となる町並み保存の第二期へ入りつつあることである。今回のゼミは、全国町並み保存連盟が特定非営利活動法人となっはじめておこなわれた。そして連盟のみならず多くの団体が組織としての体制を整え、各地で住民主体のまちづくりシステムを構築しつつある実態があきらかになった。

全国町並みゼミ かしはら・今井大会に集った我々は、真に住民・市民が担う町並み・まちづくりへ向けて新たな地平を切り開いていくことを誓い、右、宣言する。

2003 年 9 月 21 日

第 26 回全国町並みゼミ かしはら・今井大会参加者一同

大聖寺宣言

全国町並み保存連盟の記念すべき 30 周年にあたる 2004 年の第 27 回全国町並みゼミは、9 月 18 日より 20 日までの 3 日間、加賀百万石の支藩として栄えた城下町・大聖寺を舞台に行われた。「ゆったりと行こう、あったらもんと共に」を合言葉に、全国および世界から約 600 人が集まり、歴史的環境をめぐる多角的な視点から討議をくりひろげた。今回のゼミでは、大聖寺を中心にしつつも、加賀市・山中町に点在する町並みや集落を会場に、それぞれの固有のテーマをとりあげ、各地区で運動を繰り広げる市民・住民団体とともに多彩な内容の分科会が実施された。

初日は、6 つのコースに分かれ、ボランティアガイドの方々に導かれてツアーを行ったあと、開会セレモニーそして各地からの報告が行われた。

第二日目の午前中には、まず全国町並み保存連盟 30 周年の記念式典が行われた。文化庁および国土交通省の町並み担当者からの祝辞をいただいた後、歴代会長への感謝状贈呈、去る 6 月 2 日に逝去した連盟顧問・石川忠臣氏の追悼が行われた。続いて「連盟 30 周年の歩み」と題し、6 名の関係者が町並み連盟の果たした役割を総括した。とくに「小樽運河保存運動を進めていく上で町並み連盟の存在はきわめて大きかった。今後もそのような場としての役割をしっかりと果たしていくべきだ」という峰山富美さんの言葉に会場は聞き入った。また「連盟の将来」について副理事長・前野まさる氏は連盟活動をいっそう強化していく決意を表明した。記念式典につづく「基調報告」で、東京大学教授・西村幸夫氏は、景観法が成立するなど町並み保存をとりまく制度が大きく変わりつつあることを指摘した。また、NPO 法人歴町センター大聖寺の埒正浩氏が、1994 年に住民主体の運動が始まって以来の経過を報告した。

午後は、8 カ所の会場に分かれて分科会が行われた。

瀬越の木造小学校を会場にした第 1 分科会「町並みは食にあり」では、食文化と町並み保存運動の関連が討論された。北前船主の建物が残る橋立で開催された第 2 分科会「町並みを五感で体感しよう！」では、五感をとぎすまし町並みの奥にある見えない価値を認識することができるということがワークショップを通して参加者の間で共有された。山中温泉で行われた第 3 分科会「観光と町並み景観」では住民が文化遺産を活かし楽しんでいることこそが外から観ても大きな魅力となることが確認された。山代温泉の九谷焼窯跡展示館で行われた第 4 分科会「文化財の活用と検証」では、文化は経済を救うという認識のもとに、有形・無形の文化財を守っていくことの大切さを子供たちに伝えていくことが論議された。片山津温泉に残る数少ない歴史的建物「芸妓検番」で開催された第 5 分科会「水辺を活かしたまちづくり」では、小樽と七尾を例に水環境の改善と景観の問題が話し合われた。とくに会場から柴山潟の水辺再生について意見が出され、人々が水辺に親しむまちづくりの大事さが指摘された。山懐深く抱かれた山中・今立町で開かれた第 6 分科会「山村の文化的景観の保存」には、地元の方々も大勢参加し、山村の価値を行政に先んじて認識することが必要と論じられた。北前船主の館を移築した蘇梁館で開催された第 7 分科会「城下町の歴史的資産を活かしたまちづくり」では、重要文

化財級ではない身近な文化財を、いかにまちづくりに活かしていくかが課題であると確認された。霊峰白山を望む動橋で開催された第8分科会「眺望景観の確保」では、西村幸夫氏と高田宏氏の対談が行われた。また、台湾から出席した丘如華氏が台湾の景観整備について報告した。

第三日目には、永六輔氏による特別講演「町並みを支えてきた職人たち」が行われた。

全国町並み保存連盟は30周年という節目を迎えた。現実にも歴史的町並みを取りまく環境も大きく変化しつつある。伝統的建造物群保存地区の数は60を超えた。町並み連盟が当初にめざした目標のひとつであった狭義の歴史的な町並み保存は一定の成果をおさめつつあるといえよう。そのような中で、歴史的環境に基づくまちづくりのいっそうの発展をめざして次の30年にわれわれは何をめざすのか、これから真剣な討議が必要である。大聖寺ゼミで、そのための多くの手がかりを得ることができた。

2004年9月19日

第27回全国町並みゼミ参加者一同

美濃宣言

第 28 回全国町並みゼミは、「とりもどそまいか町並みの賑わい」をテーマに、2005 年 9 月 16 日から 18 日までの 3 日間、長良川の美しい清流に生まれ、和紙で知られる美濃を舞台に開催された。全国各地から集結した参加者は延べ 1500 名、これまでの町並み保存運動の成果を確認するとともに、新たな展開をめざし町並み運動の刷新に取り組むことを確認した。

美濃の「うだつの上がる町並み」は、亀甲にたとえられる台地上に築かれた歴史的都市である。1980 年代に始まった保存の動きが実り、1999 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されてから着実に修復が行われてきた。ゼミ 2 日目午後には、見事に再生された町並みで、名物の花神輿が町を練り歩き、山車でからくり人形が演じられ、仁輪加競演会が多数の観客を集めて開催された。われわれは、市民の方々とともに、伝統的な町並みが、まさに 21 世紀の都市がめざす「ゆっくりと流れる時間と空間」であることを、はっきりと確信した。

ここへ至るまでの美濃の人々の努力は、午前中に行われた分科会「消したら暗闇電燈（伝統）文化」「美濃和紙あかりアート展と美濃・紙の芸術村」「守れ町並み！火災への挑戦」「町並み賑わいの再生」「町家の耐震ポイントと対策」「美濃紙世界に発信」で解き明かされた。美濃は、1970 年代にはじまったわが国の歴史的町並みの保存のひとつの到達点であり、私たちが世界に誇れる成果と言えよう。

しかし、国内では美濃をめざしてまだまだ多くの町が奮闘中である。そして記念講演で入船亭扇治師匠が指摘したように、町は生き物である。甘やかすとどんどん悪くなる。1 日目の「各地からの報告」はそのことを的確に物語っていた。報告では、道路などの公共事業とマンションが、この 30 年間あいも変わらず、町並み保存にたちふさがり大きな問題であることが明らかとなった。小樽では運河地区に、その歴史的環境を売り物にした高層マンションが林立しようとしている。町並みを壊滅する道路拡幅を都市計画の変更で逃れた川越では再びマンションの進出に脅かされた。2002 年の町並みゼミを開催した広島県・鞆では、埋め立て架橋問題が道路事業として再浮上、再び歴史的環境破壊の危機に見舞われている。「道を拡幅して成功した商店街はひとつもない、古い町並みを活かして成功している例はたくさんある」は、依然日本人の「常識」となっていない。にもかかわらず、犬山では「城下町地区の都市計画道路変更の法的手続きはすべて完了」を市長が宣言した。村上では、古い町並みの価値を市民自らの活動で示し都市計画道路の見直しへ行政をうごかしつつある。さらに、財政難や意思の欠如で能力を失った行政に代わり、市民自身が資金を調達し保存・再生活動に取り組む事例が参加者の共感を呼んだ。明らかになったのは、保存をめざす市民の不断の努力こそが町並み保存と町づくりを動かす原動力だということである。

今回のゼミでは、第 2 分科会「伝建制度と景観法」に多くの参加者の関心が集まった。同分科会では、ふたつの制度を融合させ、伝建地区周辺のマンションなどの進出への規制や点在する歴史的建物の保存を実現していく可能性が話し合われた。同時に、そのためには住民の合意、そして基準をつくり制度を運用する行政職員の覚悟と意欲が不可欠であることが指摘された。

景観法の制定や文化的景観保存地区を新設した文化財保護法の改正は、町並み保存運動にとって追い風である。しかしそれらを活かすのも、やはり市民の不断の努力を措いてない。

また、ゼミを通じて、若い世代が各地の町並み保存・町づくりの担い手として大きな役割を果たしつつあることが明らかとなった。

全国町並み保存連盟と町並みゼミの役割は、このような、町並み保存をめざす市民の共通の基盤となることである。どのようにすればその役割を果たすことができるのか。第8分科会「全国町並みゼミのあり方」でそのための討議が始まった。町並み保存の基本的な課題が変わったわけではない。しかし取り巻く状況は大きく変化しつつある。われわれはそのような変化を的確に捉え、結集する人々の期待に応えていかなければならない。参加者一同、そのための町並み運動の再構築をめざすことを決意し、右宣言する。

2005年9月18日
第28回全国町並みゼミ参加者一同

八女福島宣言

29 回目となった全国町並みゼミは、「未来へ継承するぞ、町並み文化」をテーマに、住民・市民が町並み保存に奮闘を続ける福岡県八女市福島に全国各地から約 800 名が集結、町並み保存の現在を共有するとともに、次なる展開へ向けての思いを新たにしました。八女福島は、久留米から豊後に向かう往還沿いに形成された城下町で、半里にわたり妻入・入母屋の町家が連なる。漆喰で塗り固められた居蔵造が特徴の町並みである。ここで八女の人々は、住民の「八女福島伝統的町並み協定運営委員会」をコアに、市民の立場でまちづくりを推進する「本町筋を愛する会」「ふるさと塾」、建築専門家からなる「町並みデザイン研究会」などが、行政の「町並みプロジェクトチーム」と連携、多彩な活動を繰り広げてきた。とくに、空き町家の修理活用を、斡旋から取得までを手段を尽くして実践する「町家再生応援団」や町家保存機構は特筆に値する。

1 日目の「各地からの報告」では、全国の多くの仲間が、同様の取り組みを行っていることが明らかとなった。蔵バンクに取り組む「伊勢河崎まちづくり衆」、町家の不動産証券化まで乗り出した「京町家情報センター」、持ち主と契約して空家の維持管理・活用運営を行っている東京の「たいとう歴史都市研究会」、壊される寸前の町家を借り受け、初動期の苦難を超え商業施設として成功させつつある「有松まち普請の会」、10 数件の町家再生を果たした「駒まちづくり工房」の報告があった。この課題は 2 日目の第 2 研究会「空き町家等の保存活用と中心市街地の活力づくり」でさらに深められ、今後さらに情報交流を進め、事業を展開していく必要性が話し合われた。

町並み保存団体のパワーと実力は確実に高まりつつある。反面、「どうして町並みは残さんといかん？」という住民の反応は依然大きい。たえず問われる町並み保存の意義について、愛媛県内子で町並み保存・村並み保存を手がけてきた岡田文淑氏が、「町並みは暮らし人のために」と題する基調講演を行った。岡田氏は、観光資源としての町並みが住民によって守られ育てられているという認識から観光観を捉え直すべきだとし、「観光とは、まちづくりである」「まちづくりとは、地域住民のためのものである」と喝破した。

町家や寺院を会場に行われた各研究会でも、「町並み保存の意味」は基本テーマであった。まちづくり団体の活動活性化をとりあげた第 1 研究会では、佐原、豆田、肥前浜宿、八女福島からのパネラーが一致して、広範な市民を集めた町並み運動が多彩な活動に取り組み、所有者の保存会と協働していく姿を描き出した。建造物保存の技術・技能者の育成と技術の継承に関する第 3 研究会でも、専門家の継続的な研さんとともに、住民や小学生にもその意味や必要性を訴える活動が必要であるとの認識が共有された。伝統工芸と町並みをとりあげた第 4 研究会では、伝統工芸に生きる職人の意見が表明され、その背景に空気のように町並みがあることが確認された。第 5 研究会では、コミュニティの強化につながる町並みのイベントづくりと町並み観光が追求されるべきことが話し合われた。第 6 研究会では、子供の成育にとっての歴史的町並みの意味を確認するとともに、高齢者がまちに対する誇りを次代に伝えるようなイベント

に取り組む必要が指摘された。第 7 研究会では、防災の重要性とともに地域の自律性にもとづく防災こそが要ということで意見の一致をみた。第 10 研究会では、町並みイベントとしての伝統工法体験の重要性が、実際の体験を通して浮き彫りにされた。

筑後地域は文化的景観が豊かである。伝建地区をめざす黒木町で開催された第 8 研究会では、伝建制度や景観法などを活用して周辺環境と一体の住み続けたい町をつくる道が探られた。上陽町で開催された第 9 研究会では、棚田や石橋の保存をテーマに、都市と農村の交流人口を増やし、相互理解を深めるために、いかに都市住民を楽しく「おびき寄せる」かが話し合われた。

ゼミの期間中、燈籠人形の公演、職人さんの実演、土橋御幸行事が町並みの各所で展開された。稚児行列と獅子舞の「どんどんきんきん」を背景に、ゆったりと時間の流れる町家や寺院で行われた研究会を通じて、私たちは、歴史的町並みが、町並み運動を通して、私たちの生活・文化・経済・社会・環境すべてにかかわるかけがえのない「学校」となることを実感した。私たちは、このような歴史的町並みの意味を再認識し、その意味をより多くの人々に伝える活動を継続するとともに、町並み保存のための能力と力量をさらに高めていくことを決意し、右宣言する。

2006 年 10 月 8 日

第 29 回全国町並みゼミ参加者一同

伊勢宣言

記念すべき第30回となる全国町並みゼミ伊勢大会は、6年後の式年遷宮に向けた活気にあふれる三重県伊勢市で開催された。日本人の心のふるさとである当地に、全国から集った約700名によって、「伝えよう心とかたちのまちなみ文化」をテーマに熱い討論が繰り広げられた。

1日目には、神宮司庁広報課長の河合真如氏が「式年遷宮と伊勢のまち」と題する基調講演を行い、日本人の心と形の継承について説いた。また、開催地伊勢の活動報告では、行政との対立から始まりながら協力関係に到達した河崎と、当初から行政と協働したおはらい町、そして二見浦、神社（かみやしろ）港など多彩な取り組みが紹介された。恒例の各地からの報告では、新規加盟の2地区を含む7地区が発表した。特に軀の埋立架橋計画問題については、住民による差止訴訟にもかかわらず、行政による埋立免許出願に至った緊迫した現状が訴えられた。全国からの更なる支援が求められる。

2日目は、「町並み保存と技術の継承」「景勝地と町並みづくり」「ものづくりとまちづくり」「世古（路地）を生かした安心・安全まちづくり」「景観法と町並み保全型まちづくり」「海、川の景観と舟運を活かすまちづくり」「町家の再生活用と町並み文化」「文化財建造物の保存と活用」「街道文化と町並み保存」という9つの分科会が開催された。町並みだけでなく広域的環境を含めた視点は、伊勢ならではの特徴といえよう。また、単なる「町並み保存」から「保存を軸としたまちづくり」にテーマが発展しているのも、町並み運動の歴史を物語っている。

最終日となる3日目は、「町並みゼミが伝えていくものは何か」をテーマに「町並みゼミ30回記念パネルディスカッション」が開催され、10年ごとの区切りを代表する小樽、竹富島、八女福島の3地区と、新たな10年の端緒となる宇和が登壇した。

今回のゼミで我々は、式年遷宮の思想から、くり返し初心に戻りつづけることの意義を学んだ。町並みをまもり、生かす制度や活動が確実に進歩していることを確認できた一方で、軀に見られるような時代錯誤の開発が依然として横行するのを見るとき、日本人が本来持っていたはずである自然との共生という初心に今一度立ち戻らねばならないことを痛感する。世代交代が多く町並みを消失させているなか、親が受け継いだ価値を子へ伝えることも大切な初心である。また、有形の建造物群のみでなく、無形の技術や伝統的な仕組みも含めた総体としての町並みを再発見し継承していく必要がある。

連盟と町並みゼミの活動もまた原点に戻り、次の10年に向けて決意を新たにすることをここに宣言する。

2007年9月16日

第30回全国町並みゼミ参加者一同

卯之町宣言

第 31 回となる全国町並みゼミ卯之町大会は、「だんだん 学ぼう よもよも人づくり」をテーマに、愛媛県西予市で開催された。学びの思いと感謝の心が人々に受け継がれる当地に 1,000 人を超える人々が集い、歴史的環境をめぐる大きなうねりを感じながら、熱心な議論が展開された。

1 日目は、新たな試みとして、宇和、大洲の各会場での分科会から始まった。地域に根ざした実践家や研究者の入念な準備のもとに企画された、それぞれの分科会では、「人々のつながりと町並み文化」「地域遺産としての学校建築の保存と活用」「文化的景観の保存と継承」「わらぐろ景観から農村景観を考える」「未発掘町並みにおける地域資源の活用方策」「町並みと観光」「住まいの再生と町並みの保存」という 7 つの話題が取り上げられた。

2 日目は、開催地卯之町からの活動報告では、太古から続く宇和の歴史とそこで生まれ継承されてきた地域遺産が説明され、卯之町の町並み保存をめぐる険しくも忍耐強い取組みの経緯と現状が報告された。続いて分科会報告があり、町並み保存の原点を問う議論や、地域資産の再発見、くらしの真の発展とは何かを問う真摯な議論の成果が報告された。恒例の各地からの報告では、新規加盟の盛岡まち並み塾、あづち大島たからもんの会、城下町松江の景観と町づくりを考える会の 3 団体を含む 8 団体が発表した。また四国からは、未加盟団体 4 団体を含む 8 団体が発表した。さらに今回から始まった連盟からの報告として、つくば市集落景観調査、文化庁委嘱調査「町並み保存・活用支援団体等の活動実態調査」の経過が報告された。

最終日となる 3 日目は、「地域遺産を考えたまちづくりのこれから」をテーマとし、ゼミを総括する討論会を開催した。伝統的建造物群保存地区制度に始まり、登録文化財制度や文化的景観制度を基軸として進みつつある歴史的環境の保全の取組みに、歴史文化基本構想や歴史まちづくり法による国の総合的な支援制度が整った今日、地域や自治体はこうした多彩な手法を如何にして使いこなすのか。この重要な課題を参加者全員で共有することができた。

今回のゼミで我々は、従来の文化財概念が大きく拡大、転回しつつあり、その保存と活用に大きな道が開けつつあることを確認した。学びの思いと感謝の心が人々に受け継がれる卯之町の地において、こうした環境の変化を、「だんだん」学びとり、まちづくりのネットワークをますます強力にすることで、「よもよも」言いつつ人を育て、あらたな町並み保存の地平を切り開いていくことを、ここに宣言する。

2008 年 10 月 13 日

第 31 回全国町並みゼミ卯之町大会参加者一同

佐原・成田宣言

第 32 回となる全国町並みゼミ佐原・成田大会は、「歴史的資源を生かしたまちづくり」をテーマに、千葉県香取市佐原および成田市で開催された。佐原は利根川の水運を生かした水郷の商都として、成田は霊場として名高い成田山新勝寺の門前町として栄え、ともに多様な歴史的資源を生かしたまちづくりを実践している両地区に全国から 1,200 名を超える人々が集い、熱心な議論が繰り広げられた。

1 日目は、地域本位の町並み保存行政を大きく発展させた現国立小山工業高等専門学校長の荻谷勇雅氏が「町並み保存運動の展開と歴史まちづくり」と題した基調講演を行い、日本の町並み保存運動史の特徴、近年の展開と課題について解説をした。開催地からの報告では、関東地方初の重要伝統的建造物群保存地区である佐原の町並み保存活動、成田の表参道を舞台とした様々な景観整備が報告された。恒例の各地からの報告では、新規加盟の 3 団体を含む 11 団体が発表した。

鞆からの報告では、「鞆の浦世界遺産訴訟」において広島地方裁判所により原告らの請求を許容する勝訴判決が出され、鞆の浦の景観に対する国民の財産としての文化的、歴史的価値が認められるとともに、景観の保護を理由とした初の着工前の公共事業の差し止めが命じられた旨が伝えられ、この歴史的な判決を高く評価して 1 日目が閉幕した。

2 日目は、「民官学による歴史まちづくり」「水を生かしたまちづくり」「町並みと人並み」「町並みを楽しむ体制づくり」「まちに活気と元気を取り戻す」「町並みの再生と資源化」「門前のまちづくり」「国際化と観光立国づくり」「景観をまちづくりに生かす」「スポットから面への観光」という 10 分科会が開催された。

最終日となる 3 日目は、町並み部門別交流会の後に分科会報告が行われ、本大会のテーマである歴史的資源を十分に生かすためのまちづくりの在り方に焦点があてられ、有形無形の歴史的資源の幅広い発掘と適切な評価、地域主体の活用方法、持続性のある体制づくり、国際化による価値の向上などを問う真摯な議論の成果が報告された。

今回のゼミでわれわれは、人口減少や高齢社会、世代交代に伴う社会状況の変化の中で、住民主体の歴史的町並み保存運動の大きな成果と直面する課題を確認した。この 1 年間の大きな成果としては、昨年度のゼミ開催地の愛媛県西予市卯之町は重要伝統的建造物群保存地区に選定されることが文化審議会によって答申され、特別決議をした旧神戸生糸検査所庁舎は神戸市による保存活用が決定し、鞆の浦の訴訟は画期的な勝訴判決が出されたことが確認された。一方、保存運動を切り開いた有松や小樽といった先達からは、世代交代に伴う町並み消失の危機などを背景に、長年に渡り未解決であった安定的な町並み保存制度の不在という課題や近年直面している景観紛争などの新たな課題の解決に向けての決意が示された。

われわれは、人々が地域に住み続ける限りまちづくりには決して終わりがなく、未永く歴史や文化と向き合うことの大切さを理解するとともに、地域の生活環境とコミュニティの質を高めていくために粘り強く「歴史的資源を生かしたまちづくり」を展開していくことを、ここに宣言する。

2009年11月15日
第32回全国町並みゼミ佐原・成田大会参加者一同

盛岡宣言

第33回となる全国町並みゼミ盛岡大会は、19年ぶりとなる東北開催となった。「黒川さんさ」や盛岡芸妓などの伝統文化が豊かに残り、また県庁所在地でありながら、歩いて楽しめる、この城下町に全国から延べ約1,500名が集った。住民運動によって町並み保存が進む鉾屋町界限と登録文化財となった岩手県公会堂を主会場に、「暮らしのいきづく町並み～住民による歴史まちづくり～」をテーマとする活発な討論が展開された。

1日目には、作家で市民運動家の森まゆみ氏が「古い町並みは古い友だち～谷根千27年の経験から～」と題する基調講演を行い、人が住んでいる町並みは建物だけでなく、生活文化を維持することが重要であると語った。開催地盛岡からの活動報告では、都市計画道路事業が進む中、地域資源の掘り起こしを重点に取り組み、結果として行政の街並み景観プロジェクトに発展した経緯が述べられた。続く各地からの報告では、新規加盟の1団体を含む5団体が発表した。特に、竹富島のリゾート開発受け入れはその決断の成功を期待する。しかし的山大島神浦（あづちおおしまこうのうら）の防波堤整備問題は、重要な課題を提示した。ブロック別会議では、取り組みの活性化について議論された。

2日目は、「住民のための歴史まちづくり」「暮らし文化を活かした環境づくり」「町並みを次世代につなげるために」「町家・民家の継承とまちづくり」「暮らし文化の発掘と地域ネットワーク」「都市の歴史遺産を残す」「城下町の川まちづくり」「都市を囲むお参りの景観」という8つの分科会が開催された。大慈清水や青龍水などの共同井戸が現在も生活の一部となっているように、身近な暮らし文化の保存・活用が活発に行われている状況が浮き彫りになった。その後の6つの部門別交流会も充実した議論が行われた。

最終日となる3日目は、分科会報告から始まった。続いて、初の試みとなる鼎談によるゼミ総括と提言が行われ、自然環境や、洋館など点在する建造物の保存から、面的な町並みの再発見に発展した盛岡の現状を受けて、今後に向けて提案がなされた。

今回のゼミを通して我々は、鉾屋町での都市計画道路廃止や住民自身の力による町家の再生・活用に象徴されるように、まちづくりの大きな変化を感じずにはいられない。この鉾屋町でのまちづくりが、中の橋・紺屋町、青山町、桜山商店街など市全域に広がりつつある。

町並み保存は、地域マネジメントであることが再認識されよう。一方で、林立するマンションや空地を目の当たりにするとき、歴史的な中心市街地全体の再生という、全国共通の深刻な問題への取り組みを強化しなければならないことを思い知らされた。

我々は今一度、制度のみならず、暮らし文化が町並みを残してきた事実を見直し、成熟した日本にふさわしいまちづくりに邁進することを、ここに宣言する。

2010年11月7日

第33回全国町並みゼミ参加者一同

飛騨市宣言

第 34 回を迎えた全国町並みゼミ飛騨市大会は、「つなごう歴史の町づくりー飛騨の匠の技と心を伝えようー」をテーマに、岐阜県飛騨市で開催された。この山紫水明の地へ、全国から訪れた 370 名の人々とそれを歓迎する 500 名の地元住民が集い、3 日間にわたり真摯な議論が繰り広げられた。

1 日目の基調講演では、日本政策投資銀行の藻谷浩介氏が「土地本位制から町並み本位制へー人口成熟下を生きる我々が次代に遺すものー」と題する基調講演を行い、良好な町並みを維持している地が人々の投資と居住を集める時代がくるといふ、我々町並み保存を実践している地域にとって、心強いお話があった。開催地からの報告では、これまでのまちづくりの成果と、生活景観を活かした地域経営の重要さが述べられた。

各地からの報告では、5 地区から報告が行われたが、特に東日本大震災の被災地である「盛岡まち並み塾」と「小野川と佐原の町並みを考える会」からは、被災状況と歴史的町並みの復興を目指して頑張っている地域の現状、そして支援に対する感謝が述べられた。

2 日目は、朝から晴天となり、古川祭の屋台が曳き揃うとともに伝承文化披露会が開催され、この地に息づく祭り文化のすばらしさを体感することが出来た。飛騨市を構成している古川町、神岡町、河合町、宮川町の各地における町並み見学と「町並みをつくる匠文化の継承」「点在する過去を偲ぶ建造物の保存と利活用」「農村の今までとこれから」「町並みをつくる祭り文化」「市民参加の元気なまちづくりで、交流人口の増加」「町づくりを次の世代へ」という多彩な 6 つの分科会が開催された。部門別交流会も充実した議論が行われた。

最終日は分科会報告が行われた後、今後へつながるアジアの町並み保存についての議論が行われ、アジア町並みゼミへの展望が開かれた。

今回のゼミでは、匠の技の継承の重要性と、住民主体で行われてきた飛騨市のまちづくりの成果を確認できた。そして、文化と誇りを感じる町並みが今後ますます価値を高め、まちづくりには良好な景観が重要であること、地域固有の生活景観を維持していくためのハードとソフトを含めた地域経営の重要性を認識した。

我々は、地域の暮らしに支えられた町並みの価値を高め、生活文化を活かしたまちづくりを推し進めることを、ここに宣言する。

2011 年 10 月 2 日

第 34 回全国町並みゼミ飛騨市大会参加者一同

福岡宣言

第 35 回全国町並みゼミは、「地域遺産の再発見とまちの魅力創造：福岡から活かそう 町並みとアジア文化」をテーマに掲げた。大都市・福岡を舞台に全国そしてアジア各国から歴史的環境の保全に取り組む約 1200 名が集結、三日間にわたり熱心な討議を繰り広げた。一日目の座談会、各地からの報告、二日目の 6 つの分科会、そして最終日のシンポジウムを通し、参加者一同は、伝建地区を含むあらゆるまちづくりにおいて歴史的資源を継承することの重要性を確認し、町並み保存運動の新たな展開へ向けていっそう活動を強化する決意を新たにした。

前回の飛騨市大会以降の一年は、町並み運動の画期となる出来事が続いた。まず、長いたたかいが続いた瀬の浦で、広島県知事が埋立て架橋事業の撤回を決断した。小樽運河問題以来、歴史的環境を破壊する公共事業とたたかってきた町並み運動の大きな成果である。

そして、重要伝統的建造物群保存地区が 100 カ所を超えた。伝建地区制度は、歴史的な町並みを保存する方法として、すっかり身近なものとなった。

このような中、福岡大会の各地からの報告と各分科会で確認されたのは、町並み保存の新たな局面である。第一は、都市開発が進んだ市街地において、改めて歴史的な都市構造や資源の重要性が認識されてきたことである。歴史的な起源をもつ町割、マンションや高いビルの影に点々と遺る町家や寺院、細く曲がりくねった道、そこここに刻まれた歴史などが、これまでも増して、まちづくりの重要な資源と考えられるようになった。第二は、「ルールと補助金」で建物を直す制度の定着に対し、空家の再生と利用が最重要課題となってきたことである。今や「町家の再生と活性化」が、各地の運動の主要なターゲットとなり、経験が積み重ねられつつある。

アジアとの連携も、福岡大会の重要なテーマであった。確認されたことは、人口の減少や空家の増加など、基本的な課題が各国に共通することである。

いずれの課題も、経験交流や情報交換が有効である。とくに、町並み保存をめぐるアジアとの交流は、政治的な軋轢を超えて市民の確実な連携につながるであろう。

各地の運動団体は、今大会の成果をもとにそれぞれの活動のいっそうの充実につとめるとともに、全国町並み保存連盟を核にさまざまなレベルで相互にネットワークの構築につとめることを誓い、右宣言する。

2012 年 12 月 1 日

第 35 回全国町並みゼミ福岡大会参加者一同

美しい町並みをめざす倉敷宣言 倉敷川・高梁川のほとりにて

第 36 回全国町並みゼミは、「つながる地域文化の伝統と創造～備中の風土力の発信」をテーマに開催され、倉敷市を中心に高梁川流域の備中地域の町並みを舞台に、全国から 600 名余の参加者が 3 日間にわたり熱心な討議を繰り広げた。参加者一同は、初日の講演や各地からの報告、2 日目の 7 つの分科会と現地見学、3 日目の分科会報告と討議、そして交流会や夜なべ談義等を通じ、倉敷・備中地域の伝統と文化、その蓄積を示す重厚かつ洗練された町並みの魅力を十分に味わうとともに、その継承に向けた地域の人々のこれまでの努力に触れ、また互いに各地の経験と課題を交流した。

全国の町並み保存活動は、重要伝統的建造物群保存地区が昨年末に 100 地区の大台を超え、現在すでに 104 地区に達し、さらに増加の勢いである。これに加えて景観法や歴史まちづくり法の活用による町並み保存および景観保全の事業、さらにはこれらに関連した歴史的建造物の活用の取組みや歴史的町並み地区の総合的防災計画の検討など、各地で様々な活動がますます活発になっていることが挙げられる。

歴史的建造物の保存・活用については、保存活用にかかわる幅広い専門家の養成をめざす「全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会」が多数の関連 NPO や建築士会が参画して昨年発足した。私たちはこのような動きを支持・支援するとともに、その養成講座の質の確保を期待する。歴史的建造物の保存・活用にかかる建築基準法の適用についても進展が見られた。この分野での先進都市である京都市は、昨年「伝統的建築物保存活用条例」を制定し、建築基準法をそのまま適用するのではなく、京町家等の伝統的建築物本来の構造と意匠が、安全性を確保する中で継承できる方途を開いた。この条例を活用し、NPO 法人「京町家再生研究会」等の努力により、伏見区の大規模町家の龍谷大学サテライトキャンパスとして改修され、活用が実現した。まだまだ課題は大きいものの、こうした京都の取組みは全国の仲間を勇気づけた。さらに、空き家の再生と利用も経験が積み重ねられつつあり、今大会でも活発な交流がなされた。この際、修理だけでなく、不動産や流通、資金調達など多角的な観点の重要性も指摘され、新たな活動目標が確認された。さらに、多くの歴史的建築物の保存活用に努力指定している自治体、団体等で構成している「歴史的建築物活用ネットワーク」が提案している国家戦略特区の提案について、賛成し、ネットワークに加わることとした。その際、歴史的建築物が安心・安全な活用が進められること、またそれらの歴史的特性が確実に維持・継承できるよう、慎重な議論も必要であることを確認した。

今大会では、上記のような様々な成果と課題、提案を真剣に語り合った。各地からの参加者一同は、今大会の成果をもとに活動の充実と相互ネットワークの強化を通じて、それぞれの地域が歴史的個性を輝かせ、いっそう美しい町並みの実現をめざすことを、美しい、ここ倉敷において誓い合い、右宣言する。

2013 年 9 月 22 日

第 36 回全国町並みゼミ倉敷大会参加者一同

鹿島・嬉野宣言

第 37 回全国町並みゼミは、「つなごう歴史遺産 みがこう町並み文化」をテーマに、有明海で栄えた嬉野市塩田津、鹿島市浜宿に、全国そして台湾から約 650 人が集結、町並みの保存と再生で昔日の面影をとりもどした 3 つの重要伝統的建造物群保存地区を舞台に、町並み保存とまちづくりをめぐる濃密な討論を繰り広げた。今年は、全国町並み保存連盟発足 40 周年である。その記念すべき年にふさわしく、わが国における歴史的環境保全の未来を切り開く道が照らし出された。

重厚な呉竹酒造東蔵で開催された全体会では、鍋島更紗の再現につとめた人間国宝の鈴木滋人氏、吉野ヶ里遺跡で古代の町並みの復元をリードした高島忠平氏、京都市そして文化庁で町並み保存に尽力してきた荻谷勇雅氏が鼎談、生活文化としての町並みが人々の心へ与える影響を説く鈴木氏へ、深い賛意が表された。続く各地からの報告では、6 団体から発表があり、新潟の会津八一記念館の保存をめぐる報告からは、近現代建築遺産の保存が今後の課題として浮かび上がった。

2 日目は 7 つの分科会が開催された。第 1 分科会「町並み保存・活性化の入門」では、初動期の町並み運動をどう展開するかについて各地の経験を交流、強いリーダーシップと参加の両立が重要であることを確認した。第 2 分科会「地域に根ざした産業とまちなみ」では、肥前浜宿ブランドの確立をめざす試みを軸に、単に商品を外に売るのではなく、来て買ってもらうツーリズムをどのように興すのが議論された。第 3 分科会「防災とコミュニティ」では、防災設備の充実とともに、コミュニティの成員ひとりひとりの意識にもとづく自主防災体制の必要性が再確認された。第 4 分科会「歴史遺産を次世代へ繋ぐ、全国の仲間とともに」では、浜宿と塩田津の子供達の地域学習のすばらしい成果が発表され、改めて大人の姿勢と適切な指導の重要性が議論された。第 5 分科会「空き家の活用・再生を考える」では、若者によって町家が活用され、ビジネスとしても成立している事例が、仕掛ける立場、活用する立場の両面から報告された。第 6 分科会「町並み保存と技術の継承」では、若い人材の育成と技術の普及啓発とともに、それぞれの時期の住民の生活感が率直に現れた建物を大切に作る景観づくりの必要性が議論された。巨大な志田焼の窯の中で行われた第 7 分科会「暮らしと文化に根差したまちづくり：地域遺産の活用」では、住民が、それぞれの地域のライフスタイルを誇りとし、それを世界へ直接発信していこうということで会場がもりあがった。

共通するのは、町並みは、物理的な建物や構造物だけでなく、それをめぐる生活文化とともに評価され、保存・再生の手が打たれなければならないということである。中でも、空家の活用・再生をテーマにした第 5 分科会は、今ゼミの大きな成果である。ここ数年来のテーマが、着実に進化した。新しい価値観のもと、若者や住民がライフスタイルを見直し、各地で胎動し始めたこのような動きは、町並み保存運動の新しい展開を導くであろう。

わが国は、少子高齢化と地方の衰退という大きな課題を抱えている。そのような中であって、歴史的環境の保存・再生を中心に据えた地域開発は、わが国が世界が羨む成熟社会となるため

の有力な手段となる。以上の確信のもと、心新たに歴史的町並みの保存と再生、そして伝統の創造に邁進することを、ここに宣言する

2014年11月9日
第37回全国町並みゼミ参加者一同

豊岡宣言

第 38 回全国町並みゼミは、「ふるさと よみがえりへの想い」をテーマに、幾多の災害を乗り越え美しい町並みをつくりあげてきた兵庫県北部・但馬の中心・豊岡市内の四つの町を舞台に開催され、今なお町づくりの最先端を切り開こうとする市民の姿が、参加者に大きな感銘と勇気を与えた。コウノトリですっかり有名になった豊岡だが、わたしたちは、そこにコウノトリを育む自然と美しい町並みが不可欠に結びつく、21 世紀の地方のモデルを見出した。

初日の全体会は、大規模な改修によって蘇り、豊岡の新しい町づくりのシンボルとなった城崎国際アートセンターで開催された。基調講演は、豊岡の復興建築保存にかかわってきた西村幸夫東京大学教授。その経験を紹介しながら「まちに刻まれた想いが生活文化の未来につながる」ことを訴えた。続いて同教授の司会で行われた各地からの報告では、準防火地域の撤廃や災害に備える模索などの積極的な動きがある一方で、竹富島のリゾート開発問題、防災に名を借りた景観破壊が懸念される鞆の浦の防潮堤問題、修復が進んでも空き家が増えて行く現状など、町並み保存が置かれた新たな課題が浮き彫りになった。

2 日目の分科会の舞台となったのは、城崎、出石、豊岡、竹野の四つの町である。1925 年の北担大震災後、住民の総意で木造三階建ての町並みを復活した城崎では、ふたつの分科会が持たれた。第一分科会では、今日では既存不適格となる木造三階建てを事例に、歴史的建物をどのように活用していくか、そのための法的な障害をどのように乗り越えるかをテーマとした。パネラーの中貝豊岡市長から、豊岡市が建築基準法の適用除外条例を制定する準備をすすめていることが発表され、この分野で豊岡市が最先端にあることが明らかになった。第二分科会では、町づくりに災害復興から何を学ぶかをテーマとした。城崎の復興の経緯が詳細に明らかにされ、安全への備えは、被害を小さくする日頃の準備が重要なこと、そして復興における適切なリーダーシップと住民の意思決定こそが重要ということが確認された。

城下町出石も、明治 9 年に大火があり、現存するのはそこから復活した町並みである。その町並みの保存と活かし方をめぐってふたつの分科会が持たれた。第三分科会は、つい最近復活がなった芝居小屋「永楽館」をめぐり、全国各地でも動きのある芝居小屋復活には、その都市の社会と文化を守り育てる大きな意味があることが確認された。第四分科会では、観光化が歴史的町並みの美しさを損ねている現状を踏まえ、活気と美しさの両立が話し合われた。

北但大震災の復興にあたり、城崎と対照的に近代的都市をめざした豊岡では、当時の復興建築をめぐって第五分科会がもたれた。これら建築が評価されるようになったことは良いとして、それらだけを取り出すのではなく、震災を生き延びた町家や、震災後に建設された町家、城下町の痕跡など、都市の歴史を総体として評価していくべきという問題提起がなされた。

北前舟の寄港地・竹野の焼き杉板貼りを特徴とする町並みは、本ゼミの参加者から「未発掘の町並み」として驚きをもって迎え入れられた。竹野で開催された第六分科会では、地元大工による杉板を焼く実演も行われ、地域固有の建物を守る意味と必要性が痛感された。なお、この竹野の町並みも大正 7 年の洪水後に再建されたものである。

今回のゼミに先立つ本年 1 月、城崎で起きた火災は、町並み保存のための規制緩和の動きを押しとどめるのではないかと懸念された。しかし、本ゼミにおいて、この火災が、木造そのものに起因するのではなく、木造でも適切な措置が取られれば防止の手立てがあることが冷静に指摘された。

本ゼミを通じ、私たちはふたつの点を確認した。第一に、私たちは繰り返し起こる災害に対し美しい町並みを復興する能力を備えている。来たるべき災害への備えは、自然を征服する土木工事とは異なる方法が模索されなければならない。第二に、こうして築いてきた歴史的町並みは、今や地方創世の不可欠な手がかりとなった。しかしその保存・活用には、これまでの価値観を転換する必要がある。都市計画法、建築基準法、文化財保護法、旅館業法など諸制度は確実に見直される必要がある。

以上、私たちは、町並み運動の使命を再確認し、その実現に最大限の努力を傾けることをここに宣言する。

2015 年 6 月 15 日
第 38 回全国町並みゼミ参加者一同

大内・前沢宣言

第 39 回全国町並みゼミは、「町並みを次の世代へ～保存と暮らしの共存～」をテーマに、緑濃き、水清い美しい自然と茅葺き集落を守り、育ててきた福島県南会津の下郷町大内宿、南会津町前沢集落を中心に 9 月 9 日から 11 日まで開催された。大内宿は第 9 回大会以来 30 年ぶり、前沢集落は初めてのゼミ開催である両地区と、南会津の中心である田島地区でも、歴史的な町並みの保存と生き生きとした暮らしの持続的発展をめざして、全国から集まった参加者と地元の人々、約 400 人が、現地見学や分科会等、熱い討議と経験交流を続けた。

初日の全体会は、下郷町ふれあいセンターで開催された。開会行事のあと、篤志家の寄付をもとに今年度あらたに創設された「峰山富美賞」の授賞式が行われた。小樽連河の保存運動の先頭に立ち、全国各地の様々な保存活動に大きな影響を与えてきた峰山富美さんの業績を顕彰するこの賞の第 1 回の受賞者は、広島県福山市柄の歴史的港湾と町並みの保存に向けて、仲間と共に長年にわたって活動し続けてきた松屈秀子さんである。松居さんは「自分たちの活動は峰山さんに励まされて始まり、勇気をもって発展してきた」と受賞の喜びを語り、ゼミ参加者一同もその思いと決意を共有した。

続いて北海道大学教授西山徳明さんの進行で「町並みを次の世代へ」をテーマに地元大内宿の吉村徳男さんと岐阜県白川村の利田正人さんの対談が行われた。地域の伝統行事や茅葺きの伝統技術の継承、保存地区内の交通対策など、両地域での実践が語られ、地域コミュニティの持続と暮らしの発展こそ歴史的町並みと豊かな郷土を次世代に伝える基盤、との認識で一致した。

「各地からの報告」では、開催地からの報告も含めて 17 もの報告が行われ、火災や震災からの復旧、地域での独自の町並みゼミ開催、修理修景の問題、危機に頻する歴史的建物の保存への訴えなど、多様な活動状況や直面する課題が呈示された。7 会場に分かれてのブロック別会議では、ブロック活動の活発化の課題や各ブロックの固有の課題について討議された。その中では、たとえば伝建地区における修理修景事業のあり方、自治体行政の課題等も浮彫りになった。

2 日目は大内宿で 2、前沢集落で 2、田島地区で 1 の合計 5 つの分科会が開催された。

第 1 分科会は旧大内分校で開催され、「町並み保存と活用」をテーマに 5 班に分かれて「大内宿の魅力と課題」について、フィールドワークをもとにワークショップ形式で意見を出し合った「暮らしを含め、建物内部空間の魅力を楽しめる努力とともに、町並み最観への細かな配慮の積み重ねが大切である」という方向性を確認した。

第 2 分科会は大内集会所で開催され、「人が住み続けられるまち」をテーマとして議論を深めた。町並みの保存のためには地域経済を成り立たせていくことが不可欠であることを確認すると共に、観光の本質は観光客におもねず、「人の生業がしつかりあること」、「衣食住の文化をみがくこと」が基本であるとの思いを共有した。そして「保存という間発」という、私たちの活動の目標を的確に表現する魅力的な言葉も発信された。

第3分科会は前沢交流館で開催され、主に歴史的町並みにおける防火の課題が議論された。出火させない予防がまず大切であること、出火した場合は住民自身による初期消火が重要であることを、前沢地区住民の放水実演も踏まえて明らかにされ。そして、防火は地域の実状に合った適切な対策が重要であることが再確認された。

第4分科会は前沢曲家資料館を会場として、「農村集落の生き残り方」をテーマに開催されたこの分科会では、地域の自治・自立の力が重要であり、それは外部との交流によって、より豊かに培われてゆくものであることが確認された。

第5分科会は田島の御蔵入交流館で開催された。まず奥会津博物館にこの地域の過去を訪ね、ワークショップでは田島の現在の町並みを訪ねて、地域の未来を考えた藻谷浩介さんの基調講演では南会津町の人口動態から見た未来が示され、続いて地元の活動家の二氏からの報告があった。そしてワークショップの結果としてこれまで地元では十分意識されてこなかった田島の魅力と価値が明らかにされ、今後の田島のまちづくりに展望を与えた。

本ゼミを通じ、私たちは、大内宿と前沢集落、そして田島地区を舞台に、保存と暮らしの共存をめぐる様々な課題に取り組んだ。この地域の人々の歴史的町並みや環境の保存と継承への多様な努力と工夫を学び、また全国各地の経験を伝え合った。そして、地域の特性や資源、そして暮らしを大切に継承・発展させようとする私たちの歴史的町並み保存連動が、うわべの経済指標を超えた真の地域振興策となる可能性をも見いだした。

以上、歴史的町並みをはじめとする文化遺産の保存と活用や環境保全がようやく我が国の経済発展への主要目標の一つとして位づけられるようになった現在、私たちはそれを積極的に受け止めると共に、コミュニティの絆を大切にする中で保存と暮らしを両立させ、その価値を次世代に伝える努力を、全国の仲間とともに続けていくことを、ここに宣言する。

2016年9月11日

第39回全国町並みゼミ大内・前沢大会参加者一同

名古屋有松宣言

第40回全国町並みゼミは、11月17日から19日の3日間、第一回ゼミが行われた有松に、全国から約450人が結集、記念すべき名古屋有松大会を開催した。今回のスローガンは「町並みはわたしが守る～みんなのものから40年～」。

参加者は、これまでの町並み運動の成果を踏まえ、次の10年へ向け、戦略を描き、その実践へスタートを切る決意を新たにしました。

一日目、喫緊のテーマである観光とまちづくりをめぐる、東海旅客鉄道株式会社相談役・須田寛氏が「日本の観光 きのう・いま・あす」と題して基調講演を行った。同氏は、観光は経済活動であると同時に文化活動であると指摘、したがって住民がまちに誇りともてなしの心を持つ「常在観光」の発想によるまちづくりが欠かせないと喝破された。

続いて行われた町並みゼミの名物・各地からの報告では、有松まちづくりの会と名古屋市からの報告を皮切りに、13地区が発表を行った。住民の力で「京都市京町家の保全及び継承に関する条例」を成立させた京都、埋め立て架橋問題を乗り越えいよいよ始まる町並み保存を正しく進めるための取り組みを始めた鞆の浦など、各地で独自に充実した活動が展開していることが印象付けられた。

二日目、7つの分科会に分かれて討議を行った。有松・鳴海絞会館で行われた第1分科会では、「これからの町並み保存」では、行政にできないことを、エンジンを備えた推進力が、地域との融合を図りつつ進めることが不可欠との認識で一致した。竹田嘉兵衛商店の三番蔵で行われた第2分科会「伝統産業の継承と町並み」では、有松絞りを題材に、手仕事は絶対残るという確信のもと、町並みと伝統産業のコラボレーションで新しい文化や産業を生み出す構想が熱く語られた。第3分科会「町並みと山車・まつり」では、まつりの地域コミュニティ力を具現化する役割、町並みと祭りはセットであること、外に開き継承していくことの必要性が確認された。桶狭間古戦場を舞台に行われた第4分科会「歴史文化を活かしたまちづくり」では、必ずしもモノが残されていない場合、どのように記憶を伝えるかについて議論を深めた。

第5～7分科会は、名古屋市内に点在する、有松以外の3つの歴史的地区で開催された。名古屋城東の「文化のみち」で行われた第5分科会「歴史的資産のネットワーク」では、お屋敷や洋館が点在する地域の保存について、特にエリアマネジメントの重要性が確認された。揚輝荘のある城山・覚王山界隈で行われた第6分科会「近代化遺産の保存と活用」では、昭和初めの田園都市の建物の保存について、個別の建物を保存する場合であっても町の人々の協力が重要であることが、他都市から助言された。四間道で行われた第7分科会「城下町のまちづくり」では、大都市に遺された歴史的地区の保存の課題が多方面から検討された。

この40年を経て、私たちは、従来の所有者とその他という枠を超えて、空家を取得する、お店を開く、クラウドファンディングに参加する、指定管理者となる、町歩きガイドをする、町並み散策を趣味にするなど、それぞれの立場から、歴史的建物や町並みにより深く・広くかかわるようになった。3日間に及ぶ熱心な討議を通し、私たちは、それぞれの立場から「町並みはわたしが守る」を実践し、以下に取り組むことを宣言する。

1. 歴史的な建物や町並みを持続的に維持していくためには、歴史的な建物や町並み地区の市場価値があがることが欠かせない。私たちは、それぞれの立場から、歴史的な建物や町並みの保存・再生に主体的にかかわり、市場形成の一翼を担っていく。
2. 安易な開発や保存は市場価値をあげるにならない。私たちは、今まで以上に、歴史的建物や町並みの本質的な意味・仕組みを研究し・学び・共有し、確かな修理・修復・修景、そしてまちづくりを進める。
3. 歴史的な町並み地区を、地場産業、地域のライフスタイルなど、地域の誇りを産業にする場とし、経済社会の再生をはかる。その際「かわいい、楽しい、おいしい」を目標に据え、若者が出店しやすく、参加しやすい町をめざす。
4. 「観光は外からの再評価」という原点を確認し、住民が誇りともてなしの心を持つまちづくりを進める。新しいものを受け入れるにあたっては、住民の五感に違和感をもたらさないよう、コミュニティのルールを定める。一方で地権者が安心して歴史的建物を貸し出せるまちづくり会社などのシステムを整備する。
5. 伝建地区の枠組みを超えた歴史的建物の保存と継承へ向け、歴史的建物への建築基準法適用除外を措置する技術的助言、歴史的な建物を存置することが可能になった都市再開発法の改正、歴史的建物の保存・活用を進める自治体の条例制定などの動きが始まった。その動きが一層本格的に展開するよう、「町並みはわたしが守る」取り組みを強力に進める。

2017年11月19日

第40回全国町並みゼミ名古屋有松大会参加者一同

長野松代・善光寺宣言（案）

第41回全国町並みゼミ長野松代・善光寺大会は、「町並みを守って歴史文化のまちづくり」をテーマに、全国から400人が集まり、次の50周年へ向け、その第一歩にふさわしい成果をあげた。次の10年のテーマは、第40回名古屋有松ゼミで宣言した「町並みは私が守る」。私たちは、その実践やあり方について、長野松代そして善光寺で多くを学んだ。

1日目、西村幸夫神戸芸術工科大学教授が「日本における町並み保存の歴史と今後の展望」と題して記念講演を行なった。同教授は、明治以降の歴史保存が、時代の変化に対応して展開して来た経過を振り返り、少子高齢化・人口減少という現在の変化が、従来の外からの異質なものの侵入とは異なる内部からの崩壊であると喝破した。同氏はまた、1981年にたずさわった松代の町並み調査で見出した武家屋敷の池をつなぐ泉水路のシステムが、庭園都市・松代の歴史的環境を維持・継承する鍵になると指摘した。

新しい変化への対応は、活用の概念を導入した文化財保護法の改正など制度面でも始まっている。今回のゼミでは、各地からの報告に先立ち、来賓の国土交通省の渡瀬知博歴史文化環境整備室長に歴史まちづくり法について講演をいただき、相次いで導入された歴史的建物活用を支援するファンドについて、金融機関から紹介を受けた。

続く各地からの報告では、開催地の夢空間松代のまちと心を育てる会を皮切りに10団体が発表を行った。明らかになったのは、運動のレベルが上がる一方で、「内部からの崩壊」を食い止めることが難しくなっている現状である。竹富島では「ならぬ」と島民が一致団結する観光開発が許可され、各地で重要伝統的建造物群保存地区以外で歴史的建物等が相続などを契機に次々に壊され、行き過ぎた観光化で歴史的資産が損なわれている実態が報告された。

二日目は、5つの分科会が行われ、上記課題へ多くの示唆を得た。「善光寺門前の場合」をテーマとする第一分科会では、空き家・空き店舗のリノベーションを、多様な人材がネットワークを形成し、地域の関わりを大切しながら、行政に頼らず実践する、まさに「私が守る」斬新な取り組みを学んだ。

松代を舞台にした第二から第五分科会は、松代城整備で存続が危ぶまれる松代駅を出発点とする町歩きから始まった。

第二分科会「歴史的景観の保存と継承」では、松代の泉水路のシステムを軸に文化的景観を導入する意味や可能性について、山形県長井市と長野県飯山市小菅という先駆例を学びつつ討論が行われた。第三分科会「歴史的建造物の保存と活用」では、NPOなどが地域に根ざして人間関係を構築しながら適切な活用を推進することが、活用のために重要なだけでなく、災害の迅速な復旧にも繋がることを確認した。第四分科会「歴史文化を活かした観光まちづくり」は、参加者が、松代小学校の民話語りクラブによる紙芝居や体験プログラムなど、松代の人々が取り組むおもてなし活動を体験することから始まった。午後の討論では「観光地化」と対局的、地域コミュニティの維持・強化を同時に達成する松代の実践が高く評価された。第五分科会

「城下町の町並みを活かしたまちづくり」はリノベーションによる空き家の利用を中心テーマに、各地でそれを実践する団体からの報告をもとに討議が行われた。そして外から来た人（風の人）が水の人となり土に浸み込み、地元の人（土の人）と地域の価値を結び直すという理念が共有された。

今回のゼミの開催地となった長野市松代そして善光寺は、私たちが直面する課題を考える上でまことにふさわしい場所であった。

第一に、「町並みは私が守る」実践について多くを学んだ。NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会、文化財ボランティアの会、エコール・ド・まつしろ倶楽部などの、住民によるさまざまなボランティア活動が、おもてなし活動を実践し、松代まるごと博物館を実現する取り組みに、他者を迎えることがすなわち自らのコミュニティの維持・強化につながるという観光の原点を再確認した。

第二に、重伝建地区の周辺地区や重伝建地区に馴染まない歴史環境の保全の方法について、可能性や限界を学んだ。とくに、重伝建地区か文化的景観かという二者択一を超えて、より包括的な制度の枠組みを構築することが喫緊の課題である。

私たちは、今回の町並みゼミで学んだことを糧に、それぞれの地区での運動に取り組み、次のゼミにいつその成果を持ち寄ることを誓い、右宣言する。

2018年11月18日

第41回全国町並みゼミ参加者一同

川越宣言

第 42 回全国町並みゼミは、蔵の町並みで知られる埼玉県川越市を会場に、全国から約 450 名が集まり、「歴史都市のこれから～過去に学び、今を見つめ、未来を想い、共に歩む」をテーマに、2020 年 1 月 31 日（金）、2 月 1 日（土）の二日間にわたり開催された。川越での全国町並みゼミは、1993 年に第 16 回大会を行って以来、四半世紀ぶりの開催である。その後、1999 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、多くの観光客が押し寄せるようになった。2018 年には、町並みを自主管理してきた町並み委員会が 30 周年を迎えた。しかし、デザインの誘導ではなお模索が続いており、特に伝建地区外で失われる伝統的建物が後をたたない。

今回は、今後町並みゼミを開催する地元団体の負担を軽減するため、一泊二日のプログラムを試行した。代わりに、前日、東京谷中において「プレイベント in 谷中：谷中をとおして最先端の歴史まちづくりを考える」を開催、「谷中を伝建地区に」を掲げた「たいとう歴史都市研究会」の協力を得て、見学会とトークセッションを行なった。

ゼミ 1 日目は昼に集合、6 つの分科会ごとに、それぞれのテーマにあわせたまち歩きとパネルディスカッションを行なった。第 1 分科会「歴史的都市環境（Historic Urban Landscape = HUL）をどうするか？」は、前日のプレイベントから連なるテーマで、伝建地区になりきれない歴史的環境をどう保全するか、伝建地区の外に広がる歴史的環境をいかに保全するか、望ましい制度的枠組みについて討議・構想した。伝建地区の間口を拡大するのか、文化的景観を拡充するのか、両者を組み合わせるのか、専門家間で火花が散った。

第 2 分科会「町並みはみんなでつくる」は、川越の町並み委員会などで実践されている、住民による町並みの自主的マネジメントがテーマであった。パネラーたちは、その成立のためには、住民同士がまつりやワークショップを通して町並みの価値を共有していく不断のコミュニケーションが欠かせないことを口々に指摘した。第 3 分科会「景観まちづくりがもたらしたもの」では、オーバーツーリズムや、町並みへのマンションやホテルの進出を背景に、住民と来街者の良好なあり方を討議した。「京町家の保全及び継承に関する条例」を定めた京都からは強制力をもたない規制がうまく働いていないという報告があり、地域コミュニティの利益を最大化するよう、いっそう強力な方策をとる必要性が確認された。

第 4 分科会「伝統的な技と心の継承・育成」では、さまざまな職業のパネリストたちが、歴史的な町並みや建物を次世代に引き継ぐ実践について報告、ホンモノや地域の魅力を、楽しく持続的に伝えることが共通のポイントとして浮かび上がった。第 5 分科会「魅力的な建物を使いこなそう」では、各地で伝統的な建物の活用に取り組む 30 代、40 代の第二世代たちが、自分のライフスタイルを実現したいという欲求こそ原動力と語りあった。第 6 分科「地域物件の個性を活かす編集力とエリアマネジメント実践ワークショップ」では、参加者がそれぞれ空き家物件を持ち寄り、どのように所有者の理解を得て行くかなどの方法を学んだ。

開会式は 2 日目に行った。引き続き行われた陣内秀信・法政大学教授の基調講演「歴史都市を活かしたまちづくり：イタリアとの比較とこれからの日本・川越」では、歴史的都市の再生

が劇的に進むイタリアの豊富な事例を通して、日本との多くの共通点を指摘するとともに、日本の町並みでも、商業施設としてだけでなく、よりクリエイティブな活用を進めること、周辺農村との連携が肝であると喝破した。

町並みゼミ名物・各地からの報告では、新会員である台湾歴史資源経理学会を含め、12 事例が報告された。真壁、竹富、鞆の浦など重伝建地区からの報告とともに、新潟、小諸、奈良まち、臼杵、行田、小川町、引田など必ずしも重伝建地区に指定されていない歴史都市で、さまざまな活動が取り組まれていることが報告され、歴史都市全体を保全するより確実な枠組みの必要性が痛感された。

私たちは、この四半世紀に川越が実現してきたまちづくりに、たくさんの人々が訪れていることに目を見張り、私たちの町並み運動の確かさを確認した。同時に、重伝建地区の内外に、歴史的資源の滅失など多くの課題があり、運動の手を決して緩めてはならないことも確認した。この認識のもとに、これからも知力と想像力を尽くして町並み運動に取り組む決意を新たにし、右宣言する。

2020年2月1日

第42回全国町並みゼミ川越大会参加者一同

桜川市真壁宣言

第 43 回全国町並みゼミは、「これからの町並み保存とは？ 度重なる災害からの復旧と、新しい生活様式の中で」をテーマに、新型コロナ感染拡大の第三波に揺れる 11 月 22 日、桜川市真壁を拠点に、オンラインで全国をつなぎ開催された。真壁の町並みは、東日本大震災で大きな被害を受けた後、見事に復興を遂げた。会場となった石塚邸も、災害復旧した建物である。その経験を全国の人々と共有し、新しい災害ともいべきコロナ禍のもとで、町並み保存の意味やあり方を探ることが今回のゼミの目的となった。

プログラムは、真壁の町並み保存に最初から関わってきた河東義之・小山高専名誉教授の基調講演からはじまった。「桜川市真壁の震災被害と復旧：課題と展望」と題する講演の中で、河東先生は、復旧の経過をたどり、壊れても取り壊しに至ったケースがほとんどなかったこと、その要因として日頃からの運動の成果とともに、行政による積極的な財政支援を指摘した。また日頃の手入れが被害を小さくすること、そのためには何よりも、建物がいきいきと使われる状態を生み出すまちづくりが基本となると締めくくった。

オンラインで、元気なヴォランティアの方々から導かれて町並み見学をした後、震災からの復興に携わってきた、行政担当者、建築士、住民代表、ディスカバー真壁代表が集まり、藤川昌樹・筑波大学教授のコーディネートでパネルディスカッションが行われた。20 年以上に及ぶ、登録文化財制度徹底活用などのユニークなまちづくり活動、震災から 10 年でなしとげた復旧の成果を振り返りつつ、この状態に甘んずることなく、建物の活用を進め、現下の課題に取り組んでいくために、一層の協力を進める決意が表明された。

今回の講演と討論を通して、私たちは、「新しい生活様式」が、町並み運動が一貫して追求してきた、人間的で自然と共生する社会のあり方にほかならないということに確信を持った。私たちは、これまでの運動に自信を深め、新しい人間関係の確立とよりよい生活環境の創造をめざして、いっそうの努力を重ねることを誓い、ここに宣言する。

2020 年 11 月 22 日

第 43 回全国町並みゼミ桜川市真壁大会参加者一同

奈良宣言

第 44 回全国町並みゼミは、コロナ感染者数の減少で観光客が戻りつつある、秋たけなわの古都・奈良で開催された。オンラインを併用するハイブリッド方式で、約 400 名が参加、「まちの資産のいかしかた：なにを、だれが、どのように」をテーマに、2021 年 11 月 12～13 日の二日間にわたって開催された。

東大寺、興福寺など古社寺の町として知られる奈良だが、近年は、歴史的な町並みの残る奈良町を多くの人々が訪れるようになった。奈良町は、元興寺境内跡とその周辺に発展した狭義のならまちに、きたまち、京終・紀寺、高畑を加えた、個性豊かな 4 つのエリアからなる。プレゼミとして 10 月 3 日に開催された「奈良町トーク」には、各エリアから十指に余る多様なまちづくり団体が集結した。

ゼミ一日目、参加者は「奈良町見知り」の特別イベントに誘われて町を巡った後、午後からの分科会に臨んだ。

第一分科会「歴史的な町並みの保全に向けた制度の在り方：その課題と展望」では、奈良、倉敷、京都の報告をもとに討議が行われた。論点のひとつは、重伝建地区の対象となりにくい広範囲の歴史的地区をいかにして保全していくかであり、奈良の充実した景観制度に注目が集まった。同時に、京都から、もみじの小路町家群再生プロジェクトの体験をもとに、必要なのは制度を活かし、超える「町の力」であるとして、「制度の在り方」が狭義の制度論にとどまるべきではないことが指摘された。この間、私たちが、新たな制度の在り方を探ろうと学んできたユネスコ HUL (Historic Urban Landscape) 勧告も、狭義の制度論にとどまらない活動の必要性をうたっていることが、改めて指摘された。

第二分科会「町家の継承の考え方：暮らしの変化に合わせた取り組み」では、萩、八女、奈良の事例を通して、①世代交代が進む中、移住者を積極的に受け入れ、町家の新しい利活用を進める必要がある、②町家の価値を損なわないよう建築家や技術者の養成を進める必要がある、③それらを実現するためにも主体の構築や資金の確保が必要である、という三つの課題に同時に応えていく体制が必要であることを確認した。

第三分科会「生活文化を継承する手法と課題：「なにを」残すのか」では、町家や会所に残る歴史や物語を掘り起こす奈良町、水と共生する生活空間が美しい滋賀県の針江・霜降、座敷文化を総合的に伝える新潟の古町花街などの事例から、モノ（建物や町並み）とコト（生活や歴史）の関係について話し合った。モノは残るが生活の消えた地域、その逆の地域、全く新しい環境など、さまざまな場に育つ子供達に、それらを伝える方法や文化景観にも議論は広がった。

第四分科会「まちづくり活動の経済的持続性：「どのように」ビジネスを取り込むのか」では、白杵、豊岡、奈良などで古民家ホテルや城泊などに取り組む 4 人のパネリストが、再投資によって経済の循環を実現していく必要性和可能性に言及しつつも、行政支援や地銀等地元金融機関との連携が共通の課題として浮上した。

第五分科会「町の良さの伝え方：ニューヒーローの思い」は、各地の 40 代前後がコーディネーターとパネリストをつとめた。町の良さを伝えるために、SNS などの新しいメディアを駆使する必要性とともに、町並みのオーセンティシティや地域コミュニティの重要性があくまでも基本にあるべきことが確認された。

1 日目の夜は、峯山富美賞贈呈式と各地からの報告を行った。真壁、肥前浜宿、臼杵、引田、小樽、新潟から、コロナ禍にあっても、次の目標に向かって粘り強く活動に取り組んでいることが報告された。2 日目は、奈良市の主催によるシンポジウム・全体会が開催された。開会セレモニーに続くオープニングアクトでは、町家を主人公にした朗読劇「町家よ語れ」が上演された。町家が自ら語るという手法を通して、人の営みが家と共にあるということを奈良町の歴史的な出来事を交えて披露し、町家の大切さを訴えた。

続く奈良まちづくりシンポジウムでは、奈良でまちづくり活動に取り組む倉橋みどりさんが、西村幸夫國學院大學教授、増井正哉奈良女子大学・京都大学名誉教授に、住民・市民のまちの資源をいかす取り組みのあり方を問いかけた。これに対し両教授は、奈良の運動への共感を示すとともに、全国の事例をひきつつ貴重な助言を行なった。

本ゼミは「まちの資産のいかしかた：なにを、だれが、どのように」を掲げ、第 1 回ゼミの「町並みはみんなのもの」、第 40 回ゼミの「町並みは私が守る」と展開してきたテーマを一步進め、町並み保存の主体と方法をいっそう具体的に明らかにしようとした。明らかになったのは、私たち自身の「町の力」を一段と高める必要性である。私たちは、学習・教育・実践を通じて、コミュニティの力量を確実に高めていくことを決意し、右宣言する。

2021 年 11 月 13 日

第 44 回全国町並みゼミ奈良大会参加者一同

新潟・歴史まちづくり宣言

第45回全国町並みゼミは、柳都として知られ、中世から開かれた港町・新潟市のまちなかを舞台に2022年6月11～12日の二日間にわたって開催された。心配されたコロナ感染者数もおさまりつつあり、県外からの200名を含む約400名が参加、「市民の活動でつなげる歴史まちづくり：みなとまち新潟から考える」をテーマに、初夏の新潟を満喫しつつ、歴史まちづくりへの新たな展望を開くべくあつい討論を繰り広げた。

新潟は、これまで必ずしも歴史的町並みの都市とは認識されてこなかった。しかし新潟まち遺産の会をはじめとする市民運動が成果をあげ、重要伝統的建造物群保存地区中心の町並み保存とは一線を画する歴史まちづくりの可能性を切りひらきつつある。1日目の昼から始まった分科会は、それら活動に取り組む各団体の担当で運営され、参加者は、新潟まちなかの六地区に分かれ、それぞれまちあるきの後パネルディスカッションに臨んだ。

堀割が縦横にめぐっていた、みなとまち新潟の水環境をとりあげた第一分科会「港町と水辺のまちづくり」では、港町の面影や進取の気質を再認識し、まちづくりに活かすこと、ノスタルジーではなく現代の町並みにこそ必要という観点で水路の復活に取り組むことを確認した。

第二分科会は、小澤家住宅周辺地区を舞台に、歴史的町並みの保存・活用に関する制度が拡充する中「住民による町並み保全制度の選択」をいかに進めるかを話し合った。新潟では、景観計画の特別区域指定を住民提案で実現した経験があり、制度選択の前後に、専門家が正しい知識を住民に伝える支援体制の重要性が指摘された。「見方を増やすことで味方を増やす」「よかった、楽しかった」という声が広がるのが、数年後に結実するという、新しいまちづくりの時代を予感させる議論が展開された。

古町花街には、日本の伝統文化を包括的に継承する「生きた文化的景観」としての花街が継承されている。第三分科会では「花街のまちづくりと文化的景観」をテーマに掲げ、その文化をどう受け継ぐべきかを話し合った。花街文化を都市の魅力を発信する重要な文化歴史的財産として位置づけることで「景観まちづくり」から「空間まちづくり」へ深化する必要性と可能性を確認した。

第四分科会「歴史的環境と芸術文化」も、アートが随所でまちづくりに重要な役割を果たしている新潟ならではのテーマである。周囲から際立つ図としての従来のアートではなく、歴史を刻んだ空間にひそむ心をゆらす、地としてのアートをアートが発見し、発信し、人々の意識や心に働き開ける事例を、東京谷中、新発田、横浜、ダンサー堀川久子さんの思いを通じ話し合い、アートが人をつなげる力を確認した。

第五分科会は、若い世代の出店が相次ぐ白山神社の門前町・上古町商店街を事例に「門前町の商店街に若者が係わる理由」を解き明かすことをテーマとした。上古町では、まちづくりのセンスと意志を持つ若手起業家がまちと出会って出店し、やがて地域の信頼を得て商店街の理事長になり、その姿を見てさらに若い起業家が出店する、という好循環が起きている。その背後には、老舗の大店（旦那衆）が少なく若者のアイデアを受け入れる風土があることを明ら

かにした。

第六分科会は、信濃川対岸にある新潟島より起源が古いと言われる港町・沼垂と流作場に形成された路地の町・天明町を舞台に「路地のある町をどう安全に、魅力的にしていけるか」をテーマとした。脱炭素社会におけるこのような木造密集市街地の再生の意義、外部の目には魅力的なものが同時に地域の課題であるという矛盾の解き方が話し合われ、同様の課題をかかえる東京・すみだ向島の、空き家となった長屋を改修し、アーティストたちが次々と店を開くという先事例を学んだ。

夜の交流会は、食事は黙食であったが、食後はブロック別会議や全体の交流が行われ、リアルな会話を通して親交を深めることができた。

2 日目は全大会で、開会式、新潟の町並みと歴史まちづくりについての報告の後、古町芸妓の舞を鑑賞した。そして、奈良、小川町、有松、HUL に取り組む倉敷、内子、来年ゼミを開催する小樽からの報告があり、最後に各分科会からの報告を受けその成果を共有した。

午後は、引き続き「にいがた美しいまちなみフォーラム 2022」として、岡本哲志さんの「港町・新潟の価値と可能性：川と海の結節点に描かれた都市空間の履歴」と題する基調講演、そして「歴史を活かしたまちづくり」というテーマでパネルディスカッションが行われる。分科会等で学び討議した内容が整理され、理論化され、歴史まちづくりの新たな展望が開かれることが期待される。

本ゼミは、市民が連携し、都市の歴史をたどり、あらんかぎりの想像力で遺された歴史遺産を活かし、次の時代を切り開くという歴史まちづくりのあり方を描き出す画期的な成果をあげた。参加者一同、その成果を踏まえ、各地域にもどり、歴史まちづくりの大きなうねり起こすことを決意し、右宣言する。

2022 年 6 月 12 日

第 45 回全国町並みゼミ新潟市大会参加者一同

全国町並みゼミ一覧

第1回 有松・足助ゼミ 「町並みはみんなのもの」

日時 1978（昭和53年）年4月22日～23日
会場 愛知県名古屋市緑区有松町有松小学校講堂
愛知県東加茂郡足助町 足助町民センター
記念講演 城戸久（名古屋工業大学名誉教授）『伝統的民家の保存』
稲垣栄三（東京大学教授）『歴史的町並みの課題』
基調講演 西山卯三京大名誉教授『足助の町並みの問題点』
見学会 有松の町並み見学 足助の町並み見学
担当 有松まちづくりの会 足助の町並みを守る会

第2回 近江八幡ゼミ 「明日へ活かそうわれらの遺産」

日時 1979（昭和54）年6月23日～24日
会場 滋賀県近江八幡市文化会館
記念講演 宮本又次（大阪大学名誉教授）『町人生活と商法』
西川幸治（京都大学教授）『町なみ保存とこれからの町づくり』
ケース・スタディ
川端五兵衛（よみがえる近江八幡の会）『町づくりの方向を目指して』
山崎正史京大助手『八幡の町並みと保存修景計画』
見学会 近江八幡の水郷めぐり
担当 よみがえる近江八幡の会

第3回 小樽・函館ゼミ 「あたらしい町自慢の創造を」

日時 1980（昭和55）年5月24～27日
会場 小樽市医師会館 函館市公会堂
記念講演 大谷幸夫（東大教授）『町並み保存と現代都市計画の課題』
交歓討議会
第1会場：保存運動と住民の理解（長崎・中島川）
第2会場：保存と開発の見直し（伊勢・河崎）
第3会場：保存の制度・事業のあり方（愛知・足助町）
見学会 小樽の町並み見学 函館の町並み見学
担当 小樽運河を守る会 函館の歴史的風土を守る会

第4回 琴平ゼミ 「息づけ！町並み 町の顔」

日時 1981（昭和56）年6月6日～8日

会場 香川県琴平町金毘羅大芝居、他
記念講演 西岡常一（法隆寺大工）『木のいのち、木のこころ』
ケーススタディ 『琴平町』町並み研究会
分科会 第1分科会：町並み運動と商業活動（琴平町）
第2分科会：町並み運動と住民生活（妻籠宿）
第3分科会：町並み運動と都市づくり（京都市）
見学会 琴平の町並み見学
担当 こんぴら門前町を守る会

第5回 東京ゼミ 「語ろう明日の町並み町づくり」

日時 1982（昭和57）年7月17日～18日
会場 東京都目黒区駒場 こまばエミナース
東京からのメッセージ
鯨岡兵輔前環境庁長官
一番ヶ瀬康子日本女子大教授
記念講演 松下圭一（法政大学教授）『日本の行政体質と町並み運動』
特別報告 菊屋嘉十郎萩市長（山口県）
山内喜久夫関町長（三重県）
東京ウォーキングレポート
パネル・ディスカッション 行政と住民の対話
決議 竹富町の風致保存運動を励ます決議
担当 全国町並み保存連盟東京事務局（準備会）

第6回 白杵ゼミ 「町並みに誇りと息吹きと未来とを」

日時 1983（昭和58）年6月11日～13日
会場 大分県白杵市中央公民館、黒島荘
記念講演 宮本憲一（大阪市立大教授）『町づくりと住民参加アメニティを考える』
白杵レポート 白杵の歴史景観を守る会
分科会 第1分科会：商業近代化と町並み保存（大分・杵築、山崎正史京大助手）
第2分科会：点在する歴史遺産の保存（堀内清治熊本大教授）
第3分科会：伝統民家の改造問題（吉田桂二日大講師、由良滋九州芸工大教授）
担当 白杵の歴史景観を守る会

第7回 太平ゼミ 「町ぐるみ語れ、町並みこそふるさと」

日時 1984（昭和59）年5月26日～28日
会場 長野県飯田市公民館、太平宿

記念講演 武田武（野県山岳協会会長）『自然保護と町並み保存』

特別報告 長野県の町並みと町づくり運動

分科会 第1分科会：民家の改造と修景計画

第2分科会：商業振興と町並み保存

第3分科会：自然保護と町並み保存

第4分科会：過疎の町並み保存

第5分科会：これからの保存運動

担当 太平宿をのこす会 太平宿を語る会

第8回龍野ゼミ 「残そう、町並みの心と形」

日時 1985（昭和60）年6月15日～17日

会場 龍野市民会館、赤とんぼ荘

記念講演 吉田光邦（京都大名誉教授）『町並みの基本を考える』

特別鼎談 原田薫龍野市長・矢埜与一伊丹市長・浅井弥七郎霞城文化自然保勝会長、司会：八木哲浩神戸大名誉教授

分科会 第1分科会：工業化の波をくぐりぬけていく町並み（高砂、尼崎、竹原）

第2分科会：経営の質と町並みの味（大分、会津若松、近江八幡）

第3分科会：町並みの民俗学（龍野、松阪ほか）

新設 職能別交流会、研究発表会

ツアー 播磨路（龍野—平福—赤穂—坂越—室津—高砂）

担当 龍野・霞城文化自然保勝会

第9回会津ゼミ 「町並みと商人文化の創造」

日時 1986（昭和61）年7月19日～21日

会場 会津若松市・文化福祉センター

東山温泉・東山パークホテル

下郷町大内宿・大内公民館など

喜多方市・喜多方プラザ

記念講演 伊藤ていじ（前工学院大学長）『女心と保存』

相沢韶男武蔵野美術大教授『目指せ世界の大地』

分科会 第1分科会：町並み保存とふるさと産業おこし（大内宿を中心に）

第2分科会：町並み・保存と再生（喜多方を中心に）

第3分科会：これからの町並み保存（全国的視野から）

新設 シンポジウム『町並みと商人文化の創造』

ツアー 熱海温泉—磐梯高原—米沢（米沢復古会と交流）

担当 会津復古会・大内宿保存会・会津北方風土会

第10回松阪ゼミ 「生活文化としての町並みを考える」

日時 1987年（昭和62）年6月6日～8日
会場 松阪市・サンライフ松阪、商工会議所、県松阪庁舎
記念講演 清家清（東京芸術大学教授）『住まいにおける新和風』
記念行事 町並みゼミ10年の歩み
分科会 第1分科会：城下町—近代化と氏郷の町づくり
第2分科会：参宮街道—生活と歴史的な道路
第3分科会：商人文化—町並み保存とその拠点
ツアー 松阪市内
伊勢河崎
鈴鹿郡関宿
担当 あいの会「松坂」

第11回竹富ゼミ 「語ろう町並み、広げよう“うつぐみ”の輪」

日時 1988（昭和63）年6月4日～6日
会場 沖縄県八重山郡竹富町竹富島
竹富小・中学校体育館ほか
記念講演 外間守善（法政大学教授）『沖縄の歴史と文化—竹富を主に』
分科会 第1分科会：竹富島の昨日・今日・明日
第2分科会：都市の歴史的建造物が危ない
第3分科会：町並み運動“再”入門
特別催事 民族芸能鑑賞「島祭り」
見学会 西表・石垣離島の旅
沖縄本島建築の旅
担当 竹富島公民館（竹富島を守る会）

第12回栃木ゼミ 「生かそう蔵の街」

日時 1989（平成元）年7月1日～3日
会場 栃木市文化会館
基調講演 樋口清之（国学院栃木短期大学学長）『日本人と蔵』
特別発表 『蔵の街づくり—川越市の場合』
特別報告 田中太郎 長野県須坂市長
辻一幸 山梨県早川町長
和田正美 岐阜県白川村長
分科会 分科会A：伝統民家はいま

分科会 B 町並み運動はいま
特別行事 蔵の町サミット
ツアー A 益子—鬼怒川温泉
B 湯西川温泉—栗山村
担当 栃木蔵街暖簾会

第 13 回京都ゼミ「町並みはんなり・歴史都市」

日時 1990（平成 2）年 6 月 23 日～25 日
会場 京都会館第 2 ホール
先斗町歌舞練場
記念講演 森毅（京都大学教授）『京に暮らして』
分科会 伝建部会『どう伝えるか京の町並み』
都心部会『町衆のまち・歴史的都心の復権』
伏見部会『どう生かすか手づくりのまち伏見』
ツアー 鞍馬・京都府中心部の町並み古刹
担当 第 13 回全国町並みゼミ京都大会実行委員会

第 14 回 角館ゼミ「町並みはお祭りのところ」

日時 1991(平成 3)年 6 月 8 日～10 日
会場 角館広域交流センター
記念講演 今村昌平（映画監督）『映画制作現場雑感』
分科会 第 1 分科会：『町並みと生活』
第 2 分科会：『町並みと観光』
第 3 分科会：『町並みと自然』
シンポジウム 『歴史的と市の今日的課題』
研究発表 『町並みと町衆そしてお祭り』

第 15 回 吉井ゼミ「町並み再発見・ゆとりと調和」

日時 1992(平成 4)年 5 月 30～6 月 1 日
会場 吉井町文化会館ほか
記念講演 張錦秋（中国・建築家）『伝統的空間意識を現代にいかにかかすか』
第 15 回記念特別シンポジウム 『環境運動のなかの町並み保存』
淡路剛久／石川忠臣／片寄俊秀／斎田和弘／瀬田信哉／寺西俊一／司会・木原啓吉
分科会 第 1 分科会『町並み保存と地域文化創造』
第 2 分科会『町並み運動と行政の役割』
第 3 分科会『町並みと農村景観』

研究発表 『吉井の歳事記』

ツアー 福岡県の町並み 秋月～草野～柳川（泊）～八女

第 16 回 川越ゼミ 武州 川越町並み博「あれから百年・これから百年」

日時 1993(平成5)年8月21～23日

会場 川越市市民会館

記念講演 斉藤耕一（映画監督）『町並みを支える人びと』

歌手 刀根麻理子

トークセッション『町並みの未来を語る』

建築評論家 馬場璋造

NHK解説主幹 長井多恵子

千葉大学助教授 福川裕一

分科会 第1分科会『伝建のこれまでとこれから』

第2分科会『歴史的街区のまちづくり』

第3分科会『商いと観光と祭り』

ツアー 小江戸から大江戸へ

第 17 回 須坂ゼミ「明日にはぐくむ町並みの輪

日時 1994(平成6)年5月21～23日

会場 長野県須坂市文化会館（メナセホール）他

基調講演 市川建夫（信州短期大学学長）『信州須坂の風土と町並み』

分科会 第1分科会：『伝建と町並みのこれから』

第2分科会：『観光と文化の町並み』

第3分科会：『環境と文化の町づくり』

第4分科会：『町なみと子どもたち』

記念講演 熊本県立劇場館長・評論家 鈴木健二『暮らしの心 再発見』

ツアー 北信濃の宿場町・城下町・温泉と小布施めぐり

第 18 回 妻籠ゼミ「町並みの保存の原点を、みんなで喋り考えよう」

日時 1995(平成7)年9月8～10日

会場 南木曾町社会体育館他

記念講演 太田博太郎（東京大学名誉教授）『妻籠宿の保存を顧みて』

見学会 近代化遺産『桃助橋』他

分科会 第1分科会：『町並み保存の原点を、みんなで喋り考えよう』

第2分科会：『文化遺産の今日的意義を考える』

第3分科会：『町並みと災害－阪神大震災を教訓に』

ツアー 飛驒の町並みと上高地の旅

第19回 犬山ゼミ「みんなで考えよう、保存・育成・創造の町づくり」

日時 1996(平成8年)9月28日～30日

会場 犬山市民文化会館他

基調講演 小寺武久(名古屋大学名誉教授)

分科会 第1分科会:「都市計画と町づくり」

第2分科会:「町並みと観光」

第3分科会:「町並みと伝統文化」

第4分科会:「町並みの災害対策」

見学会 犬山城/城下町町並み/明治村

第20回 村上ゼミ「ひとなみ・まちなみ・まちづくり」

日時 1997(平成9年)5月23日～25日

会場 村上市民ふれあいセンター他

20周年特別イベント 記念座談会

分科会 第1分科会:「町並みとまちづくり」

第2分科会:「くらしと町並み」

第3分科会:「町並みと文化遺産」

第4分科会:「集え茅葺き人・未来」

ツアー 村上岩船地域

第21回東京ゼミ

日時 1998(平成10年)9月18日～20日

会場

記念講演 山田洋次(映画監督)「寅さんの愛した町並み」

報告 「東京1998—地域づくりレポート」

トーク 「日本の町並み きのう・きょう・あした」

分科会 A分科会:「近代建築の保存と活用」

B分科会:「登録文化財と町並み」

C分科会「都市緑地とスカイライン」

D分科会:「伝建地区制度の可能性」

E分科会:「スタートラインに立つ町並みづくりの現場から」

F分科会:「町並み保存のルールから憲章まで」

G分科会:「民家・町並みの保存と再生」

H分科会:「つくる育てる谷中諏方道」

- I分科会：「町づくり会社による町並み・商店街活性化作戦」
- J分科会：「東京の新発見 生活が形づくる町の風情を探す」
- K分科会：「子どもも参加できるまちの魅力発見ウォーク～マップづくり」
- L分科会：「女性とまちづくり」
- 一般講座 前野まさる（東京芸術大学教授）「まちの歴史から何を学ぶか」、
稲垣栄三（東京大学名誉教授）「歴史的町並みと暮らし」
大谷幸夫（東京大学名誉教授）「町並み保存とまちづくり」
- 基調報告 陣内秀信実行委員長

第22回全国町並みゼミ 白杵大会「まちなみ・環境・まちづくり、今ふたたび白杵から」

- 日時 1999（平成11年）10月8～10日
- 場所 白杵市民会館
- 記念リレートーク「九州、琉球からのメッセージ」
白杵16年の歩みと町並み運動の広がり
- 一般講座 「歴史的環境と民家の再生」
後藤宗俊、秋山晴子、降旗廣信
- 分科会 第1分科会：近代土木遺産とまちづくり
第2分科会：魅力ある町並み運動の進め方
第3分科会：こども・まちづくり会議
第4分科会：歴史的集落の生きる道
第5分科会：中心市街地の活性化
第6分科会：歴史遺産と文化的景観の保全
第7分科会：町並み保存のルールから憲章まで：「ほんもの」としての保存をめざして
第8分科会：伝建地区制度の可能性
第9分科会：伝える技と技術
第10分科会：エコミュージアムの実践と町並み
- ツアー
- 担当 白杵の歴史的景観を考える会（大分県白杵市）
白杵デザイン会議（大分県白杵市）

第23回全国町並みゼミ日南大会「文化財保護法50年、伝えよう文化財の町並み」

- 日時 2000（平成12年）10月6～8日
- 場所 日南市文化センター、日南市内各所
- 記念シンポジウム
第一部「伝えよう！住民が守り育てる町並みの文化」

- 第二部「育てよう！歴史を伝えるまちづくりの心」
- 分科会 第1分科会：土木遺産とまちづくり
 第2分科会：文化財建造物の活用
 第3分科会：民家の再生
 第4分科会：商店街活性化と歴史的町並み
 第5分科会：伝建制度と町並み保存憲章
 第6分科会：子どもとまちづくり
 第7分科会：町並みと観光
 第8分科会：次代に引き継ぐ景観づくり
- ツアー 薩摩の歴史と町並み
 日向の歴史と町並み
- 担当 油津堀川運河を考える会

第24回全国町並みゼミ 小樽大会「21世紀・新しいまちづくりの手法と展望」

- 日時 2001（平成13年）9月28～30日
- 場所 小樽市民センター
- 基調報告 峯山富美「小樽町並み保存運動の歩み」
- パネルディスカッション「21世紀のまちづくり運動」
- 分科会 第1分科会：町並みと観光：まちづくり再検証
 第2分科会：産業遺産の保存と再利用
 第3分科会：文化・技能の保存と継承
 第4分科会：まちづくり運動と行政の果たす役割
 第5分科会：子どもとまちづくり
 第6分科会：様々なまちづくり運動の手法
 第7分科会：伝建地区と町並み保存憲章
- 記念座談会「これからの町並み運動」木原啓吉、八木雅夫、チェスタ・リーブス
- 担当 小樽再生フォーラム

第25回全国町並みゼミ 鞆の浦大会「見ようや！ふるさとの文化：文化で生活（めし）がくえるかのう」

- 日時 2002（平成14年）9月20～22日
- 場所 県民文化センターふくやま
- 25周年記念講演 五十嵐敬喜「美しい都市をつくる権利」
- 鞆の浦紹介「鞆物語」
- パネルディスカッション：新しいまちづくり「町並みは社会資本」：民・産・官・学 協調の時代

- 分科会 第1分科会：伝建入門（円福寺）
 第2分科会：町並み憲章：若者たちはこう読み解く（地藏院）
 第3分科会：港湾遺産とまちづくり（浄泉寺）
 第4分科会：広島発信：町並みによる地元広島地域活性（幼稚園）
 第5分科会：まちづくりってなんだろう：鞆の魅力、町並みをこえて（大観寺）
 第6分科会：鞆の暮らしは新しい：郷土食から見える風景（八田保命酒醸造所前）
 第7分科会：特別分科会「20世紀から21世紀の町並み保存運動への提言」（地藏院）
 第8分科会：伝統文化の保存と継承：祭り地域社会（法宣寺）
 第9分科会：都市計画道路と歴史を活かしたまちづくり（幼稚園）
 第10分科会：朝鮮通信使の道：李朝の驛、江戸の港（福浄寺）
 第11分科会：開かれたまち並み：観光とレジャーのネットワーク（医王寺）
 第12分科会：みなと津々浦々で考える（公民館二階）
- 担当 NPO 法人鞆まちづくり工房
 ツアー 伝建地区竹原のまち並み見学と地元保存会との交流ツアー

第26回全国町並みゼミ かしはら・今井大会「再び、町並みはみんなのもの」

- 日時 2003（平成15年）9月19～21日
 場所 かしはら万葉ホール
 基調報告 伊藤ていじ（元工学院大学学長）「町並みの継承と今井のこころ」
 パネルディスカッション「21世紀のまちづくり運動」
- 分科会 第1分科会：町並みと観光：まちづくり再検証
 第2分科会：産業遺産の保存と再利用
 第3分科会：文化・技能の保存と継承
 第4分科会：まちづくり運動と行政の果たす役割
 第5分科会：子どもとまちづくり
 第6分科会：様々なまちづくり運動の手法
 第7分科会：伝建地区と町並み保存憲章
- 記念座談会「これからの町並み運動」木原啓吉、八木雅夫、チェスタ・リーブス
 担当 今井町町並み存会

第27回全国町並みゼミ 大聖寺大会「ゆったりと行こう、あったらもんと共に」

- 日時 2004（平成16年）9月17～19日
 場所 ホテルアローレ
 加賀市文化会館
 全国町並み保存連盟30周年記念式典

パネルディスカッション「連盟30年の歩み」

基調報告 西村幸夫「景観保全の最近の動向」

活動報告 埜正浩「市民主体の景観まちづくり活動について」

分科会 第1分科会：町並みは食にあり

第2分科会：町並みを五感で体感しよう

第3分科会：観光と町並み景観

第4分科会：文化財の活用と検証

第5分科会：水辺を活かしたまちづくり

第6分科会：山村の文化的景観の保存

第7分科会：城下町の歴史的資産を活かしたまちづくり

第8分科会：眺望景観の確保（食談ミニシンポジウム）

特別講演 永六輔「町並みを支えてきた職人達」

担当 歴町センター大聖寺

ツアー 松任・金沢ひがし茶屋コース

鶴来・金沢武家屋敷コース

第28回全国町並みゼミ 美濃大会「とりもどそまいか、町並みの賑わい」

日時 2005（平成17年）9月16～18日

場所 文化会館

記念講演 入船亭扇治（美濃出身の落語家）

報告 美濃の町並み保存運動の歩み

分科会 第1分科会：消したら暗闇電燈（伝統）文化

第2分科会：伝建制度と景観法

第3分科会：町家の耐震のポイントと対策

第4分科会：美濃和紙あかりアート展と美濃・紙の芸術村

第5分科会：守れ町並み！火災への挑戦

第6分科会：町並みの賑わい再生

第7分科会：美濃紙世界に発信

第8分科会：全国町並みゼミのあり方

町並み見学

担当 美濃の町並みを愛する会

第29回全国町並みゼミ 八女福島大会「未来へ継承するぞ、町並み文化」

日時 2006（平成18年）10月6～8日

場所 八女市町村会館大ホール

基調講演

- 分科会 第1分科会：住民のための歴史まちづくり
 第2分科会：暮らし文化を生かした環境づくり
 第3分科会：まちなみを次世代につなげるために
 第4分科会：民家・町家の継承とまちづくり
 第5分科会：暮らし文化の発掘と地域ネットワーク
 第6分科会：都市の歴史遺産を残す
 第7分科会：城下町の川まちづくり
 第8分科会：都市を囲むお参りの景観

盛岡大会の総括と提言：八甫谷邦明、福川裕一、渡辺敏男

担当 盛岡まち並み塾

第30回全国町並みゼミ 伊勢大会「伝えよう、心とかたちのまちなみ文化」

日時 2007（平成19年）9月14～16日

場所

基調報告 河合真如（神宮司庁広報課長）「式年遷宮と伊勢のまち」

- 分科会 第1分科会：町並み保存と技術の継承（賓日館大広間）
 梶山秀一郎（NPO 法人京町家再生研究会理事）
 第2分科会：景勝地と町並みづくり（賓日館翁の間）
 八木雅夫（呉高专教授）
 第3分科会：ものづくりとまちづくり（伊勢河崎商人館角吾座）
 中村賢一（伊勢文化舎代表）
 第4分科会：世古(路地)を生かした安心・安全まちづくり（五十鈴塾右王舎）
 八甫谷邦明（季刊まちづくり編集長）
 第5分科会：景観法と町並み保全型まちづくり（二見浦・賓日館大広間）
 浅野聡（三重大学准教授）
 第6分科会：海、川の景観と舟運を活かすまちづくり（神社かたふりの館）
 片寄俊秀（大阪人間科学大学教授）
 第7分科会：町家の再生活用と町並み文化（伊勢商工会議所）
 岡崎篤行（新潟大学准教授）
 第8分科会：文化財建造物の保存と活用（伊勢河崎商人館角吾座）
 殿塚治（栃木蔵街暖簾会事務局長）
 第9分科会：街道文化と町並み保存（五十鈴塾右王舎）
 西山徳明（九州大学教授）

町並みゼミ30回記念パネルディスカッション「町並みゼミが伝えていくものはなにか」

福川裕一＋中一夫＋上勢頭芳徳＋北島力＋岡崎直司

担当 NPO 法人伊勢河崎まちづくり衆

ツアー 伊勢街道・熊野街道に行く
神宮司庁山田工作場～伊勢街道～熊野街道～東海道を行く（一泊二日）

第31回全国町並みゼミ卯之町大会「だんだん学ぼう よもよも人づくり」

日時 2008（平成20年）10月11～13日
場所 愛媛県歴史文化博物館
分科会 第1分科会：人々のつながりと町並み文化
第2分科会：地域遺産としての学校建築の保存と活用
第3分科会：文化的景観の保存と継承
第4分科会：わらぐろ景観から農村集落を考える
第5分科会：未発掘町並みにおける地域資源の活用方策
第6分科会：町並みと観光
第7分科会：住まいの再生と町並みの保存
ゼミ討議 「地域遺産を考えたまちづくりのこれから」西村幸夫＋後藤治＋溝渕博彦
担当 地域ネット研究会 UWA

第32回全国町並みゼミ佐原・成田大会「歴史的資源を生かしたまちづくり」

日時 2009（平成21年）11月13～15日
場所 香取市佐原中央公民館
基調講演 荻谷勇雅「町並み保存運動の展開と歴史まちづくり」
分科会 第1分科会：民官学による歴史まちづくり
第2分科会：水を生かしたまちづくり
第3分科会：町並みと人並み
第4分科会：町並みを楽しむ体制づくり
第5分科会：町に活気と元気を取り戻す
第6分科会：町並みの再生と資源化
第7分科会：門前のまちづくり
第8分科会：景観をまちづくりに生かす
第9分科会：国際化と観光立国づくり
第8分科会：スポットから面への観光
担当 小野川と佐原の町並みを考える会

第33回全国町並みゼミ盛岡大会「暮らしの息づく町並み：住民による歴史まちづくり」

日時 2010（平成22年）11月5～7日
場所 岩手県公会堂
基調報告 森まゆみ「古い町並みは古い友だち：谷根千27年間の経験から」

- 分科会 第1分科会：住民のための歴史まちづくり
 第2分科会：暮らし文化を生かした環境づくり
 第3分科会：まちなみを次世代につなげるために
 第4分科会：民家・町家の継承とまちづくり
 第5分科会：暮らし文化の発掘と地域ネットワーク
 第6分科会：都市の歴史遺産を残す
 第7分科会：城下町の川まちづくり
 第8分科会：都市を囲むお参りの景観

盛岡大会の総括と提言：八甫谷邦明、福川裕一、渡辺敏男

担当 盛岡まち並み塾

第34回全国町並みゼミ飛騨市大会「つなごう歴史の町づくり：飛騨の匠の技と心を伝えよう」

日時 2011（平成23年）9月30～10月2日

場所 飛騨市文化交流センター

基調報告 藻谷浩介「土地本位制から町並み本位制へ：人口成熟下を生きる我々が次代に遺すもの」

- 分科会 第1分科会：町並みをつくる匠文化の継承
 第2分科会：点在する過去を偲ぶ建造物の保存と利活用
 第3分科会：農村の今までとこれから
 第4分科会：町並みをつくる祭文化
 第5分科会：市民参加の“元気なまちづくり”で、交流人口の増加
 第6分科会：町づくりを次の世代へ

アジアの町並み討論：丘如華＋西村幸夫

担当 飛騨市観光協会

第35回全国町並みゼミ福岡大会「地域遺産の再発見と街の魅力創出：福岡から生かそう町並みとアジア文化」

日時 2012（平成24年）11月30～12月2日

場所 都久志会館

福岡市立婦人会館

座談会 藤原恵洋＋毛利和雄ほか

- 分科会 第1分科会：都市研における歴史的町並みの保存と継承（マイヅル味噌）
 第2分科会：歴史まちづくり法を伝建制度の可能性（承天寺）
 第3分科会：アジア都市との交流を通して（太宰府館）
 第4分科会：“まち”の世間遺産を探る（西日本新聞社）

第5分科会：町並みの保存・継承と町家等の活用：空き家再生の視点から（福津市文化会館）

第6分科会：大都市における地域遺産を活かしたまちづくり（建立寺）

シンポジウム「地域遺産を守り、どう活用するか？：女性の活動現場から」

担当

ツアー 博多コース
八女コース
唐津コース
壱岐コース

第36回全国町並みゼミ倉敷大会「つながる地域文化の伝統と創造：備中の風土力の発信」

日時 2013（平成25年）9月20～22日

場所 倉敷市芸文館大ホール

基調講演 神崎宣武（旅の文化研究所所長）「町並みと旅の文化」

分科会 第1分科会：倉敷第1「うかび上がる！まちの歴史的資産活用と観光」

第2分科会：倉敷第2「伝統的な町並みと周辺環境を考える」

第3分科会：倉敷第3「町並み保存・活用の望ましい方向」

第4分科会：玉島「まちなみを活かし、暮らし続ける」

第5分科会：高梁「町家の再生と利活用」

第6分科会：浅口「町家の活用による伝統文化の再生と伝承」

第7分科会：矢掛「歴史的町並みを活かした賑わいのまちづくり」

担当 倉敷町家トラスト

ツアー A：高梁、吹屋と新見、勝山町並み見学
B：矢掛、鴨方、玉島町並み見学
C：本島、真鍋島、鞆の浦瀬戸内クルージング

第37回全国町並みゼミ鹿島・嬉野大会「つなごう歴史遺産 みがこう町並み文化」

日時 2014（平成26年）11月7～9日

場所 呉竹酒造東蔵（鹿嶋市浜町）

嬉野市社会文化会館リバティ（嬉野市塩田津）

鼎談 鈴田滋人＋高島忠平＋刈谷勇雅

分科会 第1分科会：町並み保存・活性化活動の入門

第2分科会：地域に根ざした産業とまちなみ：観光ツーリズム

第3分科会：防災とコミュニティ

第4分科会：歴史遺産を次世代へ繋ぐ、全国の仲間と共に：子どもと共に考えよう
これからのまちづくり

第5分科会：空き家の活用・再生を考える
第6分科会：町並みの保存と技術の継承
第7分科会：暮らしと文化に根ざしたまちづくり：地域遺産の活用
全国町並み保存連盟 40周年記念行事：座談会「町並みのこれまでとこれから」
担当 肥前浜宿水とまちなみの会

第38回全国町並みゼミ豊岡大会「ふるさとよみがえりへの想い：コウノトリ舞う豊岡にて」

日時 2015（平成27年）6月12～14日
場所 城崎国際アートセンター
出石永楽館
基調報告 西村幸夫（東京大学教授）「まちに刻まれた想いと生活文化を未来に」
分科会 第1分科会：歴史的建築物や町並みの活用によるにぎわいの創出：町並みを今に活かし、使い続ける（志賀直哉ゆかりの宿「三木屋」）
第2分科会：災害復興から学ぶ町並みづくり：安全と景観の調和（元禄元年創業「ゆとうや旅館」）
第3分科会：歴史遺産の復活と活用にかけるまちづくり：懐かしい芝居小屋で賑わうまち」（出石永楽館）
第4分科会：活気と美しさをあわせもつ町並みづくり：暖簾が似合う町並みへ（出石酒造第一酒造庫）
第5分科会：復興建築群とあゆむ人々の暮らし：産業と文化遺産を活かしたまちづくり（豊岡稽古堂）
第6分科会：海と共に暮らす町：焼き杉板の町並みの再生
特別企画 全国町並みゼミ歴代開催地「それぞれの町並み」
担当 城崎温泉町並みの会、出石城下町を活かす会

第39回全国町並みゼミ 大内・前沢大会「町並みを次の世代へ：保存と暮らしの共存」

日時 2016年9月9日（金）・10日（土）・11日（日）
場所 下郷町・下郷ふれあいセンター（開会式）
南会津町・御蔵入交流館（全体会）
対談 町並みを次の世代へ（西山徳明、吉村徳男、和田正人）
授与式 峯山富美賞（松波秀子さん）
分科会 第1分科会：町並みの保存と活用：町並み保存は住民の味方か？（旧大内分校）
西山徳明、藤原義則
第2分科会：人が住み続けられるまち（大内集会所）
和田正人、吉村徳男、阿佐伊拓
第3分科会：自主防災と持続可能なまちづくり（前沢交流館）

後藤治、関澤愛、江島祐輔、嶋康太

第4分科会：農村集落の生き残りかた（前沢曲家資料館）

齋藤行雄、三井所清典、河原田光靖、星廣政

第5分科会：よそ者の目で田島の魅力を掘り起こす（御蔵入交流館）

殿塚治、藻谷浩介

担当 大内宿保存会

第40回 名古屋有松大会 「町並みは私が守る、みんなのものから40年」

日時 2017年11月17日・18日・19日

場所 1日目（名古屋国際会議場・レセプションホール）

基調講演 須田寛（東海旅客鉄道株式会社相談役）「日本の観光 きのう・きょう・あす」

分科会 第1分科会：これからの町並み保存～守る×活かす×育てる×創る×繋ぐ～（有松・鳴海絞会館）

高橋徹、西村幸夫、成田治、北島力、椎原晶子

第2分科会：伝統産業の継承と町並み（竹田家住宅土蔵）

増井正哉、竹田嘉兵衛、中村泰典、若林剛之

第3分科会：町並みと山車・まつり（祇園寺）

浅野聡、大森洋子、本田雅巳、柳七郎、服部吉右衛門亜樹

第4分科会：歴史文化を活かしたまちづくり（桶狭間公民館）

宗田好史、梶野泉、吉村耕治、香山篤美、山内健資

第5分科会：歴史的資産のネットワーク（建中寺徳興殿）

岡崎篤行、西尾典祐、伊藤善雄、大倉宏、内藤英治

第6分科会：近代化遺産の保存と活用（相応寺）

藤川昌樹、高木備太郎、森本アリ、関由有子、本多義忠

第7分科会：城下町のまちづくり（名古屋国際センター）

柴田いづみ、福谷正男、海野伸、富士川一裕

特別企画 全国町並みゼミ 40周年記念行事

授与式 峯山富美賞（丘如華さん）

ツアー 有松コース、犬山コース、足助コース

第41回全国町並みゼミ 長野松代・善光寺大会 「町並みを守って歴史文化のまちづくり：次世代へ・未来へ・伝える・つなぐ」

日時 2018年11月16～18日

場所 ロイヤルホテル長野

基調講演 西村幸夫（神戸芸術工科大学教授）「日本における町並み保存の歴史と今後の展望：松代から考える」

- 報告 町並みをめぐる最近の動き、開催地からの報告、各地からの活動報告
- 分科会 第一分科会：善光寺門前町の場合：ここ 10 年の動き・まちとひとと文化
佐久間康富＋穂刈耕介、北島力＋松橋寿明、宮本圭、増澤珠美
- 第二分科会：歴史的景観の保存と継承：泉水路と町並み景観の保存をめざして
佐々木邦博＋清水重敦＋小幡知之、藤本智教
- 第三分科会：歴史的建造物の保存と活用：貴重な歴史的遺産の保存と活用
浅野聡＋吉澤政己、宮下健司＋秋山修志、中村雄一郎、原田和彦、海干野成央、小俣光弘
- 第四分科会：歴史文化を活かした観光まちづくり：文化財保存と観光の調和
鈴木伸治＋宮川直美、青木一男、徳嵩雄司、降旗浩樹、曲尾正子
- 第五分科会：城下町の町並みを活かしたまちづくり：町並み景観賞と空家リノベーション
中村泰典＋上田琢也、後藤洋平、関由有子、長尾晃、山本薫
- 授与式 峯山富美賞（黒田睦子さん）
- 特別企画 長野県内の町並みネットワーク促進に向けて
- 担当 夢空間松代のまちと心を育てる会

第 42 回全国町並みゼミ 川越大会 「歴史都市のこれから：過去に学び、今を見つめ、未来を思い、共に歩む」＋川越都市景観シンポジウム

日時 2020 年 1 月 31 日～2 月 1 日

0 日目（イベント、東京文化財研究所地下 1 階セミナー室）

町歩き＋トークセッション「谷中を通して最先端の歴史まちづくりを考える」

1 日目（町歩き＋分科会）

分科会 第 1 分科会：歴史的都市環境をどう守るか：歴史的街並みを維持発展させていくための法制度は如何に（川越大蔵・茶陶苑）

大倉宏＋荻谷勇雅＋谷口栄＋小坂謙介＋清水重敦＋加藤忠正

第 2 分科会：町並みはみんなでつくる！：良好な町並みを誘導する住民主体のシステムを考える（喜多町会館）

西村幸夫＋小島富佐江＋阿佐伊拓＋原知之

第 3 分科会：景観まちづくりがもたらしたもの：住民と来訪者の良好なあり方とは？（連聲寺講堂 2 階）

中村泰典＋丹羽結花＋波多周＋牛丸岳彦＋小峰春彦＋根岸督好

第 4 分科会：伝統的な技と心の継承・育成：歴史的な町並みや建物を次世代に引き継いでいくために（小島家住宅）

齋藤行雄＋秦野高彦＋阿部知子＋朽木宏＋大竹真紀子＋櫻井理恵

第 5 分科会：魅力的な建造物を使いこなそう：歴史的建造物の魅力の引き出し（連

聲寺講堂 1 階)

佐久間康富+時岡壯太+竹村光雄+荒木牧人

第 6 分科会：地域物件の個性を活かす編集力とエリアマネジメント実践ワークショップ (Chabudai ちゃぶだい)

國廣純子 (コーディネータ)

懇親交流会 (ラ・ボア・ラクテ)

2 日目 (全体会)

ブロック会議

開会式

基調講演 陣内秀信 (法政大学江戸東京研究センター特任教授) 「歴史都市を活かしたまちづくり：イタリアとの比較とこれからの日本・川越」

各地からの報告

分科会報告

峯山富美賞贈呈式 (森まゆみさん、仰木ひろ子さん、山崎範子さん)

閉会式

担当 川越蔵の会

第 43 回全国町並みゼミ 桜川市真壁大会 「これからの町並み保存とは？：たび重なる災害からの復旧と、新しい生活様式の中で」 +

日時 2020 年 11 月 22 日 13:00~17:00 (オンライン)

開会式

基調講演 河東義之 (国立小山高専名誉教授) 「桜川市真壁の震災被害と復旧：課題と展望」

真壁の町並み紹介

パネルディスカッション：これからの町並み保存とは？：たび重なる災害からの復旧と、新しい生活様式の中で

藤川昌樹+寺崎大貴+武村実+川島孟+吾妻周一

閉会式

担当 ディスカバー真壁

第 44 回全国町並みゼミ 奈良大会 「まちの資産のいかしかた：なにを、だれが、どのように」

日時 2021 年 11 月 12 日 (金) ・13 日 (土)

1 日目 (分科会)

分科会 第一分科会：[まちづくり制度] 歴史的な町並みの保全に向けた制度の在り方：その課題と展望 (奈良市ならまちセンター)

鈴木伸治+中村泰典+小嶋富佐江+佐々木伸夫

第二分科会：〔建築物〕伝統民家の継承の考え方：暮らしの変化に合わせた取り組み（奈良公園バスターミナル）

北島力＋大槻洋二＋藤岡龍介

第三分科会：〔生活文化〕生活文化を継承する手法と課題：「なにを」残すのか（奈良市中部公民館）

清水重敦＋神野武美＋足立亨＋大倉宏

第四分科会：〔継続性〕まちづくり活動の経済的持続性：「どのように」ビジネスを取り込むのか（奈良市音声館）

阿部大輔＋齋藤行雄＋松井敬代＋小田切俊彦＋藤岡俊平

第五分科会：〔担い手〕町の良さの伝え方：ニューヒーローの思い（奈良市ならまちセンター）

麻生美希＋荒牧澄多＋尾崎達也＋迫一成＋畑本康介＋高松明弘

交流会 峯山富美賞贈呈式（岸川多恵子さん、小島富佐江さん）

2日目（全体会）

開会式

オープニングアクト：朗読劇「町家よ語れ」

奈良町まちづくりシンポジウム：まちの資産のいかしかた：なにを、だれが、どのように

西村幸夫＋増井正哉＋倉橋みどり

事例発表 奈良からの報告

閉会式

担当 公益社団法人奈良まちづくりセンター

第45回全国町並みゼミ 新潟市大会 「市民の活動でつなげる歴史まちづくり：みなとまち新潟から考える」

日時 2022年6月11日（土）・12日（日）

イベント

①リレートーク「全国町並み保存連盟・全国町並みゼミと私」

6月10日（金）16:00-17:30、砂丘館

②堀川久子「空間を舞う」

6月11日（土）10:00-11:00

北方文化博物館新潟分館

1日目

まちあるきと分科会 12:30-17:30

第一分科会：港町と水辺のまちづくり（勝念寺）

まちあるき：日和山、寺町、堀跡など港町ゆかりの場所

大森洋子＋岡本哲志＋小笠原真結美＋磯田一裕＋川上伸一

第二分科会：住民による町並み保全制度の選択（北前船の時代館・新潟市指定文化財旧小澤家住宅）

まちあるき：回船問屋や網元屋敷の残る下町（しもまち）

松井大輔＋村上佳代＋梅宮路子＋清水徹＋高須雅史

第三分科会：花街のまちづくりと文化的景観（料亭かき正はなれ）

東・西新道に残る古町花街

麻生美希＋川上光彦＋神戸啓＋久保有朋＋あおい

第四分科会：歴史的環境と芸術文化（新潟市美術館講堂）

まちあるき：近代に開けたお屋敷町西大畑・旭町

大倉宏＋鈴木伸治＋椎原晶子＋吉原悠博＋堀川久子

第五分科会：門前町の商店街に若者が係わる理由（上古町の百年長屋 SAN 2 階）

まちあるき：町建て以来の門前町・上古町

浅野聡＋中村泰典＋迫一成＋金澤梨花子＋中村出

第六分科会：路地の町をどう安全に、魅力的にしていけるか

まちあるき：もう一つの港町沼垂と迷路の町 天明町

渡辺齊＋北島力＋後藤大輔＋関谷浩史＋天本浩未

地域ブロック別会議 18:30-19:00

交流会 19:00-21:00（着席・弁当）ホテルイタリア軒

2 日目

全体会 9:00-12:45（新潟市民プラザ）

古町芸妓の舞／新潟市における歴史まちづくり／各地からの報告／分科会報告／峯山富美賞贈呈式など

にいがた美しいまちなみフォーラム 2022＋第 16 回新潟県まちなみネットワーク新潟市大会

14:00-17:15

基調講演 岡本哲志「港町・新潟の価値と可能性：川と海の結節点に描かれた都市空間の履歴

パネルディスカッション「歴史をいかしたまちづくり」

西村幸夫＋岡本哲志＋駒木定正＋中野奈美子＋野内隆裕

オプションバスツアー

担当 新潟まち遺産の会